

博士学位論文

植物に関する日中両語表現についての認知言語学的研究

成蹊大学大学院文学研究科

日本文学専攻

D214201

銭秀双

目次

第1章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 認知言語学とは.....	5
1.3 本論文の目的.....	13
1.4 本論文の研究対象.....	14
1.5 本論文の考察方法.....	14
1.6 本論文の構成.....	15
1.7 期待される研究結果.....	16
第2章 理論的背景.....	17
2.1 はじめに.....	17
2.2 認知言語学.....	17
2.2.1 認知言語学の誕生と発展.....	18
2.2.2 認知言語学における「認知」と「言語」.....	22
2.3 レトリック.....	24
2.3.1 佐藤のレトリック観.....	24
2.3.2 瀬戸のレトリック観.....	26
2.4 メタファー.....	27
2.4.1 メタファーの機能と特徴.....	29
2.4.2 概念メタファー.....	30
2.4.3 メタファーの経験的基盤.....	31
2.5 比喩.....	32
2.5.1 比喩の効果.....	33
2.5.2 比喩の種類.....	33
2.6 コーパス.....	35
2.6.1 コーパスの相違について.....	36
2.6.2 コーパス研究の利点と諸問題.....	37
2.6.3 コーパス言語学.....	38
2.7 命名論.....	40

2.7.1 名の体系と構造	41
2.7.2 命名とメタファー	43
2.8 本章のまとめ	44
第3章 概念メタファー《人間は植物》の日中対照研究	45
3.1 はじめに	45
3.2 先行研究	46
3.2.1 英語による表現例	46
3.2.2 日本語による表現例	47
3.3 現代中国語における植物としての人間	55
3.3.1 「何かを達成すること・成果をあげることを目的とした人間の営み」	55
3.3.2 「人間の一生の諸段階」	56
3.3.3 「女性の生長・成熟の過程」	56
3.3.4 「心・精神の状態の変化の過程」	57
3.3.5 「愛情の変化過程」	57
3.3.6 まとめ	58
3.4 「種」 / 〈种子〉 に対する異なる捉え方	59
3.5 「開花」 / 〈开花〉 に対する異なる捉え方	60
3.6 本章のまとめ	62
第3章用例一覧	63
第4章 会話談話から見る概念メタファー表現《人間は植物》	67
—中国語の四字熟語を中心に—	67
4.1 はじめに	67
4.2 概念メタファーの定義づけ	69
4.3 先行研究	70
4.3.1 英語文献	70
4.3.2 日本語文献	71
4.3.3 中国語文献	73
4.4 問題提起と研究目的（対象）	75
4.4.1 問題提起	75
4.4.2 研究目的（対象）	76

4.5	考察.....	78
4.5.1	データの扱い.....	78
4.5.2	考察方法.....	79
4.5.3	考察過程.....	80
4.6	本章のまとめ.....	88
	第4章用例一覧.....	89
第5章	ことわざに見られる比喩の日中対照研究.....	94
	—植物の生長に関わることわざを考察対象として—.....	94
5.1	はじめに.....	94
5.2	植物の生長段階に関することわざ.....	95
5.2.1	ことわざの定義づけ.....	95
5.2.2	日本語における植物の生長段階に関することわざ.....	96
5.3	日本語におけることわざの比喩.....	98
5.3.1	表現形式から見ることわざの比喩.....	99
5.3.2	構成要素から見ることわざの比喩.....	100
5.3.3	全体表示と文脈から見ることわざの比喩.....	102
5.4	中国語におけることわざの比喩.....	105
5.4.1	表現形式から見ることわざの比喩.....	106
5.4.2	構成要素から見ることわざの比喩.....	107
5.4.3	全体表示と文脈から見ることわざの比喩.....	107
5.5	本章のまとめ.....	109
	第5章用例一覧.....	111
第6章	概念メタファー《メンタルは植物》の「まだら」問題について.....	114
6.1	はじめに.....	114
6.2	「まだら」問題に関する先行研究.....	115
6.2.1	《理論は建物》の使われている部分と使われていない部分.....	115
6.2.2	「まだら」問題という名付け.....	116
6.2.3	「まだら」問題が生じた要因について.....	116
6.3	問題提起、調査目的、仮説.....	118
6.3.1	問題提起.....	118

6.3.2 調査目的	118
6.3.3 仮説	119
6.4 調査	119
6.4.1 植物の概念メタファーについて	120
6.4.2 調査方法と調査手順	121
6.4.3 調査内容と調査結果	122
6.4.4《メンタルは植物》の容認の度合いについて	130
6.5 本章のまとめ	131
第6章 用例一覧	132
第7章 中国語母語話者による日本語メタファー表現の比喩解釈	136
7.1 はじめに	136
7.2 先行研究と問題提起	136
7.2.1 先行研究	136
7.2.2 問題提起	138
7.3 調査	138
7.3.1 調査対象	138
7.3.2 調査内容	138
7.3.3 調査方法	140
7.3.4 仮説	140
7.4 調査の結果	140
7.4.1 メタファー表現の難易の序列	141
7.4.2 メタファー表現の比喩解釈	143
7.4.3 文脈の影響	146
7.5 第二言語教育・習得と異文化間コミュニケーション	147
7.6 本章のまとめ	150
付録	152
第8章 命名論から見る中国語茶飲料と化粧品の名詞特徴	171
8.1 茶飲料の名詞について	171
8.1.1 先行研究	171
8.1.2 命名動機	172

8.1.3 命名の認知的な考察	173
8.1.4 問題提起と研究目的	178
8.1.5 調査	179
8.1.5.1 調査データ	180
8.1.5.2 茶飲料の命名特徴	182
8.1.6 茶飲料の命名に関する「表示性」と「表現性」	183
8.1.6.1 ブランド名の表示性	184
8.1.6.2 シリーズ名の表示性	185
8.1.6.3 商品名の「表示性」と「表現性」	186
8.1.7 まとめ	188
8.1.8 茶飲料の命名モデル	189
8.1.9 おわりに	191
8.2 化粧品のあだ名について	191
8.2.1 考察対象	194
8.2.2 データ収集	195
8.2.3 データ分析	196
8.2.3.1 化粧品ブランドに対する中国語のあだ名	196
8.2.3.2 化粧品品目に対する中国語のあだ名	199
8.2.4 まとめ	200
8.3 本章のまとめ	202
第9章 結論とまとめ	205
9.1 本論文の結論とまとめ	205
9.2 今後の課題	211
参考文献	213
研究書籍・論文	213
辞書	218
調査資料	218
謝 辞	220

本論文の第3章、第4章、第5章、第6章、第7章、第8章は、以下の論文に基づき、その後の研究結果を加味して、加筆修正を施したものである。

第3章 2019年5月「概念メタファー《人間は植物》の日中対照研究」

『日本認知言語学会論文集』19 435-441.

第4章 2023年3月「会話談話から見る概念メタファー表現《人間は植物》—中国語の

四字熟語を中心に—」

『成蹊人文研究』31 1-22.

第5章 2019年3月「ことわざに見られる比喩の日中対照研究：植物の生長に関わるこ

とわざを考察対象として」

『成蹊國文』52 68-55.

第6章 2021年5月「概念メタファー《メンタルは植物》の「まだら」問題について」

『日本認知言語学会論文集』21 66 - 78.

第7章 2020年12月「中国語母語話者による日本語メタファー表現の比喩解釈」

『日本語用論学会論文集』15 65 - 72.

第8章 2022年3月「命名論から見る中国語茶飲料の名称特徴」

『成蹊人文研究』30 13 - 24.

「凡例」

- (1) 用例番号は、項目ごとに通し番号を付す。
- (2) 図表番号は、章ごとに通し番号を付す。
- (3) 注は、脚注とする。なお、注の番号は、全章を通じての通し番号である。
- (4) 本論文において、〈 〉を付した語句・表現は、中国語または英語を示す。
- (5) 中国語・英語の日本語訳は、特に明示のない限り、筆者による。
- (6) 引用の内容を除き、外国著者の氏名がその国の言語表記と日本語表記と両方ある場合、その国の言語表記に統一する。

第1章 序論

1.1 はじめに

本論文のタイトルは「植物に関する日中両語表現についての認知言語学的研究」である。まず、「認知」についての規定を代表的な論者のものを通して提示する。

Lakoff (1987) は、認知科学理論について次のように述べている。

認知科学は多くの学問分野から心というものについての知見を統合するという新しい分野であり、その関わる分野は、心理学、言語学、人類学、哲学、コンピューター科学、などにわたっている。理性とは何か、人は自らの経験に基づいて如何に意味づけを行なうのか、概念体系とはどのようなものであり、またどのように体系化されているのか、人はすべて同一の概念体系を使用するものなのか、もしそうならば、その体系とは如何なるものか、あるいは、もしそうでなければ、すべての人間の思考の仕方に共通なものとしては一体どのようなものがあるのか—認知科学は、こういった問いかけに対して詳細な解答を求めるものである。問いかけ自体は新しいものとは言えないとしても、最近得られた答えのあるものは新しいものなのである。

Lakoff (1987) [池上嘉彦・河上誓作ほか(訳) (1993: ix)]

Lakoff (1987) によれば、「認知」ということばは実際幅広いものであり、「認知」は人々の心、思考、経験と関わっていることである。

Osherson and Lasnik(1990: xi) では、〈Cognitive science is the study of human intelligence in all of its forms, from perception and action to language and reasoning. The exercise of intelligence is called cognition〉と記されている。

(訳：認知科学は、洞察や行動から言語や推論まで、人間の知能をあらゆる形から研究する学問である。知能の運用は認知と呼ばれる。)

同じように、人々の静的な洞察も動的な行動もすべて認知科学に囲まれていることが述べられている。つまり、認知科学は幅広い分野にわたっていることがわれわれに伝わって

くる。

なお、日本語文献では、辻 (1991) と辻 (2013) においては、「認知」について以下の
ように記している。

ここで述べる認知とは、人間が生得的・経験的であるとを問わず、獲得した知識や能力
を基盤に、外からの刺激（すなわち情報）を、自身の必要に応じて選択的に受容・処理
して、利用し、さらに新たな知識として蓄えるような、能動的且つ主体的な情報処理
の活動を意味する。重要な点は、獲得した知識や能力が基盤となっていること、そし
て、様々な制約がある中であっても主体性があることである。人間の認知活動は、刺
激に対する定型的な反応だけではなく、自身の既存の知識や経験に依りながら、能動
的な情報処理活動を遂行するということである。人は様々な情報を「図」と「地」に
自動的に振り分ける。諸々の情報すべてを同等に扱うことはしない。

辻 (1991 : 46)

認知に対する解釈について、辻 (1991) は人々の情報処理活動（能力）に重きを置く。
これについて、「こういった観点で認知の研究を行う領域を含めて、広く人間の「知」を
研究対象とする分野を認知科学 (cognitive science) と呼ぶ」と辻 (1991) が定義して
いる。

引き続き、辻 (2013) では、以下のように述べられている。

人間が物事を知り、生活体として生きるために必要な構造と心的過程を有するシステ
ム (=系) の営みが認知である。日本語では物事を知る、理解するという意味で、認
識という哲学的用語が従前より使用されていた。cognition もラテン語まで遡れば「知
ること」を意味する。日本語で「認知」という用語を学術用語として使うようになった
のは認知科学や認知心理学という学問領域が 20 世紀半ばに盛んになってからであ
る。

辻 (2013 : 263)

こちらでは、日本語で「認知」という用語の使用のきっかけが論じられていると同時に、
人々の心的過程を有するシステムの営みが認知であることが、辻 (2013) においては論じ

られている。おそらく辻 (2013) の観点のほうが Lakoff (1987) のものより近いと考えられる。

また、中国語の文献では、田运 (1996) は、「認知」について次のように定義している。

認知，在思维科学中，指直接依靠主体感知能力和思维能力，而不借助实践手段认识客观事物的过程，包括初认和再认。

田运 (1996: 93)

(訳：認知、思考科学の中、直接に主体の感知能力や思考能力に依頼し、実践手段を借りずに客観的な事物を理解する過程であり。初認と再認が含まれている。)

田运 (1996) では、認知主体自らの感知能力と思考能力を強調したうえで、認知に対する「初認」と「再認」の区分を述べている。

さらに、田运 (1996) では、「ある犬を初めて見た例」が取り上げられている。「ある犬を初めて見て、その犬は「エスキモー犬だ」と教えられ、これはすなわち「認知の中の初認」のことである。そして、人は既存の文献を読んで、エスキモー犬に関する更なる情報の獲得などは認知活動の範疇に属する」と田运 (1996) では説明されている。

なお、上述に加え、田运 (1996: 93) においては「実践性認識」についての論述は「人々は解剖、観測、トレーニングなど、実践的な手段を通して、エスキモー犬に対する知識をさらに獲得することは、直接的に対象に対する認識活動を行うということである。かつ、これが認識の中の要因の一つである。これらのような認識活動を「実践性認識」と呼ばれる」のようにまとめられている。

田运 (1996) の述べたように、「認知」より「認識」という概念のほうが幅広いという観点が出されている。「認知」及び「実践性認識」は「認識」の中に含まれると田运 (1996) は指摘している。

さらに、王寅 (2007) では、「認知」について以下のように述べている。

認知，也是译自英语的 Cognition¹，据《辞海》（1989，1999）的解释，就是认识，指人类认识客观事物，获得知识的活动，包括知觉，记忆，学习，言语，思维和问题解决等过程。在 1979 年版的《辞海》中还只有“认识”，而没有“认知”这个词条，这一译名是随着 20 世纪 60-70 年代后在西方兴起的“认知心理学”、“认知科学”、“认知语言学”而逐步被我国学者所使用的，到 1989 年版才收入“认知”、“认知科学”、“认知心理学”，到 1999 年版又增加了“认知人类学”，“认知”这一术语才在我国现代学术界逐步流行开来。

王寅（2007：4 - 5）

（訳：「認知」、英語からの訳語である。中国の漢語辞典『辞海』（1989，1999）の解釈では、「認知」はつまり「認識」のことであり、人類は客観的な事物に触れ、知識を獲得する活動、知覚、記憶、学習、言語、思考、および問題を解決する過程のことである。1979 年版の『辞海』では、「認識」は載せてあるが、「認知」という用語はまだなかった。20 世紀 60、70 年代ヨーロッパにおいて「認知心理学」、「認知科学」、「認知言語学」の発展に従い、我が国の学者に使われるようになってきた。なお、1989 年版の『辞海』に、「認知」、「認知科学」、「認知心理学」が収録され、1999 年版の『辞海』では、「認知人類学」という用語が追加され、これにより、「認知」という述語は我が国の現代学術界に流行り始まった。）

以上で、「認知」に対して、まず、Lakoff（1987）や Osherson（1990）はそれぞれ「認知」と「人の身体経験」、「認知」と「知能」の関わりを強調している。また、辻（1991）、辻（2013）では、「認知」を「情報の受容・処理・再構成の活動である」、「心的過程を有するシステムの営みである」と解釈されている。さらに、「認知」は「内在的な心理過程」、「客観的事物を理解する過程」、「人々客観的な事物に対する様々な営みのこと」などと中国人研究者より説明されている。つまり、「認知」は抽象的な概念であるが、人々の動的な活動や営みと深く関連している。また、「認知」は幅広い概念であることが分かる。「認知」は「知能」と関わりしており、人々は自分で外部との触れあいにより生じ

¹ Cognition はラテン語の cognition がその由来である。
the action or faculty of knowing, perceiving, conceiving, as opposed to emotion and volition という意味である。

たものに対する情報処理の活動、及びそれに対する心理的な思考過程を指している。

それでは、「認知言語学」はどのようなものか。

1.2 認知言語学とは

Taylor(2002)では、「言語は人々の認知を構築するのに、切り離せない一部であり、言語現象に対する研究分析のいずれも人々の認知能力に基づいたものである。これが最も重要な観点の1つである。そのゆえ、認知言語学は認知の角度から「言語を習得する意味は何か」、「言語はどのように習得されたのか」、「言語はどのように応用されたのか」のような問題を解決するのが目標である」と述べられている。

また、Taylor・瀬戸(2008)では、認知言語学と認知文法の区別について以下のように述べられている。

①認知言語学は、現代言語学の大きな流派の名称である。ことばは人間の認識の根幹であり、言語現象の正確な記述は人間の認知能力についての知見に照らして行うべきだ、という見方にもとづく。認知言語学は、言語能力、言語習得および言語使用についての認知論的に妥当な説明を目指す。

②認知文法は、特定の言語理論を表す名称である。認知文法は、より広い認知言語学のなかに位置づけられる。認知文法は、独自の用語、記述法および図式をもつが、認知言語学の基本的前提を受け継ぐ。

Taylor・瀬戸(2008:5)

上述からわかるように、言語の習得、言語の応用にあたって、認知の角度からの問題解決が目標で、かつ、認知の角度から妥当な説明をつけることは認知言語学の範囲に属する。また、よく耳にする認知文法は、認知言語学カテゴリーの一種であることを Taylor・瀬戸(2008)において指摘されている。

吉村(1995)では、「認知言語学(Cognitive Linguistics)は1980年以降に発展してきた新しいタイプの言語研究である」と述べられ、かつ、認知言語学を二つの側面からの意義づけが行われている。

ひとつは、言語の合理論的見解に対峙するものとしての経験論的言語観であり、もうひとつは認知心理学からの影響についてである。

吉村 (1995 : 26)

こちらでも吉村 (1995) による「認知」の概念を見てみよう。

認知言語学でいう「認知」とは、概略、人間がそれまでに獲得した知識や能力をもとに、新しい経験を主体的に捉え、意味づけし、かつそれに対して適切に情報処理が行われるところの精神の諸活動を指して言う。

吉村 (1995 : 26)

そこで、認知言語学に関して、吉村 (1995) では、以下のように述べられている。

認知言語学の立場からすると、言語についてもその本質的側面がこうした認知に関わる種々の原理やプロセスに基礎づけられ(grounded)、かつ動機づけられて(motivated)存在するものであると見なす立場が生じてくる。こうした立場からの言語研究を総称して一般に認知言語学と呼んでいる。

吉村 (1995 : 26)

また、吉村 (1995 : 27) では、「カテゴリー化やプロトタイプ認知などは認知の一特性であり、これらの特性が言葉の組み立て方や役割に非常に重要な仕方で関わりを有している」と述べられている。さらに、吉村(1995)では、Lakoff and Johnson(1980)、Lakoff (1987)の言語観の紹介が行われている。

Lakoff and Johnson (1980) 、Lakoff (1987) が唱える経験基盤主義的な言語観に従えば、そこにおいて最も重視される概念は経験という概念であり、また経験とそれがもたらすところの認知上の概念形成の問題であり、更に、それらと言語の構造化との関わりの問題である。言い換えれば、環境と人間の主体性との相互作用、その相互作用の結果生み出される経験、その経験を経て生じるさまざまな概念、そうして生み出された諸概念が言語形成に与える影響などが強調されるわけである。こうした考え方は、言語の本質的な側面が、経験を介した事物や事態の理解様式に関連づけて捉えら

れるべきであるということを表明しており、その観点から言えば、合理論的な言語観から経験論的な言語観への移行を含意していると言うことができる。

吉村 (1995 : 27)

吉村 (1995 : 27) によれば、Lakoff らが打ち出しているのは、「経験論的な理性観のこと」である。

すなわち、世界には人間の身体性を通しての現実、すなわち経験が存在し、それが概念に制約を課すことによって新たな経験が生まれ、そうした経験のダイナミズムの中から相対的な理性が生み出されるといった経験主義的な理性観である。そして、言語もこうした理性的活動のひとつと見なされるので、その意味で Lakoff の主唱する認知言語学は、特に「経験基盤主義的 (experientialistic)」な言語観と称されている。

吉村 (1995 : 27 - 28)

このように、吉村 (1995) の論述に対し、のちに述べる「身体経験」と同じことを指していると考えられる。

一方、「経験論的な理性観」に対し、吉村 (1995) は、「人間の生得的資質」も重視しているようである。

こうした経験論的な言語観に立つ場合でも、人間の知識の中の生得的資質の存在を完全に否定するというわけではない。むしろ、生成文法の言語観と鋭く対立する点は、言語の本質的側面に関わりを持つような知識の多くが、生成文法の説く生得性によって生じてくるものではなく、環境との相互作用を通して人間が主体的に獲得する種々の経験の相 (dimensions) に動機づけられているという点にある。

吉村 (1995 : 28)

荒川・森山 (2009 : 5) では、「ことばを作るためには、感覚を通じての身体経験によって、周囲の現実を切り分けていくことが必要になる。そして、この「身体経験を通じての世界の切り分け」こそ、この本で言う「認知」ということばの意味になる」と述べられている。

また、荒川・森山 (2009 : 5) には、「言語学はことばの研究だから、「認知+言語学」

がどういふものか」について、「人が夏の日の訪問の際、冷たいジュースでもてなされた経験を「冷たい歓迎」ではなく「暖かい歓迎」と呼ぶ理由も、少しつかめるだろう」といふ例が示されている。

さらに、荒川・森山（2009：5）によると、「認知ということばは、この本のキーワード中のキーワードだから、この語に限っては、もう少し意味を詰めていきたい」と述べられている。以下、彼らの取り上げられた例を見てみよう。

認知とは、知覚、記憶、思考などの総称だ。

例えば、秋には公園で枯れ葉が舞い落ちる。

散歩中の誰かが、それを認めたでしょう。

目の前を枯れ葉が舞い落ちるのを見ても、乾いた葉を踏みしめた時の音を聞いても、あるいは葉を踏みしめた時の感じでもいい、自分の感覚で認めたとき、認知は始まる。人によっては、すぐにそれを忘れてしまう人もいるだろう。

逆に、その光景に秋らしさを感じて、長く覚えている人もいるだろう。

中にはそこに命のはかなさを重ね合わせ、詩を書く人もいるかもしれない。

少しだけ専門的に言えば、認知とは「外界の情報を脳が取り入れ、それに基づいて外界に適応するために行う、脳内の情報処理過程」だ。

荒川・森山（2009：5）

さらに、認知言語学に対する解釈について、辻（2013）を参考にしたい。

「認知言語学」とは、認知との関わりから言語を探究し、もって人間の「言語・心・知」を明らかにすることを目標とする言語学・認知科学の一分野である（辻 2013：272）。

辻（2013）によれば、認知言語学の萌芽は、1970年代の言語学・心理学・人類学・神経科学をはじめ、多くの分野における認知的な研究に遡るが、成立は1980年代になってからである。

また、同じように、認知言語学にしたがって、辻（2013）においても、「人々の身体経験」を重視している。辻（2013）では、次のように述べられている。

認知言語学は感覚運動系や一般認知系とのダイナミックなやりとりによって創発する言語の諸側面に焦点を当てるため、一般に身体性を重視し、経験基盤主義に依拠する。

従って、認知言語学は、「認知の営みがいかにして言語を作り上げているのか」、あるいは逆に「いかに言語が認知のあり方を特徴づけているのか」、さらには「いかにヒトが言語を構築し、豊穡な知情意の世界を表現し作り上げているのか」というような観点から、言語と認知、ひいては言語文化の普遍性と多様性の包括的な説明を企てる研究プログラムである。

辻 (2013 : 272)

以上のように、辻 (2013) は「認知言語学」の概念説明を行いながら、認知言語学の研究範囲を述べている。

なお、王寅 (2007) では、「言語は認知活動の一つであり、客観的な世界に対する認知の結果である」と指摘されている。また、王寅 (2007) は以下のように論述している。

语言是认知能力的一部分，则强调了语言与认知不可分割，语言不具有自治性，若以此为基础来解释语言的来源，我们可以说语言是在体验和认知的基础上形成的。正如 Frisson、Sandra 等 (1996:614) 所说“Language is grounded in general cognition. ”。这样就形成了认知语言学一个最重要的观点：对现实的感知是认知的基础，认知又是语言的基础，“现实—认知—语言”三者存在一个依次决定的序列关系。语言是思维的窗口，认知是现实与语言的中介，现实通过认知这个中介对语言发生作用，语言是认知发展到一定阶段的产物，同时，语言对认知和现实具有一定的反作用。因此，认知语言学则应着力描写语言与其他认知能力之间的相互关系，语言是如何在认知基础上形成的，并解释语言背后的认知机制。

王寅 (2007: 8)

(訳：言語は認知能力の一部である。即ち言語と認知と切り離せないことを強調し、言語は自治性がなく、これをもとに言語の由来を解釈すれば、言語は体験や認知のうえで形成すると言える。Frisson、Sandra ら (1996:614) の述べられているように、〈Language is grounded in general cognition. 〉。これで認知言語学における最も重要な観点の一つを形成し、つまり、現実に対する感知は認知の基礎であり、また、認知は言語の基礎でもある。「現実—認知—言語」という三者の間に決定的な序列関係が存在している。言語は思考の窓口であり、認知は現実と言語の間の架け橋であり、現実には認知という仲介を通じて言語に役割を果たす。言語は認知が発展して段階的な産物である。それと同時に、言語は

認知や現実にある程度の反対作用を与える。そのため、認知言語学は言語と他の認知能力の間の相互関係に重きを置くべきである。認知のもとに言語はどのように形成するか、また、言語背後の認知メカニズムを解釈していく。)

上述の Taylor(2002)により、「言語は認知（機能）と切り分けられないものだ」と考えられる。また、吉村（1995）では、認知言語学を「経験論的言語観」、「認知心理学からの影響」と二つの側面から意義付けられてきた。かつ、吉村（1995）では、Lakoff らの「経験論」に賛成するとともに、人間の生得的資質の完全否定をしてはいけないと主張されている。なお、荒川・森山（2009）も同じく身体的経験を重視している。人間は自らの五感体験により、認知が始まる。辻（2013）では、認知言語学において共有される二つの言語の捉え方について上のように指摘されている。王寅（2007）においても認知と言語の緊密な関わりを述べられている。

ここまでは切り離せなく相互作用している認知と言語の関係を見てきた。

このような言語観は本論文において適応するかどうか考える。

本論文では、いくつかのテーマを通して日中両語表現上の対照研究を行うことが中心である。例えば、本論文の第3章では、《人間は植物》という概念メタファー研究は、比喻カテゴリーに属することはもちろん、さまざまな言語表現をいかに人々に用いられ、そして概念メタファーを成すかという人間の言語・情報処理能力を反映するかもしれない。また、第4章、第5章について言えば、四字熟語、ことわざのような固定的な慣用表現を多く取り上げる。それらの形成は、人々が長年にわたる生活経験や動労経験のしるしであり、言い換えれば、人々は身体経験に基づき、さまざまな知恵を作り出したのである。

さらに、応用型の認知言語学も本論文の第6章、第7章、第8章において見る。つまり、上述で言及した言語学の応用を認知の角度から如何に把握するかが検討する必要があると考える。

こちらでは、「応用認知言語学」に関する概略も見てみよう。

森山（2013：23）によれば、「応用認知言語学」誕生のきっかけとなったのは、2000年にドイツの Landau で行われた第29回 LAUD シンポジウムである。「「応用認知言語学」というのは、認知言語学の理論に焦点を当てるだけでなく、第一言語や第二言語の習得や教授法に応用することを目指す学問分野である」と森山（2013）では述べられている。

その後、技術進歩に伴う言語コーパスの発達により、「コーパス言語学」

(corpus linguistics)が誕生し、母語話者のみならず、学習者の使用のデータが大量に集められるようになったことも、応用認知言語学の発展に大きく寄与していることが分かった(森山 2013: 23)。

つまり、科学技術の発展に従い、人々はコンピューターを活用しながら語学研究を深めていくということである。

上述した第6章、第7章、第8章の三章に関する研究内容は、第二言語の習得や教授法、それにコーパスの活用を中心としたものである。ここまでの理論知識によれば、「認知」というキーワードは全章を貫いているようであり、のちの各章においても詳しく検証して行きたいと考えられる。

靱山(2009)は、「物事を比較するという認知能力」について説明している。

私たちが持っている最も基本的な認知能力の1つを取り上げ、それが言語の基盤として重要な役割を果たしていることを説明します。それは、物事を比較するという認知能力です。比較とは、「2つ(以上)の対象について、ある観点から観察・分析することによって、それらの共通点・相違点を明らかにする」ということです。

靱山(2009: 6)

これによれば、比較、言い換えれば、対照は認知との関わりが提示されている。つまり、対照研究は認知能力の一つであることを反映するという意味である。

したがって、言語学世界における言語間の対照研究は数え切れないほど多く見られると言えよう。言語間の対照研究を通して、各国または各地の言語特徴を把握することができる。そのみならず、その国またはその地域の文化特徴、民族風習、生活習慣に対する理解がより一層深まることも可能である。

対照研究の中で、日英、日米の対照研究が比較的によく見られることはもちろん、日中両語に関する研究もいろいろな分野(構文表現、発話表現、文法表現など)から挙げられる。ここでは、対照研究をめぐる先行文献を順に見ていこう。

樋口・大橋(2004)では、日英語の時制の違いについて述べられている。

日英語の時制の違いはまず、文法的環境としては従属節、ジャンルとしては小説の文章などで見出すことができる。例えば、発話時から見て過去の行為は、英語はもちろ

ん過去形を取らなければならないが、日本語の場合、(26a) では、状況により、(27a) では必ずル形が用いられない。

(26) a. この間大阪へ (帰る/帰った) ときに神戸に寄った。

b. When I (*go/went) back to Osaka the other day, I visited Kobe.

(27) a. 昨日は、ジョーが帰 (る/*った) 前にロンが来た。

b. Ron came before Jo (*comes/came) yesterday.

樋口・大橋 (2004 : 116)

また、「日本語の文章では、小説などで一続きの情景を描いているような場合でもル形やタ形が混在しても構わないが、英語では時制が一定でなければ理解不能である」と樋口・大橋 (2004) が指摘している。それに関して、彼らのあげられた (28) a. 及び (28) b. を見てみよう。

(28) a. 或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩
きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のよう
にまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂いが、絶
間なくあたりへ溢れております。極楽は丁度朝なのでございましょう。

(芥川龍之介『蜘蛛の糸』)

b. One day, the Lord Buddha was taking a stroll beside the Lotus Pool in
Paradise. The lotus blossoms were the color of precious white jade, and
from the golden stamens in their centers an exquisite fragrance wafted into
the air. It was morning in Paradise.

(The Spider's Thread, trans. by Dorothy Britton)

樋口・大橋 (2004 : 116)

樋口・大橋 (2004) によれば、理由として以下のように要約できる。

英語の時制が常に発話時という固定的時点を軸として、事態を時間上に位置づけるようにはたらくのに対し、日本語の時制は基本的に話し手と事態との相対的な位置関係を表し、事態を認識し表現している主体すなわち認知主体としての話し手やその時間的位置についてはコンテキストで補う仕組みになっているからである。英語の時制は、常に発話者が中

心で、発話者〔(utterer)特定時点における発話を行った主体〕を抜きにしては語れない。発話時という固定的位置から事態の位置確認を指示する。これと比べ、日本語の場合、認知主体の位置が必ずしも発話時とは限らないばかりでなく、事態の認知主体すらも、物語の語り手から何の断りもなく突然登場人物に移る場合もある。

以上、英語と日本語との時点固定、位置関係をめぐって、樋口・大橋(2004:116-117)をもとに要約した。

また、王安(2013)は、「日中感情形容詞の主体性の相違」について述べている。日中の感情形容詞「嬉しい」〈高兴〉を王安(2013)では取り上げている。結論を言えば、日本語の感情形容詞述語文「嬉しい!」、中国語の感情形容詞〈高兴〉に対応する。日本語の感情形容詞はそのまま表出される場合、極めて主体性の高い表現であり、話者はその表出の参照点となり、常に暗示的に存在している。したがって、常に話者本人に限定するという制限があり、つまり人称制限が起きる。それに対し、中国語の感情形容詞〈高兴〉は極めて主体性の低い表現であり、そのまま発せられても、背景に感情主が存在せず、感情の表出を捉えられない。よって、感情の表出を表さないため、人称制限が起きない(王安2013:199)。

ほかに、高橋(2017)では、「中日両言語における副詞の位置」、「日中対照関係から見る中国語の受身表現」、「二つの“了”とそれに対応する日本語訳」など、日中両言語における語彙、文法をめぐり対照研究がなされている。

これまで取り上げてきた対照研究の中で、植物に関する言葉表現の研究はどの言語においてもあまり見られない。動植物の間でも動物と比べ、植物に関する言語表現上の研究はまだ少ないほうである。実際には、植物は動物と同じように、どの国にとっても不可欠な存在である。植物に関する言語表現は日常のあちらこちらに浸透しているといえども、人々に無視されがちな場合もよくある。

1.3 本論文の目的

本論文では、認知と言語の相互作用関係を基礎として、認知言語学における日中対照研究を行うことが主眼である。したがって、本論文の研究目的として、認知言語学に基づくことを前提条件に、以下の三つを挙げたいと考える。

目的①

日中両語表現の相違点は様々な視点から研究されているが、認知言語学における植物に関する日中両語表現をより一層掘り下げていきたいと考える。この点について、本論文の第3、4、5章において追究する。この三章では、日中両語における《人間は植物》に関する概念メタファー表現、四字熟語表現、さらに、植物に関することわざ表現に絞ることとする。

目的②

日本語に関するメタファー表現の中国人母語話者に与える影響を確認することである。主に二つの面から分析する。一つは、認知言語学の世界で「まだら問題」が焦点を集めているが、本論文では、「まだら問題」に関する先行研究を踏まえたうえで、植物に関する概念メタファー表現、つまり《メンタルは植物》についての容認の度合いを巡って、「まだら問題」をさらに検討していく。もう一つは、日本語における植物に関するメタファー表現について、中国人母語話者がどう理解しているかをアンケート調査を通して分析してみる。

目的③

目的①、目的②のうえで、認知言語学における各理論を援用し、応用型認知言語学の活用状況について分析してみる。まず、日中の命名（ネーミング）を茶飲料名、化粧品名に絞って、その中で植物とかかわりのある命名があるかどうか、あるいは命名上どのような技法が用いられるかを確認する。

1.4 本論文の研究対象

本論文の研究対象を一言で言えば、植物に関するさまざまな日中表現が対象であるが、さらに細かく言えば、日中両語における植物に関するメタファー表現、慣用表現を中心対象にし、認知言語学の視点から日中両語の植物に関する各々の表現の相違を見ることである。

1.5 本論文の考察方法

本論文の研究にあたって、主な考察方法（考察手段）について説明する。

まず、文献参照はもちろん不可欠である。例えば、第5章では日中のことわざを巡った

対照研究であり、ことわざの収集、あるいはことわざに対する意味解釈の確認などほとんどことわざ辞典から集めたものである。

文献参照のほかに、区別するために言えばオンライン考察とオフライン考察を行う。オンライン考察の場合、コーパスの利用が代表的である。第4章では、四字熟語の会話談話における特徴や使用状況を考察するにあたり、コーパス検索を用いて会話談話の用例を集める。同じく第6章は「まだら」問題研究に、『筑波ウェブコーパス』を利用する。

なお、オフライン考察の場合、主にアンケート調査の形で行う。例えば第7章の「中国語母語話者による日本語メタファー解釈」はそれに当てはまる。

1.6 本論文の構成

本章以降の構成は、詳しくは次の通りである。

第2章では、理論的背景について述べる。

これまでの認知言語学に関する研究の歴史や流れを顧みる。また、認知言語学範疇に属する「認知言語学」、「レトリック」、「メタファー」、「比喩」、「コーパス」、「命名論」に関する先行研究を遡る。これらの理論的な力のおかげで、本論文の研究にあたって有力な研究理論基盤になる。

次の第3章から第5章まで、主に日中表現に関する対照研究である。

第3章では、日中両語の植物に関するメタファー表現を比較して見ていく。概念メタファー《人間は植物》について、様々な下位カテゴリー表現が見られる。この章では、《人間は植物》に関する各下位概念メタファー表現を取り上げ、さらに「開花」、「花」、「種」という視点から、日中両語の表現上の相違点を見ていく。

第4章では、植物四字熟語が会話談話において見られる場合の使用状況を中国語検索用コーパスを利用して把握していく。この章では、中国語表現に焦点を当てるとともに、日中両語に見られる四字熟語の共通部分や異なる部分の比較を第4章の後半部分で行ってみる。

引き続き、第5章では、ことわざの比喩性を中心とし、日中両国のことわざを分析する。

上の章を踏まえた上で、第6章、第7章は日本語の概念メタファー表現に重きを置く。

第6章では、日本語に関する概念メタファー表現《感情は植物》・《メンタルは植物》を巡って、そこから生じた「まだら」問題を検討する。

第7章では、日本語における概念メタファー表現について、日本語を学んでいる中国語母語話者によってどのように理解されているかをアンケート調査を通して掘り下げる。

第8章では、命名に関する理論を援用し、中国語における茶飲料名、化粧品名という二つの点から、命名の技法やそれに関するレトリック効果を明らかにする。

第9章では、本論文の結論をまとめたうえで、今後の課題を述べる。

1.7 期待される研究結果

本論文の考察を通して、これまであまり触られていない植物に関するさまざまな言語表現を認知言語学の視点からより一層明らかにすることが期待される。

後にも述べるが、本論文では、コーパスを活用することが方針の一つである。例えば、第4章では、コーパス検索を援用し、植物に関する四字熟語の使用状況や比喻特徴を把握することができた。また、「まだら問題」については、鍋島（2013）、後藤（2018）、松浦（2019）などにより言及されているが、コーパスの検索研究にしたがい、概念メタファー「メンタルは植物」の各下位カテゴリー表現も「まだら問題」を起こすことがある。さらに、中国人母語話者の日本語学習者は、植物に関する日本語表現に対する比喻解釈の結果や分析を参考にし、今後の日本語教育の向上に参考の一つとして役に立つ可能性があると考えられる。最後に、先行研究における命名理論を理解したうえで、実際の日常生活の中、植物に関する名称の多寡、命名上の特性などの分析に新たな展開を見る。

本論文では、植物をめぐって、その重要性を強調しながら、植物に関する概念メタファー表現の日中対照研究、植物に関することわざ表現の日中対照研究などを通して、日中両語における対照研究がより一歩明白になると期待している。

第2章 理論的背景

2.1 はじめに

本章では、理論的背景について述べる。これまでの研究における認知言語学に関する研究の歴史や流れを顧みる。

レトリック研究にせよ、メタファー研究にせよ、現時点ではこれらのいずれもたくさんの書籍や研究論文が書かれている。本章の役割は本論文に出てくるキーワードである「認知言語学」、「レトリック」、「メタファー」、「比喩」、「コーパス」、「命名論」など、関連する定義づけや先行研究を集めて整理することである。

2.2 認知言語学

山梨 (2019) では、いくつかの面から「認知言語学」、「認知科学」について述べられている。まずは、「認知言語学は、広い意味での認知科学 (cognitive science) の観点に立脚する言語学のアプローチをとっている。認知科学は、人間の知のメカニズムの解明を目指す科学である」という両者の性質上の違いを山梨 (2019 : 19) が論じている。

また、山梨 (2019) によれば、「認知言語学」、「認知科学」における「知」に対する説明について、以下のようにまとめられる。

知のメカニズムという場合の「知」は、つまり、人間の認識のメカニズム、心のメカニズム一般に関わる領域を意味する。なお、「知」の中には、「広い意味での知」及び「狭い意味での知」の区別が山梨 (2019) によってなされている。

広い意味で言えば、「知・情・意」における「知」は、すなわち「知性」・「感情」・「意図」などに関わる「心の領域」が含まれる。山梨 (2019 : 19) によれば、こういう心のプロセスに関わる知の領域としては、さらに知覚・記憶・連想のプロセスなども含まれる。これに対し、「知・情・意」における「知」は、狭い意味での「知性の領域」に相当する。この領域には、思考・推論・判断などのプロセスも含まれる (山梨 2019 : 19) 。

なおまた、「言葉の意味」、「認知言語学のパラダイム」に対する観点を山梨 (2019)

を通して見ていく。「外部世界に客観的に存在しているのではなく、我々の具体的な身体的経験によって動機づけられている。言語主体としての人間は、外部世界との相互作用を通して具体的な経験を意味づけしている」を「言葉の意味」として山梨（2019）により説明されている。「認知言語学のパラダイム」について、山梨（2019）では、以下のように述べられている。

認知言語学のパラダイムでは、いわゆる言語能力は、一般的な認知能力によって動機づけられており、この認知能力の反映として位置づけられる。換言すれば、言語能力は、この種の一般的な認知能力と不可分の関係にあり、この後者の認知能力に関わる要因を無視して言語能力を規定することは不可能であるという立場に立っている。

山梨（2019：20）

以上、山梨（2019：19-20）をもとにまとめたが、これにより「認知言語学」、「認知科学」の性質が理解できた。第1章を含め、これまでは「認知」及び「認知言語学」に関わる概念解説を見てきた。本章の2.2節から、認知言語学に関する発展の流れを見て行きたいと考える。

2.2.1 認知言語学の誕生と発展

こちらでは、認知言語学の発展の流れを確認してみたい。認知言語学の発展を巡って、多数の学者がそれぞれの研究の観点を述べている。年代順に振り返ってきた代表の一つとしては坂原（2000）が挙げられる。

認知言語学が始まる前に、言語学研究で最も中心となったのは50年代に入ってからのもムスキーChomsky（以下、「チョムスキー」と示す）だと考えられる。坂原（2000）は、以下のように記している。

チョムスキーは、言語能力の自律性がかかげ、きわめて精緻な統語理論を作るのに成功したが、意味研究がそれほど進んだわけではなかった。むしろ、チョムスキーは、意味を排除したまま、統語論を推し進める研究プログラムを作り上げたと言ってよい。チョムスキーは、文法は音を意味に結び付ける規則の体系であるという考えを繰り返

し述べているが、チョムスキーにとっては、言語能力は、あくまで、記憶や注意などの制限を排除した、理想状態での解釈されない記号列に対する形式的能力であり、意味への関心は2次的なものでしかない。

坂原 (2000 : i)

このような意味への関心の薄さを補う研究として生成意味論の研究がなされた。しかしながら、それは限界に至り、そこから認知言語学が生まれてきたと考えられる。以下、坂原 (2000) の生成意味論に対する記述を参考に見る。

生成意味論は、重要な意味現象を次々に発掘して、言語学の研究領域を一挙に拡大した。しかし、意味研究を統語論の概念で行ったために、方法論上の無理から、じきに非現実的な仮定を行わざるを得なくなり、1975年ころまでには下火になる。現在から考えれば、生成意味論の最大の成果は、逆説的に、その失敗の中にあったと言える。すなわち、意味研究は、統語論と同じ方法ではできず、それにふさわしい方法と説明概念が必要であるということである。同時に、生成意味論の失敗は、生成文法の主流も、決して満足には意味の問題が扱えないことを明らかにし、生成文法研究プログラムの限界を示すという効果もあった。実際、その後の生成文法の展開では、生成意味論が提示した豊かな意味の問題の広がりはいままでと比べてよいほど無視されている。生成意味論は、意味研究から語用論にまで手を伸ばし、言語使用のさまざまな側面についての研究を実現のものとした。

坂原 (2000 : ii - iii)

年代順にしたがい、60年代は、心理学においても研究の流れに大きな変化が起こり、それまでの刺激と反応の組み合わせによってすべてを説明しようとする偏狭な行動主義的心理学から、人間の思考をより柔軟な方法で直接扱おうとする認知心理学が登場してくる(坂原 2000 : iii)。

上のように、60年代からは行動主義的心理学から認知心理学への変遷が現れてきた。

これに、坂原 (2000) によれば、コンピューター技術の進歩は、コンピューターによる論理学の定理の証明などのみならず、コンピューター技術の進歩は人間の思考をシミュレートすることを可能にし、思考研究の新しい可能性を開いたことがわかる。

また、上述のほかにも、哲学、文化人類学などでも人間の思考に対する関心が活発化し、70年後半には、認知科学という形で、言語学、心理学、計算機科学、哲学、文化人類学などが共同で人間の思考の研究する機運が生まれてくる(坂原 2000: iii)。これについて、つまり、坂原(2000)の述べたように、認知主義の高まりを背景として、生成意味論から新たな意味研究の方法論の構築が企てられてきたということである。ついで、坂原(2000)では、以下のように述べられている。

こうして、フィルモア Fillmore のフレーム意味論、ケイ Kay のプロトタイプ意味論、フォコニエ Fauconnier のメンタル・スペース理論、レイコフの認知意味論、ラネカー Langacker の認知文法など、新しい意味論が続々と登場してくる。こうした理論は、さまざまに異なりながらも、言語は思考の道具であり、人間の認知作用に基礎づけられているという仮定を共有しており、広く認知言語学と呼ばれる研究潮流を作っていく。

坂原(2000: iii)

このように、認知科学におけるいろいろな意味論や文法論がそれぞれの特徴を有すると同時に、人間の認知作用に同じように基礎づけられているし、認知言語学に対する研究がその時から誕生してきた。

これまでは、坂原(2000)を中心とし、古くから現在までの認知言語学のあゆみを見てきた。この記述を補完する意味で他の研究者の認知言語学観を見てみよう。

Lakoff(1990)によれば、認知言語学とは二つの主たる立場へのこだわりによって定義されるものである。それぞれは「一般化の立場」及び「認知の立場」である。

「一般化の立場」とは自然言語のすべての諸相を司る一般的な原理を特徴づけようとする立場のことである(Lakoff 1990 [杉本(訳)(2000: 3)])。Lakoffは、この立場は言語学を科学的探求として受け止めることに等しい立場であると考えている。

「認知の立場」とは自然言語に関する説明を、認知言語学のみならず他の諸分野においても一般的に知られている我々精神や脳に関することがらと符号するような形で考えていこうとする立場である(Lakoff 1990 [杉本(訳)(2000: 3)])。

「一般化の立場」へのこだわりは、その必要となる一般化の種類に応じた下位分野の現象面の特徴づけを伴うものである(Lakoff 1990 [杉本(訳)(2000: 3)])。例として

次のようなものが Lakoff (1990) によりあげられている。

統語論において：文法の形態素、範疇及び構文の分布に関する一般化

意味論において：推論、多義語、意味領域、種々の意味関係、概念構造、知識構造、

及び我々が知覚、経験、理解するものへの言語の側からの適合に関する一般化

語用論において：言語行為、談話、語用論的含意、直示性、文脈における言語の用法

に関する一般化

Lakoff (1990) [杉本 (訳) (2000 : 3)]

また、「認知の立場を取るということは多くの学問分野からの広範囲な経験的知見に対応することが要求される」と Lakoff (1990) が述べている。例えば、以下があげられている。

基本レベルのカテゴリー化やプロトタイプ効果の存在を証明している認知科学、発達

心理学、及び人類学の分野からのカテゴリー化に関する知見

色彩の知覚とカテゴリー化の特性に関する精神物理学、神経生理学、人類学の分野か

らの知見

人間のイメージ能力や言語と慣用的イメージとの連想に関する認知心理学からの知見

大脳の計算メカニズムに関する認知神経科学やコネクショニズムからの知見

Lakoff (1990) [杉本 (訳) (2000 : 4)]

このような一般化の立場、認知の立場について、Lakoff (1990) の論述にしたがえば、本来、一般化の立場と認知の立場の両者の立場はうまくかみ合うことが求められる。言い換えれば、自然言語に関する一般的原理は認知的な実在を持つとのことである。しかしながら、これら二つの立場がうまくかみ合わないことがある、その時は「認知の立場が優先されることになる」というのが Lakoff (1990) の観点である。換言すれば、我々人間にとって認知の立場に対するこだわりがある。かつ、そのこだわりが認知的な実在にあるということである。つまり、一般化の立場、認知の立場という二つの立場は、後者のほうがより優先的なものである。

2.2.2 認知言語学における「認知」と「言語」

このように、認知言語学の歴史と発展、及び認知言語学に対する観点を見てきた。ここではさらに、野村（2014）の「認知と言語の関係」についての論述を見てみたい。ほかの言語学者と同じように、野村（2014）でも「認知」に対する定義づけがなされている。

これまで私たちはことばで世界を切り分け、名づけ、その結果、世界は裸のままではなく、必ず〈意味〉として立ち現われることをみてきた。ここで現前の事態が〈意味〉として立ち現われることを可能にする心の動きを「認知」（cognition）と呼ぶことにしよう。

野村（2014：9）

野村（2014）の考えによれば、心の動きによって事態（物事）に対する〈意味〉を生じることである。こういうような心の動きがつまり認知主体の脳とともに働く過程のことだと考えられる。

また、野村（2014）では、認知言語学では、認知と言語の関係を、①「認知システムとしての言語」、②「認知能力の反映としての言語」という二つの面から考えると述べている。具体的には以下のように記されている。

世界が〈意味〉として立ち現れるには、感覚、知覚、注意、記憶、推論などの心の動き—認知能力—が必要である。さらに、人間の場合には〈意味〉の立ち現われにことばが伴うのが普通である。このことは、ことばの集まりである言語が私たちの認知にとって本質的な役割を果たしていることを示す。つまり、言語は、他の認知能力と協働して認知システムの一翼を担い、世界に意味を与え、世界を理解する役割を果たしているのである。

野村（2014：9）

言うまでもなく、こちらでは、野村（2014）が言語は人間にとって、認知能力の一つであることを提示し、かつ、言語の役割と認知システムにおける重要性を示している。もち

ろん、ほかの認知能力も存在していることを暗示し、これについて次から確認できる。

それに加え、野村（2014）は「認知システムの中でも言語は人間の進化の歴史の中で比較的最近になって登場した」と述べている。理由は私たちホモ・サピエンスが現れたのは20万年前とされるが、言語が誕生したのは7万年ほど前とされるからである。そのため、言語は「古い部品でできた新しい機械」と言われることがある。これが何を意味するかは言語音の産出について考えみると分かりやすい（野村 2014：10）。こう考えてみれば、言語はある程度新しいものであるものの、認知システムに大きな役割を果たしていると言ってもよいだろう。なお、上述の言語音の産出について、野村（2014）は、以下のような説明をしている。

文字をもたない民族はあるが、音声言語をもたない民族はなく、音声は言語にとって必須の側面である。しかし、人間には言語音を作り出す独立した器官は備わっていない。私たちは、酸素や口や鼻から吸って、不要な二酸化炭素を肺から送り出すついでに、声帯を震わせたり、歯・舌・唇を調節することでさまざまな音を作り出している。すなわち、呼吸や咀嚼のための器官（＝古い部品）を流用して、言語音を生成する仕組み（＝新しい機械）を作り出したわけである。同じことは、言語のもう1つの側面である意味を表すことについても言えるはずである。すなわち、意味を表す仕組みは、他の認知能力を基盤にして立ち上がったものであり、感覚、知覚、注意、記憶、推論などの認知能力が色濃く痕跡をとどめているはずであり、こうした他の認知能力の観点から説明できるのではないかと考えられる。

野村（2014：10）

野村（2014）は、人間（人間の器官）を古い部品に喩え、言語音を生成する仕組みを新しい機械に喩える巧妙なメタファー手法を使っている。また、言語という認知能力以外の、感覚、知覚、注意、記憶、推論のようなほかの認知能力も言及され、かつ、それぞれの認知能力が互いに協力して働くこともわかる。

2.2 では、認知言語学をめぐる歴史と発展を確認するとともに、これまでの研究者の認知言語学観に触れながら、認知と言語の関係をも見てきた。

次節は、レトリックをめぐる各言語学者の先行研究を確認していく。

2.3 レトリック

森（2012）では、「我々の言語活動の中で、レトリックはどのような位置を占めているか」と問われている。レトリックに対する見解について、森（2012）では以下のように述べられている。

「それは単なるレトリックにすぎない」などという言い回しをよく耳にするので、実質を伴わない空虚な言辞といった印象があるのかもしれない。そこまでいかなくても、せいぜい、日常の言葉を少しかっこよく言い換えるための言語技巧という理解が普通である。もちろん、レトリックの側にもそう捉えられてしまう責任がある。相手を煙にまく詭弁、華々しく装われた美文、こういったものもレトリックの見せる顔である。その一方で、それなしでは我々の言語活動が成り立たないもの、日常の言葉遣いのなかにあまねく浸みわたっているもの、といった側面もレトリックにある。

森（2012：iii）

これにより、レトリックというのは、人々に何らかの神秘感をもたらす。なお、本節では、おもに、レトリックとはいったいどのようなものか（レトリックの定義づけ）を各研究に基いて確認していく。

2.3.1 佐藤のレトリック観

佐藤（1992a）から見ていく。

佐藤（1992a：9）では、「レトリックということばは、すでに日本語であり、そのへんにさらにある小型の国語辞典にも、たいていのっている。もっとも、その見出しの下には説明がなくて、「修辞」の項目を見ること、という指示でそちらへ回送されるかもしれないが、ともかく、《ことばをたくみにもちい、効果的に表現すること、そしてその技術》というような意味で、私たちはこの用語を使っている」と述べられている。

これに対する佐藤（1992a）の解説について見れば、いわば、我々は普段、話を聞いたり文章を読んだりするとき、そこに組み込まれている、独特な、ちょっと変わったことばづかいによって、興味を喚起させ、一種の挑発を受けるような場合、そこにレトリックがあ

ると言う（佐藤 1992a : 9）。

つまり、レトリックは生活や会話の中に潜んでいることである。

また、「レトリックの表現がいつももくろみどおりの効果を発揮するというわけではない」と佐藤（1992a : 12）では述べられている。それは、読むときも、聴くときも、私たちの心のなかには、きっとどこか醒めている部分がある。だからであろう、やっきとなって、効果的でありたい、魅力的でありたい……と努力している愚かなことばに会うと、たちまち何か白ける（佐藤 1992a : 12）。

これに対し、佐藤（1992a : 12）では、「とにかく日常語としての「レトリック」は、言外の誘導力をそなえた言語表現の、技巧と効果をさし示していると考えてよかろう」という見解を出されている。また、佐藤（1992a）の考えでは、同じレトリックという用語が、もっと専門的に、ひとつの組織的な技術体系、あるいは技術研究を意味している場合もある。一個の学問と言ってもよい（佐藤 1992a : 12）。つまり、佐藤（1992a）では、レトリックに対する解剖を行っていると同時に、レトリックの言語学における重要性と学術性を強調している。

さらに、佐藤（1992b : 9-10）では、レトリックに対する論述を以下のように要約する。

レトリックは、効果的な言語表現の技術として、紀元前から十九世紀末までえんえんと、ヨーロッパ文化のなかに一般教養の重要な一科目として継承されてきた。その前の約一世紀に、このような伝統レトリックの技術体系を人々にきれいに忘れられてしまった。しかし、それにも関わらず、人々が技術体系としてのレトリックを忘れてすごした期間、実際の人間のことばはつねにレトリカルに作用しつづけていたのである。人々は心に思うこと（思考）とことばづかい（言語）とが会うところに成立する認識とその表現は、けっして論理と文法によってじゅうぶんに制御されうるものではなかった。そして、論理と文法の手にあまる認識の動きとその表現を取りあつかうべきものは、レトリックだったのである。

佐藤（1992b）は、レトリックを効果的な言語表現の技術として、人々のことばに作用することを明確にした。また、人間の思考と言語は、単なる論理と文法によって作用されるだけではなく、それ以外にレトリックによっても作用されることがわかる。

2.3.2 瀬戸のレトリック観

瀬戸（2002）では、レトリックの歴史、レトリックの意味について述べられている。

西欧社会では、レトリックは二五〇〇年の歴史を持ちます。紀元前からの伝統で、ソクラテス、プラトン、アリストテレスたちが活躍した古代ギリシア時代から続くものです。普通レトリックというとき、この西洋のレトリックを指します。

当時のギリシアは、「共和制」といういちおう民主的な政治体制がしかれていました。いちおうというのは、奴隷制の上ののっかった共和制だったからです。ですから完全な民主主義ではありません。

でも、奴隷ではない市民には言論の自由がありました。そして、市民の代表は、自由に意見を述べることができ、議場での議論とその結果によって重要な方針が決められました。そこでは、いかに「よく話す」かが当然大きな意味をもつでしょう。

レトリックは、議場や裁判の場で、「よく話す」方法として開発され、それがじだいに体系化されていったものです。「よく話す」の「よく」とは、「説得力をもって」という意味です。つまり、レトリックとは「説得術」を意味したのである。腕力で人を負かすのではなく、ことばで人を説き伏せる一、これがレトリックでした。きわめて実践的な意味をもっていました。

瀬戸（2002：2-3）

瀬戸（2002）は、レトリックは西欧からはじまり、長い歴史を持つことを述べている。また、レトリックの中心思想は、「説得術」ということで、ことばで人を説得することが目的である。

また、レトリックにおける「説得術」について、瀬戸（2002）は次のように説明している。

説得術というと、悪くいえばだましのテクニックのように受けとられるかもしれませんが。もちろん、当時も、白を黒と言いくるめるような詭弁としてのレトリックもなかったわけではありません。だけど、それは、本物のレトリックそのものが力をもって

いた証拠です。効果的だったからこそ、悪用もされたのです。説得術の術とは、技術を意味しました。つまり、体系だった方法のことです。

瀬戸（2002：3）

また、瀬戸（2002）の観点では、人前で話すときは、いつでも相手を説得することを目的としているとはかぎらないため、広く言えば、説得術としてのレトリックは、「弁論術」と理解されている。

同時に、瀬戸（2002）は「近年にいたっても、国民を大規模な戦争に向かわせる政治レトリックにも応用されました。この意味で、レトリックは両刃の剣です。説得力が悪い方向に暴走しないように、知性による見張りが必要なのです」と指摘している。

瀬戸（2002）は、レトリックの説得面のほかに、もう一つ大切な面、つまり、表現そのものの魅力のことを述べている。また、「日本では説得術としてのレトリックはことばのあや（あやどられた表現）に対する強い興味を中心であった。日本のレトリックは、弁論術でも説得術でもなく、おもに詩歌を対象とした修辞学であった」という主張である。

かつ、「魅力的な表現を求めるレトリックは、「より適切な表現」が求められている。そのために、美しい表現も含まれるし、ある表現がより適切になるには、文脈をよく考慮して、伝えたい意味が過不足なく表されていないなくてはならない」というものが瀬戸のレトリック観である。

2.4 メタファー

メタファーと言え、まず Lakoff and Johnson（1980）が想起される。メタファーに対する論述として Lakoff and Johnson（1980）では、以下のように述べられている。

メタファー（隠喩）と言え、たいていの人にとっては、詩的空想力が生み出す言葉の綾のことであり、修辭的な文飾の技巧のことである。つまり、通常用いる言語というよりは特別改まった表現をする際の言語のことである。それに、メタファーというのは言語だけに特有のものであって、思考や行動の問題であるよりは言葉遣いの問題であると普通一般には考えられている。したがって、大部分の人はメタファーなどなくとも、日常生活はなんら痛痒を感じることなくやっつけていけるものと考えている。と

ころが、われわれ筆者に言わせれば、それどころか、言語活動のみならず思考や行動にいたるまで、日常の営みのあらゆるところにメタファーは浸透しているのである。われわれが普段、ものを考えたり行動したりする際に基づいている概念体系の本質は、根本的にメタファーによって成り立っているのである。

Lakoff and Johnson (1980) [渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986 : 3)]

メタファー研究の先駆とみなされる Lakoff and Johnson (1980) は、メタファーが言語活動に言葉を修飾する技巧の一つであると述べながら、人々の日常の営みに不可欠な存在であることも述べている。つまり、こちらでは、メタファーの普遍性をわれわれに伝えている。

比喩的表現の産出と解釈のメカニズムを探ることは、私たちの知のあり方の探求の重要な一側面と言える (谷口 2003 : 2) 。

また、メタファーの伝統的定義について、谷口 (2003) は次のように述べている。

メタファーの伝統的定義は、「類似性に基づく比喩」である。同じく類似性に基づく直喩とは異なり、「～のように」(like…)など、喩えであることを明示する語句を用いないものとされ、それゆえ「隠喩」、「暗喩」とも呼ばれる。

谷口 (2003 : 2)

かつ、以下の二例がそれぞれ直喩と隠喩であることを谷口 (2003) では区別している。

直喩表現例 「彼女はいつもお姫様のように振る舞っている。」

隠喩表現例 「彼女はいつもお姫様だ。」

上の二つの例文は、形式から見れば、すぐわかる。長い例文のほうは直喩標識「のよう」が存在しているのに対し、短い例文のほうは「AはBだ」の形が取られている。

なお、被喩辞と喩辞の説明について、谷口 (2003) は Richards (1936) をもとに、「目標領域」と「起点領域」という認知意味論のメタファー写像理論においての説明を行っている。

メタファーは、典型的には「AはBだ」(A is B)の形式をとるが、この時の被喩辞Aは「主意」(tenor)、喩辞Bは「媒体」(vehicle)と修辞学で呼ばれている (Richards 1936)。

なお、本書で中心的に扱う認知意味論のメタファー写像理論では、被喩辞Aが「目標領域」(target domain)、喩辞Bが「起点領域」(source domain)に属すると言われ、また、第7章で見る類推モデルは、被喩辞Aが「ターゲット」(target)、喩辞Bが「ベース」(base)と呼ばれる。

(谷口 2003 : 2)

谷口(2003)によれば、被喩辞と喩辞は異なる概念体系においてその定義づけも変わることが可能になることがわかる。

一方、谷口(2003)は、「メタファーは必ずしも、“A is B”のように被喩辞を明示するとはかぎらない」と述べている。山梨(1988)の述べた「A組のトビウオ(=泳ぎの得意な人)が水泳大会で優勝した」、「社長は頭から湯気を出している(=カンカンに怒っている)」のように、主部・述部のみに比喩的表現が見られ、それらが実際に何を意味しているか、言語的には表現しない場合も多い(谷口 2003 : 2-3)。

この現象について、後に述べる概念メタファーと合致するところがあると考えられる。

2.4.1 メタファーの機能と特徴

Gibbs(1990)では、メタファーの遍在、メタファーのコミュニケーション上の諸機能をめぐって説明がなされている。メタファーの遍在について、いわば、Lakoff and Johnson(1980)の述べたように、メタファーはわれわれの思考や行動にいたるまで、日常の営みのあらゆるところに浸透しているということである。とくに、書きことばか話しことばか関係なく、談話の中に遍在することがGibbs(1990)により明らかにされた。なお、メタファーのコミュニケーション上の諸機能について、Gibbs(1990)では、学者たちの研究をもとに、①「字義的言語を用いては伝えるのがきわめて難しいであろう考えの表現方法を提供すること(字義的発話では容易に、あるいは明確に表現することがまったく不可能な考えも、メタファーによれば表現可能になる)」；②「著しく簡潔な伝達手段を与えてくれるという点」；③「メタファーはわれわれが現象的な経験を鮮明に捉える手助けをしてくれる点」というメタファーのコミュニケーション上の三つの機能がまとめられている。

これに対し、Taylor(2003)では、メタファーの特徴について、こう記載されている。

メタファーの特徴は、選択制限に違反することではなく、ある A という認知領域を概念化する際、別の B という認知領域の中にあつて A と結びつきやすい要素を通して A の概念化を行なうことである。実際、一言で表わす決まった言い方がないものを話し手が何とか表現しようとする場面にメタファーが多く使われることは驚くことではない。

Taylor (2003) [辻幸夫ら (訳) (2008 : 211)]

このように、「一言で表わす決まった言い方がないもの」について、つまり、複雑で簡単ではないものを話し手が聞き手に伝えたいときに、メタファーということばの技を使おうとしているのである。

2.4.2 概念メタファー

前述のように、伝統的な定義によると、メタファーは「類似性に基づく比喩」である。これは谷口 (2003) のみならず、ほかの多数の研究者も同じ観点を持っている。たとえば「A 先生は鬼だ」という表現は、「A 先生」が「鬼」のように怖くて情け容赦ないなど、両者の類似性に着目しているものである (谷口 2003 : 33) 。

したがって、「Lakoff and Johnson による概念メタファーも、2つの経験ないし概念の間の「類似性」に基づいている場合が多い」と谷口 (2003) が指摘している。

構造のメタファーでは、その類似性が「経験のゲシュタルト」の構造に見出されることになる。その意味で、Lakoff and Johnson の言う類似性とは「経験的類似性」(experiential similarity)、すなわち、経験を通して主観的に認知される類似性であり、客観的に存在する類似性とは異なる (谷口 2003:33) 。

これに対し、Deignan (2005) は、「概念メタファー理論」について次のように述べている。

思考としてのメタファーについての最も広く知られた説明は、通常「概念メタファー理論」または「認知的メタファー理論」と名づけられている。概念メタファー理論は現代の多くのメタファーに関する著作が採用しているアプローチで、本書の議論の大部分を補強する見解である。初期のいくつかの論文は理論の背後にある考え方の発展

に着手したものであったが、1980年のLakoff and Johnsonの著作、Metaphors We Live By(『レトリックと人生』)の出版は、その中心となる要点をきわめて明瞭に論じ、幅広い読者を獲得したのである。この著作はメタファーによる思考と言語の研究のために非常に重要であり、広範囲の学術分野における夥しい数の更なるメタファー研究に影響を与えた。

装飾説とは対照的に、Lakoff and Johnsonはメタファーが思考において中心的な役割を演じており、思考と言語の両方に不可欠であると論じる。彼らは慣用メタファーを非常に重要なものに見なしており、慣用メタファーが言語に遍在することを見抜いている。彼らはまた、意味的に関連性のあるメタファーのグループの重要性を強調し、メタファーのグループの存在は概念ネットワークがあることの証拠であると論じる。

Deignan (2005) [渡辺ら 訳 (2010 : 7)]

この部分は、Deignan (2005)がLakoff and Johnson (1980)の「概念メタファー理論」を紹介した部分で、Metaphors We Live By(『レトリックと人生』)という著作がメタファー研究において重要なものであるという位置付けを示している。

2.4.3 メタファーの経験的基盤

これまでメタファーについていくつかの面から見てきた。野村(2014)の論述のように、抽象的で理解の難しいもの(目標領域)を具体的でなじみの深いもの(起点領域)によって理解しようとする心の動きがメタファーというのである。ただし、次のような疑問を野村(2014)が指摘している。

具体的でなじみの深いものであれば、何でもメタファーの起点領域になれるのであろうか? 目標領域と起点領域との間には、抽象的—具体的という関係の他にどのようなつながりがあるのだろうか?

野村 (2014 : 47)

これに、次の例が取りあげられている。

- a. The number of books printed each year keeps going *up*.
- b. My income *rose/fell* last year.
- c. If you're too hot, turn the heat *down*.

一見するとごく普通の表現のようにみえるが、実はこれらもメタファー表現である。すなわち、「数量の多さ」を「上」(up, rise)、「数量の少なさ」を「下」(down, fall)に喩える次の概念メタファーが根底にある。

MORE IS UP; LESS IS DOWN

「数量の多さ」を「上」に喩えて、「下」や「右」や「左」には喩えないのはなぜだろうか？これは、「数量の多さ」と「上」が相関するのを私たちが日常的に身をもって経験しているからだと言われている。例えば、積み木を積み重ねていくと、数が増えるにしたがって上方向に伸びていくし、容器の中に水を入れていくと、量が増えるにしたがって水面が上昇する。こうした経験が「数量の多さ」を「上」、「数量の少なさ」を「下」に対応させる基盤になっている。したがって、「数量の多さ」を「下」に喩えるのは、この経験に反することになり、おそらくどの言語にもそうしたメタファーは存在しないだろう、「数量の多さ」が「右」や「左」と相関するような経験もあまり日常的でないので、そうしたメタファーも存在しそうにない。

野村 (2014 : 47)

野村 (2014) の論述によれば、上述の「上下」が起点領域となるメタファーについて、喩えられるものと「上下」との間の相関関係を日常的な身体的経験に求めることができる。私たちは、嬉しいときには浮き浮きし、飛び跳ね、悲しいときには肩を落とし、伏し目になるし、意識があるときには立って行動し、意識がないときには横たわるのである(野村 2014 : 48)。

つまり、人間の生活より生じた身体的経験が言語表現の綾と融合していると理解されている。

2.5 比喩

20世紀半ばから終わりにかけて、メタファーやメトニミーといったトピックは、文学で扱われる分野であり、文学テキストを構成する上でどのような役割を果たすかという点から研究されるのがもっぱらであった。比喩は、テキスト、とりわけ詩的テキストに特別な

美的価値を与えるものの一面をなすものと考えられていたからである。

比喩的 (figurative) とは、ある用法が「字義的」 (literal) と呼べるような他の用法に対してメタファーないしメトニミーの関係をもつことによって動機づけられることを意味するとも言えるかもしれない。一方、「字義的」とは、「日常的、通常の用法」ではなく、「他の意味からの比喩的拡張に依拠しない意味」を意味する。ただし、メタファーとメトニミーだけが比喩的用法を動機づけるものではもちろんない²。

2.5.1 比喩の効果

比喩組織は単なるお飾りでは決してないということである。比喩組織は言語において重要な役割を果たし、その隅々にまで行き渡っているのである。さらに言えば、これは比喩に関係する認知組織が思考において重要であり、その隅々にまで行き渡っているからにほかならない。その結果、比喩的意味は、言語構造の基本的仕組みをなす。このことは、特殊な文語だけでなく、日常的なことば使いにもあてはまり、さらにはあらゆる人間言語にあてはまる。

2.5.2 比喩の種類

Barbara Dancygier・Eve Sweetser (編) (2014) *Figurative Language* (野村ら訳 (2021) 『「比喩」とは何か 認知言語学からのアプローチ』) では、「メタファー」と「メトニミー」に重きをおいたが、実際の比喩の中では、いろいろなタイプもあって、本論文で言及する五つの比喩手段を瀬戸 (2002) を通して見ていこう。

² 2.5 節について、瀬戸 (2002) 及び Barbara Dancygier・Eve Sweetser (編) (2014) 『*Figurative Language*』、野村ら (訳) (2021) 『「比喩」とは何か 認知言語学からのアプローチ』を参照にした。

【表 1】瀬戸（2002）によるレトリック早見表（部分）

名称	別名	説明	例
隠喩	暗喩、メタファー (metaphor)	類似性にもとづく比喩である。「人生」を「旅」に喩えるように、典型的には抽象的な対象を具体的なものに見立てて表現する。	人生は旅だ。 彼女は氷の塊だ。
直喩	(simile)	「～のように」などによって類似性を直接示す比喩。しばしばどの点で似ているのかも明示する。	ヤツはスッポンのよう だ。
擬人法	(personification)	人間以外のものを人間に見立てて表現する比喩。隠喩の一種。ことばが人間中心に仕組まれていることを例証する。	社会が病んでいる。母な る大地。
換喩	(metonymy)	「赤ずきん」が「赤ずきんちゃん」を指すように、世界の中でのものとの隣接関係にもとづいて指示を横すべりさせる表現法。	鍋が煮える。 春雨やものがたりゆく 蓑と傘。
提喩	(synecdoche)	「天気」で「いい天気」を意味する場合があるように、類と種の間関係にもとづいて意味範	熱がある。 焼き鳥。 花見に行く。

		囲を伸縮させる表現法。	
--	--	-------------	--

上の表のように、瀬戸（2002）に従い、比喩手段としての五つのタイプを取り上げた。

もちろん、これらの比喩手段はあちらこちらの言語表現に浸透し、言葉をもっと美しくする機能を有している。本論文においても、特に第5章で、ことわざに対する比喩表現の分析に上述の比喩手段がどのようにことわざに用いられるかを詳しく分析する。

2.6 コーパス

本論文においてコーパスを活用した研究の部分は、第4章と第6章である。本節では、Deignan（2005）を参考にし、コーパスの相違、コーパス研究の諸問題、およびコーパスに関する解説（コーパス言語学）をめぐって見ていく。

Deignan（2005）は、コーパスの発展について紹介している。

言語研究の道具としての電子化コーパスは1950年代に発展し始めた（Leech 1991）。その後コンピューターの容量と処理能力が飛躍的に発展したため、電子的蓄えられるコーパスの規模も同様に増大した。Leechが指摘しているが、アメリカ英語のBrown Corpus やイギリス英語のLancaster-Oslo/Bergen (LOB) Corpus など初期のコーパスは、両者とも100万語収録ということで1970年代には大規模コーパスと考えられていた。対照的に、2000年までには個人使用のデスクトップコンピューターで数百万語のコーパスを構築して処理することができるようになり、専門研究者は何億語という規模のコーパスにアクセスできるようになった。同様にコーパス研究のためのソフトウェアの処理速度や柔軟性も増している。

Deignan（2005）[渡辺ら 訳（2010：90）]

上述のように、コーパスの開始は認知言語学研究の誕生よりも早いと言えよう。また、科学技術の進歩に伴い、コーパスの規模も飛躍的に発展してきた。

2.6.1 コーパスの相違について

また、英語の共時的なコーパスには三つの相違点があると Deignan (2005) により紹介されている。それぞれは、含まれるテキストのジャンルが特殊なものかそうでないか；各テキストの部分を集めたものか全部を収録したものか；コーパスが時間の経過とともに増補されていくのか否かの相違である (Deignan 2005 [渡辺ら 訳 2010:90])。詳しくは、以下に整理する。

一点目の「特殊」とは、ある特定のレジスター（言語使用域）やジャンルからテキストを集めたもので、たとえばビジネス英語や非母語話者の英語、特定の著者の作品からテキストを集めたものである。このようなコーパスを使って研究者は特定のレジスターの典型的特徴を確認してそれを記述し、専門的な言語教育や文学的分析に役立てる。これに対し、非特殊コーパス（汎用コーパス）とは、ジャンルやレジスターのバランスが保たれるようにテキストを選択し収録したもので、その言語の全体像についての一般的傾向がコーパスから導き出せるようなものをいう。非特殊コーパス（汎用コーパス）は、「典型的」言語使用者によって経験される当該言語を再現する試みであるとも考えられる。その「典型的」話者は生涯に様々なレジスターで使用された無数の語に出会うわけである。こうした汎用コーパスは、辞書編纂、言語教育、文学研究の背景知識提供などを目的とする言語記述に使用されて役立つものである。

なお、コーパスの第二の相違分類は、収録されたテキストが原テキスト全体を収録したものか、それとも抜粋したような部分収録かの相違である。Deignan (2005) によれば、「British National Corpus」のように、完全収録と部分抜粋のテキストが組み合わさったコーパスもある。部分抜粋法の利点は、それぞれのテキストの語数を正確に同一にできることで、このためコーパスを構築する研究者がどのタイプのテキストもできる限り同じ比率で収録したいと考えるような場合に用いられる。逆に難点もある。Deignan (2005) は Stubbs (1996) をもとに、「部分抜粋法は、テキストの特定の部分に顕著に現れる言語的特徴がきちんと現れないようなコーパスになってしまうこと」と説明している。

なお、三点目について、固定されたコーパスか時間とともに語数が増えていくコーパス（非固定コーパス）かの相違もある。Deignan (2005) によれば、Brown や LOB のような初期のコーパスは、たいてい最初から語数を決めたコーパスであった。収録されるテキスト

はかなり短期間に集められて、コーパスが完成すると固定された。一方、非固定コーパスは「モニターコーパス」もある。このような非固定コーパスとは、つまり、テキストが追加されながら変化していくコーパスで、これは現在では機械可読の形でテキストが広く行き渡っているためにより容易な方法である。また、その特徴としては、いったん収録されたテキストが削除されることはいつも起きるわけではないということである。コーパスをできるだけ大規模にしたいという要請があるからである。

以上、Deignan (2005) をもとに、英語コーパスの相違点を第一から第三まで整理した。考えてみれば、この三点は、基本、日本語コーパス、中国語コーパスにも現れる。特に、三点目の固定コーパスか、非固定コーパスかについて、現在では、ほとんどのコーパスが情報変更にしたがって更新されつつある。つまり、非固定コーパスのほうがよく見られると考える。

2.6.2 コーパス研究の利点と諸問題

Deignan (2005) によれば、コーパス研究に関して、利点や問題点が見られると指摘している。利点について、まず、人の記憶力には限界があり、コンピューターの方がはるかに大量のテキストを保存・検索し、無制限に連続作業を迅速かつ正確に実行する能力を備えていることである。つぎに、人間は自然な言語表現を生み出すために、典型的な語義やコロケーションや文法パターンを記憶し、コンテキストから切り離してはいけなくのに対し、コーパスからは頻度、語の組み合わせ、イディオム、語義に関する観察などを含め、さまざまな予想外の言語使用や言語表現を発見することができる。さらに、根拠のない直観と比べ、コーパスデータはより客観的に言語分析を行うことである (Deignan 2005 [渡辺ら 訳 2010 : 99]) 。

なお、コーパス研究の問題点について、以下の二点があると Deignan (2005) が述べている。

一つは、研究の成果は往々にしてわかりきったものという印象を人に与えるということである。理由を言えば、その成果により確認される情報は潜在意識のレベルで既に知っている言語知識の一部だからである。そのため、そこにある洞察は明白なものとして退けられる恐れがあり、コーパスがなければ明るみに出ることにはなかったかもしれないということも容易に忘れ去られてしまう (Deignan 2005 [渡辺ら 訳 2010 : 101]) 。

もう一つの問題点は、それがつまらないものに思える場合がありうることである。理論言語学者の観点からは、コーパスの観察は語が実際に使用された際の振る舞いを詳細なレベルで正確に記述するかもしれないが、実際、興味深い点も重要性もないと言えるかもしれない。理論言語学者は、それらを言語使用に関する事実だということは認めるだろうが、その重要性におそらく異議を唱えるだろう。コーパス言語学者はそれに対する反論として、実際に話されたり書かれたりした言語データに言及せずに打ち立てた言語理論は、洗練されて理論内ではつじつまが合っているかもしれないが、事実に基づく証拠を無視している以上、言語の振る舞い方を解明する仕事とはまったく無関係だ、という見解を唱える (Deignan 2005 [渡辺ら 訳 2010:101])。

以上により、コーパス研究の利点と問題点を見てきた。次に、コーパス言語学に関する解説を見ていこう。

2.6.3 コーパス言語学

テキストに基づく研究とは異なっている。コーパス言語学者である Deignan のもつデータは電子化された大型コーパスから引き出され、データを構成するのは実際に話されたり書かれたりした調査対象語の用例であり、それらは多様な出典に由来する。他の多くのコーパス言語学者と同様、Deignan の関心は、典型的に生じる言語パターンに向けられている。

コーパス言語学は概念メタファー理論と同様に、1980年代初頭に台頭した。それから20年以上経た現在、応用言語学や関連分野の多くの学者たちが、コーパス言語学がとる仮説と方法になじんでいる (Deignan 2005 [渡辺ら 訳 2010:8])。また、Deignan (2005) は、Meyer (2002) をもとに、コーパス言語学をめぐって以下のように述べている。

コーパス言語学の方法は、現代のコンピュータがもつ大規模の記憶容量と高速処理能力に依存している。これによって、単純ではあるが無限に繰り返されるタスクを人間が行うより何千倍も速く、そして正確に実行できるのである。コーパスとは、コンピュータ可読形式で保存されたテキストの集合体をいう。小規模の研究では、ひとつのあるいは複数のありふれたワープロ作成文書を指すこともあるが、大規模のコーパスは、より洗練された方法で、情報技術分野を専門とする技術者や研究者により編纂さ

れたものである。ビジネスレターや電子メールのような特定のジャンルからひとつのコーパスが構成されていることもあれば、もっと幅広い範囲の言語テキストを包含する目的で設計されたものもある。多くの大規模コーパスは、母語話者が日常生活の中で目にし耳にする言語の実態を反映したものとなるよう試みているが、そのようなことは完全には不可能だと一般に認識されている。その理由のひとつは、成人ひとりひとりが各々の日常生活の中で見聞きする言語ジャンルは、各々の年齢、社会階層、職業、関心といった要因により不均衡になるからである。多くのコーパスにおいて見られる偏りは、そのコーパスに含まれる不適切に大量の書き言葉テキストに由来する。こういうことが生じてしまうのは、話し言葉テキストを収集し文字起こしするには膨大な時間と多額の費用を要するからである (Meyer 2002)。

ある特定のジャンルの分析ではなく一般的な言語学研究に用いるのに十分な規模のコーパスとしては、千万単位の語数が必要になる。これより小規模のコーパスは、頻度のきわめて高い語についての用例を少量提供するのみである。それでは語のふるまいについての一般化は不可能ということになってしまう。

Deignan (2005) [渡辺ら 訳 2010 : 8-9]

中本・李 (2011) は、コーパスによる認知言語学研究の特徴と現状について述べている。その前に、作例と内省による認知言語学研究の特徴と現状も説明している。まず、これについて見ておこう。

研究者自身が例文を作成し (作例)、それに対して内省に基づいて何らかの判断を行い、データとして用いるという手法は、言語研究で伝統的に用いられてきた。この手法を可能にしているのは、(a) ヒトは様々な制約条件のもとで言語表現を産出できるという事実、(b) ある言語の母語話者の間では個々の表現が可能かどうか等に関してかなりの程度判断が一致するという事実である。

中本・李 (2011 : 14)

確かに、作例と内省は伝統的研究手法の一つとして、現在でも使われている。なお、中本・李 (2011) によれば、コーパスによる認知言語学研究の歴史とそれぞれの特徴、現状についての説明は、主に三期に分けて捉えられている。

最初の第一期は、80年代後半から90年代前半においてなされた研究である。その時は主として手作業による用例収集と作例による観察的一般化を行うという手法が用いられた。これは今日のコーパス分析に基づく認知言語学的研究の基礎を築いた重要な研究である。このような研究の特徴として次のことが指摘できる。まず、(i)用例収集が手作業で行われるので、作業コストが高い。(ii)用例収集の範囲が研究者個人の読書量に左右されるので、代表性に問題が残る。(iii)言語事実の発見が偶発的になされるので、他の分析者による再現性が低い。(iv)作例基盤のアプローチが過度な抽象化を行っていることに対して、問題提起していること、(v)生起文脈を重視した分析を行っていることから、研究手法の根底においてはコーパス分析に通じる。

第二期の研究は、90年代後半から始まった研究の流れで、電子化テキストデータを用いた研究である。電子化された大量言語データから機械的に用例を収集し、得られたサンプルを統計的手法で評価し、定性的な手法で観察的一般化を行うというものである。この第二期の研究の特徴として、80年代の認知言語学の旗揚げ以降、作例基盤で蓄積されてきた言語現象の記述的一般化を大規模言語データから再検討するという方向づけがなされており、仮説検証型の研究としての性格を有するようになってきていることである。

なお、第三期の研究は、2000年以降、芽生えつつある研究の流れとして、コーパス分析と心理実験を併用して、言語現象を包括的に見直すというものがある。この時期では、心理学的な実験や調査を行った研究の必要性が次第に認められつつあり、研究数も増えつつあることが特徴である(中本・李 2011: 16-19)。

2.6.3では、Deignan (2005)、中本・李 (2011)を通して、コーパス言語学に関する見解を見てきた。コーパス言語学発展の重要なきっかけの一つはコンピューター技術革新のおかげである。また、必要に応じて、いろいろなタイプのコーパスが設けられていることがわかる。中本・李 (2011)の述べたように、コーパス分析と心理実験を併用して、言語現象を包括的に見直すことがコーパスによる認知言語学研究の現状であるが、科学技術と言語社会の進展にしたがい、これからのコーパスによる認知言語学研究の新たな特徴が期待される。

2.7 命名論

本論文の第8章は命名における様々な理論を活用したうえで、中国語における茶飲料名や世界中各ブランドの化粧品名のネーミングをめぐって分析するものである。

命名論の定義、命名と認知言語学の関わりについて、森（2019）では、以下のように述べている。

我々のまわりには様々な事物が存在しているが、その多くに名前がつけられている。どのようなプロセスでその名前が生じるか探究する学問分野が命名論である。

（中略）

新しい事物が現れたとき、あるいは、その事物の存在に気づいたとき、ほとんどの場合、人間はその事物に名前を与える。事物は名前を与えられることにより、人間世界の一部となる。

また、その命名は人間の視点を通しての作業であるため、大月（2008:117）が述べるように、本質的に認知に深く関わる（言語）行為であり、まさに認知言語学の格好の対象である。

森（2019：609）

森（2019）によれば、世の中の事物に対する名前が付与される要因への探求が命名論の学問分野の一つである。かつ、命名のような人間の視点を通しての作業は認知と深く関わっており、認知言語学において重要な研究の一つと見なされる。

命名論が認知言語学の中でどのように扱われているか、あるいは扱うことが可能か、森（2019）ではいくつかのトピックを通して見るということがなされている。これらのトピックの中で、とくに「表示性」、「表現性」に関する概念解釈及び「命名認知モデル」に関する論述は第8章の主な理論上の支えものとしてその章で紹介する。他に「名の体系と構造」、「命名と認知の対応性仮説」、「再命名」、「命名とメタファー」なども認知言語学の視点から捉えられている。以下、2.7.1では「名の体系と構造」、2.7.2では「命名とメタファー」をめぐって詳しく見て行きたいと考える。

2.7.1 名の体系と構造

まず、森（2019）では、認知言語学以前の代表的な命名論の研究である森岡・山口（1985）が取り上げられ、名の体系と構造について紹介されている。

【表 2】 日常語の構造（森（2019）の図 1 により作成）

抽象一	抽象二	一次	二次	三次	四次
生物	動物	馬	のら犬	テリヤ	ころ
		犬	飼犬	柴犬	ぼち
		兎	捨犬	コリー	まる
	植物	豆	小麦	大穀	関取一号
		麦	大麦	関取	永晶関取
		瓜	裸麦	万力	関取埼一号

森（2019：609）では、森岡・山口（1985）をもとに、「動物の二次名の位置付けや動物と植物の四次名にずれがある（片方が固有名、もう片方が品種名）ことなど疑問点もあるが、この構造の提示と分析は、命名論の機構を考えるにあたって、構造の諸段階によって差が出るという点で重要である。植物学の「科」に用いられている名が日常語では類概念として機能している一次名に相当し、日本語ではこのレベルの名を基準にして、各層の名が派生してくるとしているが、これは認知言語学でいう基本レベル（basic level）に相当する段階である」と論じている。それに加え、森（2019）では、次のように述べられている。

日本語では、ほとんどが一語基からなる和語（例：雨、風、雪、川、山、海、馬、犬、兎、豆、麦、瓜）であり、言語習得の初期段階に属するものであるとされる。二次名は、一次名を類としてそれに種差を冠して作られることが多いとされる（例：奥山、岩山、砂山）。このように構造的に「種差＋類概念」という構造をとるため、その範疇が容易に想定されるという意味で公的な一般用語としての性質を二次名は備えている。ついで、植物学の「科」より上位の「綱」「門」の名称は、日常語の抽象名詞に当たり、これもまた抽象の程度により層をなしているとする。以上に見たように、二次以上のレベル（抽象名、一次名、二次名）は、通常は語としての性格を持ち（森岡・山口 1985：62）、名としてふさわしいのは三次以下の名称であるとし、その命名の契機や着想といった心理面を探る試みが行なわれている。命名論の対象を絞るという意味で重要な指摘であろう。

森（2019：609）

森 (2019) は、命名にあたって「類概念」、「基本レベル」などの概念を紹介している。名前は、抽象的な呼び方から具体的な固有名まで、階層化されている。また、森 (2019) によれば、「三次以下の名称が名としてふさわしい」と指摘している。これは後に述べる「表示性」、「表現性」と関連がある。

2.7.2 命名とメタファー

2.7.2 では、第一に、森 (2019) で紹介されている「命名とメタファーの関わり」の部分例として、「小枝」、「朝市」、「トマト銀行」等を通して見ていく。

第二に、森 (2019) が山田 (1994) をもとに、認知言語学の観点から「命名とメタファー」というトピックを分析している論述を確認する。まず、第一の「命名とメタファーの関わり」の論述について、森 (2012) で検証できる。

この二種のネーミング方法の違いを捉えた点は慧眼と言えるが、チョコレート菓子の「小枝」は、木の小枝との類似性から名づけられたものであり、この場合「のようなもの」のように類似性を示す標識がないのでシミリー（直喩）ではなくメタファー（隠喩）と考えるべきである。野菜ジュースに「朝市」、銀行に「トマト」というのは、類似性をもとにしているというよりも「イメージ喚起」を狙ってつけられているのでメタファーではなくイメージネーミングとでも呼ぶべきものである。結果的に、物と名前との間に何らかのつながりが考えられるので、メタファーとは全く異質のものではないが、メタファーとは異なるものである。

森 (2012 : 91)

さらに、「命名とメタファー」に関し、森 (2019) は、「認知言語学的観点からも興味深い分析がされているものに山田 (1994)がある」と述べている。詳しくは、以下のようになる。

サクラより花が小型のものを「イヌザクラ」、ホオズキと異なり液果が何にも利用できないものである「イヌホオズキ」、特有の臭いがある「イヌザンショウ」。ツゲよ

り不良の材木となる「イヌツゲ」、食用にならない「イヌウド」といった名称を名づけられた植物がある。他にも「イヌ+植物名」という組合せは多く、その関係は多様であるが、「いずれも参照となる植物と〈有用性〉を比べた場合、それより低価値であることを表しており、「イヌ」が「劣ったもの」というメタファーとして体系的に用いられている。ここから、「イヌ」に対してマイナスの価値を持つ日本語文化のなかの見方を取り出せるというのが山田 (1994) の主張である。これは日本の言語文化に存在する認知構造の一つと考えるてもよいものであろう。

森 (2019 : 614-615)

森 (2019) が述べたように、このような命名を反映したメタファーへの認知言語学的な分析も今後展開されることが期待できる。

2.8 本章のまとめ

本章では理論的背景を中心にまとめて整理した。まずは認知言語学の発展の流れを見てきた。また、認知言語学に関する新たな研究や発見、認知と言語学の関係について理解した。

さらに、本論文で言及する各概念説明、定義づけなどを第2章で確認した。次章から、これらの理論的背景に基づき、植物に関する日中両語表現について認知的な考察を進めていく。

第3章 概念メタファー《人間は植物》の日中対照研究

3.1 はじめに

前章は理論的背景について述べた。本章では、靑山（2006a）³の現代日本語を対象にした研究をもとにして、現代中国語における植物の生長過程に関する言葉と人間（の営み）との間でどのような関係が存在するかを論じ、且つ、植物の生長過程における「種」/〈種子〉、「花」/〈花〉に関する表現をめぐって、日中両語の対照研究を行う。

これまでの先行研究では、英語も日本語も植物に関する表現を通して、人間あるいは人間の（営み）を表していることが論じられている。これに対し、現代中国語における植物と人間とのメタファー表現はまだ多く論じられていない。管見の限り、段（2018a）では、「花が咲く」という植物に関わる慣用表現の分析を通して人間の「恋」を表すというメタファー表現について述べられている。また、段（2018b）においては、女性は花に喩えられるという、「女性は花」の概念メタファーについて論じられている。しかしながら、中国における植物と人間との関わりについて、段（2018a）、（2018b）のみで、まだ十分に検討されていないと考えられる。本章では、まず、現代中国語は日本語のように人間（の営み）を植物の生長過程に関する言葉で表せるか否かを論証する必要があると考える。次に、段（2018a）、（2018b）があげられている「恋は花咲く」、「女性は花」という概念メタファー表現は、恐らく日中両語の共通しているところと予想でき、それ以外の言葉に対する異なる捉え方を論じることが本章の目的である。

以下、3.2節では、英語、日本語に関わる先行研究を挙げる。3.3節では、現代中国語における植物としての人間がどのように存在しているかを考察していく。3.4、3.5節では、日中両語における「種」/〈種子〉、「花」/〈花〉の異なる捉え方について論じる。本章

³ 本章の考察において、靑山（2006b）『日本語は人間をどう見ているか』研究社の一部も参考したが、主要参考資料として、靑山（2006a）をあげる。

のまとめとして 3.6 節を付す。

3.2 先行研究

3.2.1 英語による表現例

英語の表現として、概念メタファー研究の先駆と見なされている Lakoff and Jonson (1980)、Lakoff and Turner (1989) は、《Ideas Are Plants》(アイディアは植物/考えは植物である)、《People Are Plants》(人間は植物) という概念メタファーを提言されている。具体的に言えば、Lakoff and Johnson (1980) は、「人間の(考え)」を表すのに、植物の生長に関わる *fruition*、*bud*、*come to full flower*、*seed*、*plant*、*fertile* などの言葉が用いられることから、《Ideas Are Plants》(考えは植物である) という概念メタファーを論じている。以下は Lakoff and Johnson (1980) がすでに取り上げられた植物に関する実例である。

「考えは植物である」という概念メタファーの実例

①His ideas have finally come to *fruition*.

「彼の考えはついに種を結んだ。」

②That idea *died on the vine*.

「その考えは種を結ばずに終わった。」

③That is a *budding theory*.

「芽を出しかけたばかりの理論だ。」

④It will take years for that idea to *come to full flower*.

「その思想が開花するには何年もかかるだろう。」

⑤He views chemistry as a mere *offshoot* of physics.

「彼は化学を物理の一分枝としか見ていない。」

⑥Mathematics has many *branches*.

「数学には多くの分枝がある。」

⑦The seeds of his great ideas were *planted* in his youth.

「彼の偉大な思想の種子は青年時代に蒔かれたものであった。」

⑧She has a *fertile* imagination.

「彼女は多産な想像力を持っている。」

⑨Here is an idea that I would like to *plant* in your mind.

「これがあなたの頭の中に植え付けておきたい思想だ。」

⑩He has a *barren* mind.

「彼の頭脳は不毛だ。」

以上の10例によって、《Ideas Are Plants》(アイディアは植物/考えは植物である)という概念メタファーをLakoff and Johnson (1980) は説明している。

また、Lakoff and Turner (1989)において、植物の一年間の生長の段階 (*a young sprout*, *in full bloom*, *withering a way*などの言葉) は、人生の各段階と対応し、人間を植物(ないしその一部)とみなし、人生を植物の生命の周期と結びつけるような形の隠喩を用いることがあると述べている。

3.2.2 日本語による表現例

なお、日本語の面を見れば、植物に関する表現を通して植物以外のものを表すのは古代日本語から現代日本語にわたって見られる。まず取り上げたいのは森(1996)である。森(1996:56)によれば、上代日本語においては、「根の下延へ」、「草木が繁っている」という植物に関する表現で人間の「心」と「思い」を表している。つまり、植物と人間との関わりは古くから表現されている。

また、平賀(1993)、(1997)⁴では、「世界は男女に分かれる」と述べられ、それに従い、女性観について述べられている。平賀(1997)は、「メタファーは言語のいたるところに偏在する現象である」と指摘している。それに関し、我々の身のまわりの言語生活の例を取り上げている。

⁴ 平賀(1993) : 1993年5月「品物としての女:メタファーにあらわれる女性観」『日本語学』5月臨時増刊号『世界の女性語・日本の女性語』pp. 213-223

平賀(1997) : 平賀(1993)による再録されたものである。[井出祥子(編)『女性語の世界』(明治書院 1997 pp. 114-129)] 本論文では、便宜上、平賀(1997)に従う。

①あの部長は頭が固くて困る。

②ちょっと顔を貸してくれませんか。

この2例は日常でよく使われる隠喩である。このような慣習化された隠喩は、もはや隠喩であること自体をことさら意識させないほど聞き慣れた表現になっており、まさに言葉の血や肉となって我々の言語生活を豊かにしていると言える（平賀（1997：114））。

つまり、上述のようなよく使われている用例がすでに我々の日常生活に浸透し、まさか隠喩の含まれている表現だと思わなくなってしまうている。

一方、平賀（1997）によれば、文学作品の中には斬新で力のある隠喩もたくさんあるという。

例えば、

③幸せは翼を持っている。

こちらでは、〈幸福〉を〈翼のあるもの〉にたとえることによって、日常的な意味体系を一時的に崩すような新たな意味付けが生じている。これにより、文学作品の表現力が豊かになる可能性が高い。

鍋島（2011）は、植物に対し「元気」「嬉しそう」「喜ぶ」といった感情が付与され、植物は通常の意味で自ら動くことはないので、自律的变化や直立性が擬人の鍵となつていと述べている。つまり、植物と人間との関連性を表している。

本論文においては、第6章で述べるが、近年、コーパス検索の利用を通して、日本語に関する研究が増えている。後の第6章で指摘する『筑波ウェブコーパス』〈<http://corpus.tsukuba.ac.jp>〉のほかにも、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』〈<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>〉を利用して、『人間は植物』に関する概念メタファーをここで提示したいと考える。

ここでは、「枯れる」、「雑草」、「芽生える」、「青臭い」、「実り」という植物に関わる5つの表現について人間との繋がりを順に見ていこう。（下線は筆者による）

「枯れる」

最初は、「枯れる」を見ていこう。

①「（若い女性と再婚するなんて）不潔だ」の一言は場違いの感を抱かれるだろう。「枯れる」ことをこれとする老年文化は、変化を余儀なくされている。関沢英彦 1997『岩波

②でもある氏が、この本の中でこんなことを言っているのです。（『年をとって年相応に枯れる』）なんていうのは、バカでも枯れるわけで、そんなものは一銭の価値もない。

江藤亜矢子 2001『現役ナースが明かす更年期ホントの話』

③そんなにボロになっても、心は錦だ。そしてこの身が枯れるまで咲き続けるから……
Yahoo ブログ／サービス 2008

④思い悩んだり、潔く人生を渡ったり、切ない思いをしたり、孤独を嘔みしめたり、上手に枯れることを願ったり、そんな年齢であることなど思いも寄らないだろう。西村玲子 2003『おしゃれの賞味期限』

⑤テキヤの商売は、客に顔をしられてきたら、もうダメだ。だから東京の新宿あたりでも、平日をながくつかってれば、人が枯れる。田中小実昌 2004『香具師の旅』

「枯れる」と言えば、枯木は、木の水分や栄養がなくなり、立っているだけで、何も役に立たないことを指す。もちろん、「木が枯れる」、「花が枯れる」など、木や花という植物の表現に用いられることが一番ふさわしい言い方である。

しかしながら、取り上げられた①～④の用例は、いずれも人間に関する表述で、しかも、人間の年齢と関係している。特に、①の「枯れる」は「年を取る」と置き換えられ、②と③の「枯れる」の意味により、年取ったからこそ、「元気がなくなる」と置き換えられる。また、④についても年を取り、元気がなくなると同じ意味で表されている。ただし、この「枯れる」の前に、わざわざ「上手に」という修飾副詞をつけ、「枯れる」の特徴、や人間は「枯れる」に対する嫌味も同時に現れている。人間が枯れること、あるいは、年を取ることに対し嫌であるが、現実の世界では不老長寿は存在せず、枯れることを抑制することもできない。時間の経過に従い、人間は枯れることが事実であり、現実の人々もその事実を受け、認めるしかない。しかし、「枯れるのであっても上手に枯れたい」というのは、人々の最後の願いである。

⑤の例では、「枯れる」は人間の「年齢」関係がないから、一見、概念メタファーではないと思ってしまうかもしれないが、これも人間を植物に例えた概念メタファーである。こちらの「枯れる」は、直接的に人数の少ないことを表している。文の全体を通し、「人が枯れる」は人が少ないと言い換えられる。

「雑草」

引き続き、植物である「雑草」に関するさまざまな表現を見ていく。

①高官たちを裁くことができず、官を「天上の星」と仰ぐ。民は『草民』と呼ばれ、野原の雑草のように踏みにじられ、いつ死んでも構わない存在だ。小公望 1997『中南海の「最高機密」』

②毎日毎日やるべきことをきちんとしていないから、無駄な欲望が雑草のように成長するのである。加藤諦三 2001『苦しくても意味のある人生』

③転がっていた小さな石の一つだに、章子は忘れ得なかった。自分は世の路の傍に生う雑草の一本として……吉屋信子 2003『屋根裏の二処女』

④私は繊細な花ではない。たくましい雑草だ。美しくもなく魅力的でもないけれど、しぶとさならある。根気なら誰にも負けない。ジーン・ブレイシャー（作）；南さゆり（訳）2005『花婿の拒絶』

⑤ロボット大会に、出た息子たちは、一組が福岡大会に行くことが決まりました。雑草の息子は、残念でしたが、息子の友達が行きます。Yahoo ブログ／サービス 2008

⑥フランス革命の立役者たちは、雑草のごとく繁茂する過去の因習を根こぎにして、ユートピアを更地のうえに築き上げる。富原真弓 2002『シモーヌ・ヴェイユ』

以上の用例の中で、まずは②例について分析したいと考える。②例では、下線部も植物の概念メタファーと見なされる。しかし、これは既に述べた「考えは植物である」のカテゴリーに属すると考える。欲望は人間の内心的な活動であり、脳の構造とつながり、考えの一種と捉えられる。「欲望が雑草」というのは「考えが雑草」とも言える。ここでは特に、「雑草」が人々と直接の関係がなく、人々の間接的な「考え」とつながっているから、②例は、「考えは植物」に属すると考えてほしい。

他の5つの例については、すべて《人間は植物》という概念メタファーに該当すると考える。まず、①「民は草民、野原の雑草」、③「自分は雑草の一本」、⑤「雑草の息子」、というこれら3つの例は、すべて「人間」を「植物」に喩えられている表現である。いわば、「人間」を「雑草」に喩えた、人に対する皮肉な表現である。一方、「枯れる」は「年を取る人」の喩えであるのに対し、「雑草」は若い人あるいは少なくとも中年の喩えとして理解される。それは各例文の内容や語感から理解できるだろう。もともと期待されている人は「雑草」であるため、実際には何もできない人間になってしまう。さらに、「雑草」という人間のたとえでは、単なる若い人ではなく、粘り強い人のことをも表せる。例えば、④「私はたくましい雑草だ」、⑥立役者たちは、雑草のごとく繁茂する過去の因習を根こ

ぎにして……」のような例は、人間の粘り強さをあらわしている。

ここまでは、動詞である「枯れる」と名詞である「雑草」を通して、《人間は植物》という概念メタファーを考察してきた。また、植物の属性を持つ「枯れる」と「雑草」は人間の異なる属性を代表する。「枯れる」は「年配の人」の代表であるのに対して、「雑草」は「若い人」の代表であることが一般的である。さらに、それぞれの特殊な意味合いも無視してはいけない。つまり、場合によって、「枯れる」は「人数の少ない状況」を表せるし、「雑草」は「粘り強い人のこと」をも表せる。

次に、《人間は植物》の下位カテゴリ表現である《感情は植物》に関する例も見てみよう。

「芽生える」

これから「芽生える」という表現に付随する意味を見る。

取り上げる例は以下となる。

①おなかの赤ちゃんを守るために、攻撃的になる本能が芽生える。Yahoo 知恵袋／子育てと学校／子育て、出産 2005

②反省が人を裁く刀になってはいけません。そういう気持が芽生えるということは、まだ自我やプライドや欲望を捨て去れず、神の目になっていないからです。中丸薫 2004 『闇の世界権利をくつがえす日本人の力』

③…帰国したくないという気持があるという。このブログはなぜ、そのような気持が芽生えるのかを考察したものである。Yahoo ブログ／サービス 2008

④不倫は、夫婦関係を完全に無視したところに芽生える純粋な恋愛感情に基づくものではないし……小浜逸郎 1994 『中年男性論』

⑤これで会社自体に危機感が芽生えれば、体質改善になるし、更なる競争意識も芽生えるだろうし……Yahoo ブログ／ビジネスと経済／金融と投資 2008

⑥世界史の先生と一生懸命ラテン語の解明をするうち、二人の間に奇妙な信頼関係が芽生える。日野直子 2003 『目覚めのバロック』

⑦どう伝えていいのだから？もう好きにならないと思っけていても、突然恋って芽生えるものなんですよね。Yahoo 知恵袋／恋愛相談 人間関係の悩み 2005

⑧どのような気持になるのだろう。自分には理解できない凄まじい思いが、自殺者の心には芽生えるに違いない。嘉美原一也 2003 『巣立ちの日』

⑨そろそろママやパパと同じものを食べたいという意識も芽生える時期。村田洋子 2002『すくすくネットワーク（NHK テレビ放送テキスト）』

⑩新しい学問・技術の着想は一人の研究者の頭に芽生える。大見忠弘 2004『未来を拓く志実力を磨いて世の中の役に立とう』

⑪昨日の会話なんて誰も知っているはずがないのに、そんな醜い感情が芽生えるほど、私はショックだったのかもしれない。松岡やよい 2002『いってきます！』

⑫これが歴史の結果だった、ドイツの中に欧州の覇権を握る意識が再び芽生える一方で、歴史の教訓を学んで、欧州統合のために邁進する動きが高まっているのも事実だ。藤井良広 1995『通貨崩壊』

⑬2 人は一致協力し合っているうちに、本物の恋が芽生える。著者不明 2001『癒やす力・考える力をつける脳の使い方』

⑭紆余曲折を経るのは想像難くなく、見事に成し遂げられれば本当の友情が芽生えるのかもしれない。果たして…… Yahoo ブログ／趣味とスポーツ 2008

⑮後は、お姉さんがいる男性は、姉が家に連れてくる姉の女友達を見て憧れの情が芽生えるケースもあるようです。Yahoo 知恵袋／健康、美容とファッション 2005

⑯まるでそうすることによって、愛情が芽生えるかのように、父は母の態度の違いをなじるようになりました。ギヤスケル（著）松岡光治（編訳） 2000『ギヤスケル短編集』

⑰労働が義務となり、嫉妬心や猜疑心が芽生える銀の時代。高遠弘美 2003『新潮 45』

⑱『僕の友達ショフィク』も、同級生のパキスタン人の少年と白人の少年とのあいだに芽生える友情を軸に、現代の多文化社会の問題点を浮き上がらせている。定松正 1993『英米児童文学の系譜』

⑲生徒の心理として、一番不信感が芽生えるのが、ごまかすことだそうです。Yahoo 知恵袋／職業とキャリア 2005

⑳「天性の勝負感」はいつ、どこで芽生えるのか……藤沢秀行 2003『人生の大局をどう読むか』

㉑子供を育てるときに忘れてはいけないのが、その年代、年代で芽生える好奇心を満たしてあげることなんです。仲田安津子 1999『1～2歳こどものお仕事遊び200』

㉒抗争になか芽生える男たちの友情のドラマが胸に熱い。佐藤順ら 2001『おとなびあ』

㉓大陸からやってきたレイキウとシウクワンは香港で出会い、ふとしたことから恋愛感情が芽生える。松岡充 2001『文化夜總會』

以上 23 例のうち、まず、下線の部分も「考えは植物」として捉えられていると考えたい。考えであれ、感情であれ、2 つとも抽象的な概念であるが、区別する意識が必要であると思われる。考えは人間の頭の構造によって産み出される意識や思想で、感情は心理的な活動によって生み出される情誼である。そのため、概念メタファーにおける下線部の⑤「意識も芽生える」、⑧「思いが、自殺者の心には芽生える」、⑨「意識も芽生える」、⑩「着想は一人の研究者の頭に芽生える」、⑫「意識が再び芽生える」は「考えは植物である」との言い方に相応しいと考える。また、他の例についても、「感情は植物である」に該当する。さらに、用例により、「芽生える」は「嫉妬心」や「猜疑心」など、否定的な意味に関わる表現が存在しているが、全体的に見れば、「芽生える」（芽出度い）は純粋な「愛情」、「友情」という肯定的な意味を表すことが多い。植物の生長の段階で、「芽生える」まで行けば、すでに芽が出来ていて、これからの発展や結果も大変期待されるということから、概念メタファーの中の「芽生える」は主に肯定的な表現として使われる。

また、「芽生える」以外の感情に関するいくつかの表現もこちらで取り上げたいと考える。

「青臭い」

青々とした草の様子を表す「青臭い」という言葉も人間の感情と繋がる場合がある。

①お察しの通り、私はもはや青臭い情熱に浮かされて幻想を抱くような年齢ではないのですが、それでも、いついかなる時も…… P・G・ハマトン(著)/ 下谷 和幸(訳)/ 渡部 昇一(訳) (1993) 『知的人間関係』 講談社

②何ちゅうかこうセンチメンタルな青臭い気分で、「ああ、あの頃は青雲の志に燃えて…」などと感傷に浸ろうとしたところへ……原田 宗典 (2003) 『見たことも聞いたこともない』 光文社

最後に、「実り」に関する用例である。「実り」については、「恋は実りました。」などよく耳にする。それは感情の中の一つ、愛情である。また、ここで取り上げる例は、愛情以外に、友情や仕事に対する熱情も例に現れる。「実り」の使用範囲が拡大していることもわかる。

「実り」

①ランドを追いやる情熱の激しさと、自分の感情を一種の皮肉な冷めた目で見ると、ドリンクの実りなき愛とを対比している。ウイントン・ディーン(著)/ 藤江 効子(訳) (2005)

『ヘンデルオペラ・セリアの世界』春秋社

②建築家などのまちづくりの専門家、そして行政のまちづくり担当職員の強い意志と熱意が実り、廃屋寸前だった「山手 234 番館」の保存活用が実現したのです。神奈川県建築士会住まい・まちづくり委員会編（2001）『だれでもわかるまちづくり読本―「ひとり」から、「みんな」でまちづくり』公職研

③黙っていても恋は実りませんよね。Yahoo!知恵袋/健康、美容とファッション/恋愛相談、人間関係の悩み（2005）

④深い人間関係への洞察をもって人間の触れ合いがなされる時、友好は最も実り豊かなものになるように思うのです。Yahoo!ブログ/ビジネスと経済/ビジネス（2008）

ここまで、「芽生える」、「青臭い」、「実り」などを見てきたが、植物関係の言葉は人間の感情表現に使われ、「感情は植物である」という概念メタファーのイメージがより強くなった。

さらに、靱山（2006a）では、現代日本語の表現の分析を通して、「人間（の営み）を植物（の営み）」を通して捉える（植物としての人間）というメタファーが存在するという提言がなされている。かつ、このメタファーの下位レベルのメタファーとして、植物の生長過程の各段階（を表す言葉）が、「人間」に関することを以下の

- （一）何かを達成すること・成果をあげることを目的とした人間の営み
- （二）人間の一生の諸段階
- （三）女性の生長・成熟の過程
- （四）心・精神の状態の変化の過程

という四つの「人間（の営み）」に用い、いずれの場合も基本的に「植物の生長過程」の諸段階（の一部）との間に対応関係が認められると述べられている。

これらの先行研究のすべては、モト領域の植物（の成長過程の言葉）をサキ領域の人間（の営み）へと写像しているわけである。次節では、靱山（2006a）で論じられている「「人間（の営み）」を植物の生長過程を通して捉えられる」という（一）、（二）、（三）、（四）の四つの見方に基づき、現代中国語における植物の生長過程に関する言葉と人間（の営み）との関わりを考察していく。

3.3 現代中国語における植物としての人間

昀山 (2006a : 93) では、「植物の生長過程」のイメージ・スキーマを

- (1) 種、(2) 発芽 (芽が出る)、(3) 苗/苗木、(4) 開花 (花が咲く) [(4-1) 蕾、(4-2) 開花、(4-3) 散る/枯れる]、(5) 結実 (実がなる)、(6) 枯死

に分類している。

昀山 (2006a) が取り上げている「植物の専門家ではなく、普通の人が「植物」(特に種子植物) について知っていること、つまり、植物の生長過程に対する認識」は中国人の考えにも適用できることが想像できる。なお、中国人の植物の生長過程に対する認識の中、「種」と「発芽」の間に「根」が入る場合もある。

現代日本語の意味に対して、中国語では、植物の各生長過程について、「種」を〈种子〉、「発芽」を〈发芽〉、「苗」を〈苗/苗子〉、「開花」を〈开花〉、「結実」を〈结果〉、「枯死」を〈枯萎〉などの形で表される場合が多い。且つ、これらの中国語の同類として同義語もいくつか使われている。例えば、発芽の〈发芽〉という場合、〈长芽〉、〈出芽〉、〈冒芽〉がよく見られ、枯死の〈枯萎〉は〈凋落〉(特に葉に対して)、〈凋零〉(特に花に対して) などの言い方もある。

このような植物の生長過程に従い、中国の電子化コーパス《北语汉语语料库》(北語漢語語料庫) 〈<http://bcc.blcu.edu.cn/>〉を用い、植物と人間とが関わっている表現を提示する。現代日本語の表現では、《人間は植物》を通して見る上述の四つの見方が存在していると昀山によって分析されている。なお、これらの四つの見方は中国語の表現にはあてはまるか否かを本節で確認していく。(下線は筆者により、括弧内は日本語の訳である。)

3.3.1 「何かを達成すること・成果をあげてを目的とした人間の営み」

- 1a. 一场阴谋与战争在黑暗之中慢慢发芽 (陰謀と戦争が闇の中にこっそり芽生えている)
2a. 计划取得了丰硕的结果 (その計画は豊かな結果をもたらした)
2b. 按照初期规划的结果, 每一个工厂现在所占的面积还不算大 (最初に計画した結果として、各工場の面積はそれほど大きくなかった)

- 2c. 这次行动产生了一系列重要的结果 (今回の行動により大切な結果が生み出された)
- 2d. 努力出了结果 (努力は実った)
- 3a. 产业的凋零 (産業のしぼみ)
- 3b. 家业逐渐凋零 (家業はどんどんしぼんでいく)
- 3c. 昔日的繁华正在逐步凋落 (昔の繁華は散っている)

以上の中国語の例から見れば、いずれも人間又は人間の営み (例 3a - 3c) を表す状態である。それぞれの表現は植物の生長過程の「発芽」、「結実」、「枯れる」(しぼむ、散る) に対応していることが一見して分かる。

3.3.2 「人間の一生の諸段階」

- 4a. 种子 (種)
- 5a. 苗子 (苗/苗木)
- 6a. 落地生根 (土地に根を広げる)
- 7a. 老一辈的人凋零已尽 (お年寄りの方々はしぼんでしまった)
- 7b. 生命已一步一步凋谢 (命は徐々にしぼんでいる)
- 7c. 凋落的生命 (散ってしまった命)

人間の一生の諸段階について、中国語の表現では、例 4a について、日本語の表現と同じ、つまり、厳密上に人間になる前の「精子」の婉曲的な言い方である。これは人間の一生の最も諸段階である。また、例 5a「苗子」は、未来性がたくさんある若い人間を指す場合が多く、つまり、人間の青少年期をたとえている。なお、例 6a の意味について、人間は自らの仕事及び家のある場所に安定させ、余生をその場で過ごすという意味になる。これは人間の営みに関する表現として理解しても差し支えないが、もう少し考えれば、このような営みを行う人々は決して若くなく、少なくとも 30 過ぎ、40 代くらいの年で行うことである。つまり、こちらは人間の中年時を指す。更に、例 7a - 7c は人間の最終段階のことを指す。

3.3.3 「女性の生長・成熟の過程」

「女性の生長・成熟の過程」に関する中国語の表現では、「開花」と「枯れる」を挙げ

ることができる。

8a. 你那两个孩子都这么大了，几岁就有老公，好个早开的花啊（子供たちもうこんなに大きいんだ、若いのに旦那を持つてるなんて、本当に早咲きの花だね）

8b. 用她自己的话说就是，我是一朵迟开的花（彼女自身の話だと、私は遅咲きの花だ）

9a. 她的美貌在无情的岁月中逐渐枯萎（彼女的美貌は冷たい年月のうちに枯れている）

9b. 妆容凋落（化粧が散ってしまう）

3.3.4 「心・精神の状態の変化の過程」

10a. 有一个愿望多年来深植在我的心中（長年に、この願望は私の心中に植え付けられている）

11a. 精神在心中生根（精神は心中に根を広げる）

11b. 信念在心里生根（信念は心中に根を広げる）

12a. 绝望在他的心中发芽（絶望は彼の心中に芽生える）

12b. 梦想在一点点的发芽（夢は少しずつ芽生えている）

12c. 心底里窃窃的喜悦正在抽丝发芽（心の中の密かな喜びは芽生えている）

13a. 理想将在一代一代人的心里生根开花（理想は次々と次世代人の心中に根を下して開花する）

13b. 自己的诸多梦想都没有开花（自らの様々な夢はまだ開花していない）

14a. 想法结出了果实（考えは実った）

14b. 在战争期间所进行的祈祷已经结出了果实（戦争中に行っていた祈祷は既に実った）

14c. 不安的结果（不安の結果）

15a. 凋落的死心（散っていた断念）

以上のように、植物に関わる中国語表現を用い、「心・精神の状態の変化の過程」を表す例が様々見られる。

3.3.5 「愛情の変化過程」

16a. 情苗（情の苗）

17a. 新生的情感从中冒芽（新たな情は芽生えてきた）

18a. 只能让这段情缘在未开花之前就成了心中的积淀（今回の恋は開花する前に沈んでしまった）

19a. 静静的看着这对结出了果的恋人（実った恋人に見つめる）

20a. 等待了一年的恋情却在即将绽放的当天凋谢（一年間を待った恋は咲く日に散ってしまう）

3.3.6 まとめ

本章では、「はじめ」及び「先行研究」について、3.1 と 3.2 において述べた。3.3.1 から 3.3.4 にかけて、靑山（2006a）に基づき、現代中国語における「植物としての人間」に関する様々な表現を見てきた。靑山が述べている植物の生長過程に関する言葉を通して人間を見るという4つの見方について、現代中国語にも適用できることを確認した。このような類似性が生じた理由は二つの面から考えられる。一つは、言うまでもなく、日本と中国はアジア圏に属する隣国であるため、日本人と中国人と物事に対する発想が近い場合があるからである。もう一つは、日中両国は同じ漢字文化圏であるため、漢字を通じた言葉の伝達には類似性が見られるということである。

一方、植物の生長過程に関する言葉を通して人間（の営み）を述べるのに、それぞれの表現の容認度が異なっている場合もある。たとえば、3.3.1「何かを達成すること・成果をあげることを目的とした人間の営み」について、日本語でも中国語でも様々な用例が見られるのに対し、3.3.3「女性の生長・成熟の過程」について述べられる例が日本語、中国語ともに比較的少ない。

なお、3.3.5について、靑山（2006a）では取り上げられていないが、現代中国語の表現では、人間の営みの一部である「愛情の変化過程」を植物の生長過程に関する言葉で捉えることができる。且つ、愛情の変化に関する各過程は植物の各生長過程の変化に対応でき、表現の容認度が高いと見られる。ただし、日本語でも、「黙っていても恋は実りませんよね」のような例がある。

これまでの考察により、日中両語における植物の生長過程に関する言葉の表現はかなり共通していると見られる。以下、植物の生長過程に関わる「種」/〈种子〉と「開花」/〈开花〉を中心に、日中両語の間に存在している異なる捉え方について述べていく。

3.4 「種」 / 〈种子〉 に対する異なる捉え方

これまでの用例によれば、日中両語における人間（の営み）に用いられる「種」 / 〈种子〉に関する表現は、ともに人間（の営み）の初期段階を表すことが確認できる。また、大石（2010 : 151 - 152）によれば、「種」に対する価値評価の要約は以下のようにまとめられる。

・「～の種」という表現に付随する否定的な意味合いが多く見られる。これは、種という小さな物体から植物が成長していくことは、人間には制御不可能な事態の象徴であり、それに対する心配や不安などの否定的な感情に偏って用いられると説明されている。

・「幸福の種」、「未来の種」のような肯定的な語彙も含む。これは、栽培植物が開花・結実したときの華やかさや充実感への期待を基盤とするものであり、人生の成功に重ね合わせられているという解釈がなされている。

以上の日本語の表現に現れてくる「種」に対する価値評価について、中国語においても、〈罪恶的种子〉（罪恶の種）、〈幸福的种子〉（幸福の種）などの言い方が存在し、つまり、日中を問わず、「～の種」 / 〈～的种子〉に付随する表現の両面性（肯定的な意味合いと否定的な意味合い）を持つことが分かる。「種」 / 〈种子〉が地面の中に入ってそのあとの生長（発展）状態が目で見えなく、様々な外部条件により、よく生長できるか、あまりうまく行かないかをすぐに判断できるものではないため、「～の種」 / 〈～的种子〉という表現が両面性を持つ理由となると考える。

これまでの「種」 / 〈种子〉に関する表現を考えると、全ては物事の発端に関わっており、この現象は鍋島（2011 : 201）⁵に合致していると考えられる。

一方、中国語では、〈种子〉（種）に関する以下のような表現の例もある。

21a. 这场比赛中，我们只派出种子选手（今回の試合は、種子選手しか出さない）

21b. 知道自己成了种子选手后很高兴，也很惊讶（種子選手になったことに驚いたが、大変嬉しい）

⁵ 鍋島（2011 : 201）では、因果の概念化の中、「種」を「発端（原因）」と写像されている。

21c. 让呼吸与危重症医学的“种子选手”赴美国实地学习（呼吸学及び重症医学の“種子選手”を米国の実地研修に行かせる）

〈种子选手〉（種子選手）というのは体育業界でよく使われている言葉の一種である。そもそも能力のある選手たちを試合の決勝戦まで保留するために、彼らを異なるチームに振り分けるというチーム分けのコツである。このようなたくさんの選手の中に、能力の高い人が〈种子〉（種）という呼び名をつけられ、〈种子选手〉（種子選手）（直接に〈种子〉（種）と呼ばれる場合もある）はそのチームの中で能力のあり、重要な人を指すのである。これは、因果の概念化と捉えられるよりも、「能力のある人」を〈种子〉（種）にたとえられる隠喩の面で考えられている。選手たちは人間である（大きい）に関わらず、小さい〈种子〉（種）が撒かれるように振り分けられるというイメージのマッピングが強まっている。更に、例 22c のように、〈种子选手〉「種子選手」は体育業界に使われているのみならず、企業などの公的な場合にも能力の高い人を〈种子选手〉「種子選手」と呼ぶことがある。体育業界において専有的な言葉は中国社会に幅広く用いられることは「下位カテゴリー」から「上位カテゴリー」への転移であり、これは提喩による拡張といえよう。

これまでの考察で分かるように、日中両語における「種」/〈种子〉について、共通的な捉え方を有している一方、中国語のみ〈种子选手〉（種子選手）のような期待可能というイメージの面から認知する場合もある。

3.5 「開花」/〈开花〉に対する異なる捉え方

日中両語における「開花」（花が咲く）/〈开花〉に対する認知状態はほとんど共通していることが確認できる。その共通点とえば、「開花」（花が咲く）/〈开花〉は人（の営み）に対する「プラスの描写」のことである。

しかしながら、現代中国語では、植物の生長過程に属する〈开花〉（開花）について、単なる「プラスの描写」となるのみならず、〈开花〉（開花）は「マイナスの描写」となる場合もある。以下は中国語の表現に良くみられる例である。

22a. 我就把你的脑袋打开花（あなたの頭を開花するまで殴る）

22b. 摔得屁股开花（転んでお尻が開花してしまった）

上述の中国語の例を日本語に直訳すると、頭の開花、お尻の開花となり、もちろん、身

体部位（頭、お尻など）の上に花が咲くことではなく、いずれも血が出るまで大怪我した時の様子を表す場面である。ここでは、『新明解国語辞典』第7版、《現代汉语词典》（現代漢語辞典）第5版を利用し、「開花」/〈开花〉の辞書解釈を確認する。

開花：

- ①花が開くこと。「開花期」
- ②成果となって現われること。「努力が開花する」

（『新明解国語辞典』第7版：222）

开花：

- ③生出花朵，花蕾开放：〈开花结果〉

（日本語訳：花を産み出し、花蕾が開放する：「開花結実」）

- ④比喻像花朵那样破裂开：〈开花儿馒头〉；〈这只鞋开花儿了〉；〈炮弹在敌人的碉堡上开了花〉

（日本語訳：花蕾のように咲く：「開花饅頭」；「この靴が開花した」；「砲弾は敵の堡壘に開花した」）

- ⑤比喻心里高兴或脸露笑容：「心里开了花」；「乐开了花」

（日本語訳：嬉しく、笑顔が出るという喩え：「嬉しくて心の中に開花した」；「嬉しくて開花した」）

- ⑥比喻经验传开或事业兴起：「全面开花」；「遍地开花」

（日本語訳：経験が広がり、事業が順調の喩え：「全面開花」；「至る所で開花する」）

（《現代汉语词典》第5版：756）

以上の辞典の解釈からわかるように、日本語の「開花」より中国語の〈开花〉の方が幅広く使われているようである。「開花」/〈开花〉の本来の意味として使われるのは解釈①と③となる。また、日本語の「開花」に関する二つ目の解釈は中国語の解釈⑥と対応していると見られる。なお、中国語における〈开花〉に関する三つ目の解釈（⑤の解釈）について、人間の感情、心の変化にもたらすポジティブな意味を表す、これは日本語の表現としては用いられないが、日本語話者にとっては理解できる可能性があると考えられる。しかし、中国語の〈开花〉の意味は解釈④まで拡張されることができ、これは日本語の「開花」の意味解釈と対応し難い。

日本語の場合、「詐欺の才能が開花した」というような例が一見「マイナスの描写」にもなるが、「才能が開花する」というのは抽象的な概念であり、実質上に、中国語の例と異なっている。中国語における〈开花〉は「マイナスの描写」とされる対象は具体的なものである。これらの具体的なものは（人間の場合、頭、お尻など形が丸い身体部位が主に）花の蕾のように咲く（裂く）というイメージのマッピングが目立つ。このような植物の生長過程における「開花」/〈开花〉について、日本語では「プラスの描写」のみを表すのに対し、中国語では「プラスの描写」と「マイナスの描写」と両方を表すことができることを見てきた。

3.6 本章のまとめ

本章は糸山（2006a）で提言されている現代日本語における植物を通して人間を見るという4つの見方に基づき、現代中国語の植物の生長過程としての人間に関する様々な表現を考察してきた。結果として、植物の生長過程に関する言語表現は人間及び人間の様々な営みに使われていることは現代中国語にも適用することと確認できた。植物の生長過程に関する言葉を通して人間（の営み）を表現するという概念メタファー表現は日中両国の差異がそれほど大きくないといえよう。

一方、両語の間に些細な差を提示しなければならないと考える。本章の後半では、植物の生長過程の一部である「種」/〈种子〉、「開花」/〈开花〉に対する考察を行った。「種」/〈种子〉に対する捉え方について、小さい種は人間の脳の中で、物事の発端（原因）を表すことは普通であるが、中国語の場合、現実的に能力のある人をも表現できる。また、「開花」/〈开花〉の概念レベルの意味合いについて、日本語では「プラスの描写」のみを持つが、中国語の場合、「プラスの描写」を持つのみならず、「マイナスの描写」もあり得る。

このように、中国語における〈种子〉または〈开花〉の意味的な生産性は日本語より高いことを確認することができた。

本章の考察を通して、同じ表現を使っても言語の違いにより異なる捉え方が生じていることを提示した。このようなことが言語学習者の中でどのような状況として存在しているかを今後の課題として追究する必要があると考える。

第3章用例一覧

3.2.1 英語による表現例

①His ideas have finally come to *fruition*.

「彼の考えはついに種を結んだ。」

②That idea *died on the vine*.

「その考えは種を結ばずに終わった。」

③That is a *budding theory*.

「芽を出しかけたばかりの理論だ。」

④It will take years for that idea to *come to full flower*.

「その思想が開花するには何年もかかるだろう。」

⑤He views chemistry as a mere *offshoot* of physics.

「彼は化学を物理の一分枝としか見ていない。」

⑥Mathematics has many *branches*.

「数学には多くの分枝がある。」

⑦The seeds of his great ideas were *planted* in his youth.

「彼の偉大な思想の種子は青年時代に蒔かれたものであった。」

⑧She has a *fertile* imagination.

「彼女は多産な想像力を持っている。」

⑨Here is an idea that I would like to *plant* in your mind.

「これがあなたの頭の中に植え付けておきたい思想だ。」

⑩He has a *barren* mind.

「彼の頭脳は不毛だ。」

3.2.2 日本語による表現例

①あの部長は頭が固くて困る。

②ちょっと顔を貸してくれませんか。

③幸せは翼を持っている。

3.3.1 中国語による表現例-1

- 1a. 一场阴谋与战争在黑暗之中慢慢**发芽**（陰謀と戦争が闇の中にこっそり芽生えている）
- 2a. 计划取得了丰硕的**结果**（その計画は豊かな結果をもたらした）
- 2b. 按照初期规划的**结果**，每一个工厂现在所占的面积还不算大（最初に計画した結果として、各工場の面積はそれほど大きくなかった）
- 2c. 这次行动产生了一系列重要的**结果**（今回の行動により大切な結果が生み出された）
- 2d. 努力出了**结果**（努力は実った）
- 3a. 产业的**凋零**（産業のしぼみ）
- 3b. 家业逐渐**凋零**（家業はどんどんしぼんでいく）
- 3c. 昔日的繁华正在逐步**凋落**（昔の繁華は散っている）

3.3.2 中国語による表現例-2

- 4a. **种子**（種）
- 5a. **苗子**（苗/苗木）
- 6a. 落地**生根**（土地に根を広げる）
- 7a. 老一辈的人**凋零**已尽（お年寄りの方々はしぼんでしまった）
- 7b. 生命已一步一步**凋谢**（命は徐々にしぼんでいる）
- 7c. **凋落**的生命（散ってしまった命）

3.3.3 中国語による表現例-3

- 8a. 你那两个孩子都这么大了，几岁就有老公，好个**早开的花**啊（子供たちもうこんなに大きいんだ、若いのに旦那を持ってるなんて、本当に早咲きの花だね）
- 8b. 用她自己的话说就是，我是一朵**迟开的花**（彼女自身の話だと、私は遅咲きの花だ）
- 9a. 她的美貌在无情的岁月中逐渐**枯萎**（彼女的美貌は冷たい年月のうちに枯れている）
- 9b. 妆容**凋落**（化粧が散ってしまう）

3.3.4 中国語による表現例-4

- 10a. 有一个愿望多年来**深植**在我的心中（長年に、この願望は私の心中に植え付けられている）
- 11a. 精神在心中**生根**（精神は心中に根を広げる）

- 11b. 信念在心里生根 (信念は心中に根を広げる)
- 12a. 绝望在他的心中发芽 (絶望は彼の心中に芽生える)
- 12b. 梦想在一点点的发芽 (夢は少しずつ芽生えている)
- 12c. 心底里窃窃的喜悦正在抽丝发芽 (心の中の密かな喜びは芽生えている)
- 13a. 理想将在一代一代人的心里生根开花 (理想は次々と次世代人の心中に根を下して開花する)
- 13b. 自己的诸多梦想都没有开花 (自らの様々な夢はまだ開花していない)
- 14a. 想法结出了果实 (考えは実った)
- 14b. 在战争期间所进行的祈祷已经结出了果实 (戦争中に行っていた祈祷は既に実った)
- 14c. 不安的结果 (不安の結果)
- 15a. 凋落的死心 (散っていた断念)

3.3.5 中国語による表現例-5

- 16a. 情苗 (情の苗)
- 17a. 新生的情感从中冒芽 (新たな情は芽生えてきた)
- 18a. 只能让这段情缘在未开花之前就成了心中的积淀 (今回の恋は開花する前に沈んでしまった)
- 19a. 静静的看着这对结出了果的恋人 (実った恋人に見つめる)
- 20a. 等待了一年的恋情却在即将绽放的当天凋谢 (一年間を待った恋は咲く日に散ってしまう)

3.4 その他の例-1

- 21a. 这场比赛中, 我们只派出种子选手 (今回の試合は、種子選手しか出さない)
- 21b. 知道自己成了种子选手后很高兴, 也很惊讶 (種子選手になったことに驚いたが、大変嬉しい)
- 21c. 让呼吸与危重症医学的“种子选手”赴美国实地学习 (呼吸学及び重症医学の“種子選手”を米国の実地研修に行かせる)

3.5 その他の例-2

- 22a. 我就把你的脑袋打开花 (あなたの頭を開花するまで殴る)

22b. 摔得屁股开花 (転んでお尻が開花してしまった)

第4章 会話談話から見る概念メタファー表現《人間は植物》

—中国語の四字熟語を中心に—

4.1 はじめに

物事が身体部分に喩えられることは森（2012）で述べられている。

喩えは物事を理解させるために重要な言語技術である。我々にとって最も身近な存在である身体の言葉を使って様々な事物を表現していることなどもその例といってよい。

森（2012：4）

森（2012）で挙げられている具体例を以下の【表1】にまとめる。

【表1】物事を身体部分で喩えている表現例

身体部分	日本語表現
頭	釘の頭
顔	チームの顔
目	台風の目
耳	パンの耳
腕	大臣の右腕
足	テーブルの足

上述の身体部分に関する日本語表現は実際の生活で使われているし、イメージ的にも想像できる。特に印象深いのは、日本のブランドである山崎製パン会社の、食パンの広告文

「耳まで美味しい」である。これは森（2012）が述べていると同じように、食パンのふちのこんがり焼けた部分（パンのまわり）を人間の身体部分である「耳」（人間の体のまわり）に置き換え、その部分もおいしいことを指しているのである。

これを参考に、中国語の場合を考えてみた。

中国語の場合、＜床头＞「ベッドの頭」、＜床肚＞「ベッドのお腹」、＜桌肚＞「テーブルのお腹」、＜桌腿＞「テーブルの足」、＜针眼＞「針の目」、＜门把手＞「ドアの取っ手」などの表現は日常でよく使われている。これらは日本語表現と共通する点もあれば、相違する点もある。共通点として、「テーブルの足」、「取っ手」という表現がある。一方、＜床肚＞「ベッドのお腹」、＜桌肚＞「テーブルのお腹」などの言い方について、日本語ではあまり見られず、中国語のほうがより自然である。これはベッドやテーブルの下のスペースを指している。

日中間わずに物事を身体部分に関する言葉で表現することは、人々に親近感を与えるうえにイメージ的にも印象深くなる。なぜなら、身体部分は人間を構成する上で不可欠なものである。上述の各種の表現をさらに言えば、物事を「人間/人間の一部分」に喩えていると言ってもよいだろう。用例を再び見てみよう。「ベッド」、「テーブル」などの家具の具体的な部位を「人間の頭」、「人間のお腹」に喩えており、メタファーの視点から考えれば、《家具は人間/人間の一部分》と言い換えられる。つまり、《アイディアは人》、《恋愛/愛は病人》、《インフレは人》、《機械は人間》、《植物は人間》、《動物は人間》、《組織は生命体》のような《～は人間/人》⁶が単純にメタファーになりうるのみならず、明らかにメタファー体系に属する「擬人」⁷にもなると考えられる。

一方、鍋島（2011）では、《アイディアは植物》、《因果は植物/植物の生長》、《人間/人は植物》、《問題は植物》など、《～は植物》が表現例として数多く取り上げられている。物事を表すのに、人間で喩えるだけでなく、植物で喩える場面もよくあるということである。

後でも述べるが、いずれにせよ、これまでの研究は言葉の表現特性に注目することが多

⁶ 《～は人間/人》に関する用例は、鍋島弘治郎（2011）『日本語のメタファー』による。

⁷ 鍋島（2011:152）によれば、人間以外の存在を人間のように見立てることを「擬人法」または「擬人化」と見なす。

く、表現の応用実態は明白にされていないところが多い。本章の主眼は人間を表す植物に関する四字熟語を収集し、分析したうえで、それらの応用場面や応用状況を確認していくことである。

なお、本節以降の構成は以下となる。

4.2 節では概念メタファーに関する理論的背景を見ていく。4.3 節では、人間が植物に喩えられる先行研究を取り上げる。それから、先行研究を踏まえたうえでの問題提起と本章の研究目的を4.4 節で述べる。4.5 節は本章の調査に入る。まとめとして4.6 節を付す。

4.2 概念メタファーの定義づけ

概念メタファーに関する研究は1980年代頃から世界に広がってきた。概念メタファーの定義説明については研究者によって多少異なるが、ほとんどはLakoff and Johnson (1980) が基礎になっている。

本章では、まず、笠貫 (2013) を見てみよう。

Lakoff and Johnson (1980) は、メタファーを概念レベルの問題として捉えた点で、それまでの伝統的な見方とは大きく異なる。すなわち、思考や行動の基盤ともなる我々の概念体系そのものがメタファー的であり、言語表現に見られるメタファーはその反映であるという見方である。ゆえに、メタファーは単なる修辭的表現ではなく、日常的な言語使用に見られるものであり、メタファー的な概念体系に根ざして一貫性のある表現が生み出されることになる。概念体系としてのメタファーは「概念メタファー (conceptual metaphor)」と呼ばれ、「AはBである (A IS B)」の形で示される。

笠貫 (2013 : 56)

また、鍋島 (2011) では、「概念メタファー」という用語の概念は出されていないが、そのかわりに、「広義のメタファー」と「狭義のメタファー」が提言され、具体的に以下のようなことが書かれている。

メタファーという用語には、広義のメタファー (比喩全般) と狭義のメタファー (隠喩) がある。広義のメタファーは、「レトリック」や「修辭」という語とほぼ同義で「字義通

りではない」という意味で使用される。

本書では狭義のメタファー（隠喩）を対象とし、メタファーという用語は特に明示しない限り狭義の意味で用いるものとする。

（鍋島 2011：001）

鍋島（2011）では、「明日の光を浴びながら、振り返らずにそのまま行こう」という用例が挙げられている。この表現の説明について、鍋島（2011）には、「明日の光というのはどこから降り注いでいるのだろうか。また、振り返ると自分の後ろには何があるのだろうか。このような質問をすると、十中八九、光は前から注いでおり、振り返る先には過去がある、という答えが返ってくる。このような解説は文中にまったく表れていないにもかかわらず、ほとんどの人が共通した心像（イメージ）を頭の中に描いたのである。（中略）言語表現に表れていない内容を推量する推論の研究は、メタファー研究の重要な一部を構成している。」と書かれている。

前述のように、鍋島（2011）では、「概念メタファー」という用語ははっきりと出されていないにもかかわらず、言語表現に対して推量する過程がおそらく笠貫（2013）の観点と一致していると考えられる。また、「メタファー研究の重要な一部を構成している」と述べている。これにより、「狭義のメタファー」に対する推論の研究は、「概念メタファー研究」の定義に等しいと言えよう。

本章では、このような単発ではなく、体系的に思考や推量が含まれる言語の論証及び言語の研究を「概念メタファー研究」とする。この研究に基づいた言語表現を「概念メタファー」と呼ぶことにする。

4.3 先行研究

4.3.1 英語文献

第1節で述べたように、人間を表す植物に関する先行研究と表現例をこちらで見えていく。

概念メタファー研究の先駆と見なされている Lakoff and Johnson (1980)⁸、Lakoff and Turner (1989) は、《Ideas Are Plants》(アイディアは植物/考えは植物である)、《People Are Plants》(人は植物) という概念メタファーを提言している。具体的に言えば、Lakoff and Johnson (1980) は、「人間/人間の考え」を表すのに、植物の生長に関わる *fruition*、*bud*、*come to full flower*、*seed*、*plant*、*fertile* などの言葉が用いられることから、《Ideas Are Plants》(考えは植物である) という概念メタファーを論じている。また、Lakoff and Turner (1989) において、植物の一年間の生長の段階 (*a young sprout*、*in full bloom*、*withering a way* などの言葉) は、人生の各段階と対応し、人間を植物 (ないしその一部) とみなし、人生を植物の生命の周期と結びつけるような形の隠喩を用いることがあると述べている。

上の英語表現である《Ideas Are Plants》(アイディアは植物/考えは植物である) と《People Are Plants》(人は植物) は、人間 (人間の営み) が植物に喩えられることを意味している。

4.3.2 日本語文献

また、森 (1996 : 56) によると、上代日本語においては、「根の下延へ」、「草木が繁っている」という植物に関する表現で人間の「心」と「思い」を表している。人の心理的な活動はもちろん人間の営みの一種であり、このような人間の営みも植物に関する概念メタファー表現に転じている。

前述のように、靱山 (2006a) では、現代日本語の表現分析を通して、「人間 (の営み) を植物 (の営み)」を通して捉える (植物としての人間) という概念メタファーが存在することが提言されている。かつ、この概念メタファーの下位レベルのメタファーとして、植物の生長過程における各段階 (を表す言葉) が、「人間」に関する以下の

- (一) 何かを達成すること・成果をあげることを目的とした人間の営み
- (二) 人間の一生の諸段階

⁸ 和訳のレイコフ・ジョンソン (1980) とレイコフ&ジョンソン (1980) と同じ文献を指す。

(三) 女性の生長・成熟の過程

(四) 心・精神の状態の変化の過程

という四つの「人間（の営み）」に用いられ、いずれの場合も基本的に「植物の生長過程」の諸段階（の一部）との間に対応関係が認められると述べている。

上述の日英の文献に加え、銭（2019）及び本論文の第3章では、植物の生長過程の一部である「種」/〈种子〉、「開花」/〈开花〉に対する対照考察を行った。そして、それらに些細な差が存在していることを論じた。「種」/〈种子〉に対する捉え方について、日本語で小さい種が、物事の発端（原因）を表すことは普通であるが、中国語の場合、現実的に能力のある人をも表現できる。また、「開花」/〈开花〉の概念レベルの意味合いについて、日本語では「プラスの描写」のみを持つが、中国語の場合、「プラスの描写」を持つのみならず、「マイナスの描写」もあり得る。このような中国語における〈种子〉または〈开花〉の意味的な生産性は日本語より高いことを確認できた。

日中対照考察のほかに、日本語における植物に関するメタファー表現に対して、中国人日本語学習者がどのように理解しているかについては銭（2020）で述べた。

銭（2020）では、中国人若年層日本語教師の日本語メタファー表現に対する解釈（理解）のアンケート調査を通じ、中国人日本語教師のメタフォリカル・コンピテンス及びメタファー表現理解に影響を及ぼす原因を考察した。具体的に、「壁の花」、「雑草」、「新米」、「桃李」、「同期の桜」、「濡れ落ち葉」、「古株」、「大和撫子」という8つの日本語メタファー表現の中国語母語話者（中国人若年層日本語教師）による理解についてアンケートの形で調査してみた。結果として、中国人若年層日本語教師のメタフォリカル・コンピテンスはそれほど高くない現状（平均正解率 32.21%）であることを指摘した。また、具体例を通して、中国人日本語学習者（被験者）によるメタファー解釈のずれ及び文脈は日本語メタファー表現理解への影響であることについて述べた。この調査での被験者は地域的に広い範囲（南京市、無錫市、蘇州市、ハルビン市、湖北省、四川省、山東省など）から集めた若年層日本語教師で、その調査結果は中国広範囲でのメタファー学習現状の反

映の一つとなり、日本語学習者にとって、語に対する文化的背景知識を意識的に拡張することが重要だと述べた⁹。

4.3.3 中国語文献

言うまでもなく、日英のメタファー表現と同じように、中国語の場合でも、物事が植物との関連で成り立つメタファー表現は少なくない。たとえば、中国語では、古くから<杏林>、<梨園>、<杏坛>はそれぞれ「医学」、「演劇、芸術」、「教育」のことを表している。なお、今の若者の間では、<需要多少米>がよく使われている。これを直訳すれば、「お米がいくら必要か」との意味になるが、実際には「お金がいくら必要か」と聞いているのである。これは古代中国の民衆たちはほぼ農家出身で、お米を持てば持つほど金持ちだと見なされるからである。つまり古代の中国において「お米」は「お金」と同様な役割をはたしていたわけである。何かを買う時、お金のかわりに、お米を払う時代でもあった。

また、中国語の場合でも植物に関わる表現で人間（または人間の営み）を表すことがよくある。次より植物と人間の関連で成り立つ言語表現を見てみたい。

最初に<校花>、<班草>/<校草>¹⁰の例を見てみよう。

<校花>は「学校で最もきれいな女子学生のこと」で、<班草>/<校草>は「クラスで或は学校で最もかっこいい男子学生の喩え」である。「花」が鮮やかできれいだという特性より、女性の喩えによく使われている。それに対し、男性を喩える場合、相対的に「草」の使用頻度が高い。

さらに、羅・葛（2010）では、<中国人对植物有着深刻的感知、善于从植物身上来发现其与人类及其他事物的相似之处。因此、汉语中存在众多的植物隐喻>と述べられている。

（訳：「中国人は植物に対する深い認知を持っている。植物と人間の間の、または植物と他の物事との似ている部分（類似性）を植物の視点から見ることがよくある。そのため、

⁹ 本論文において、第7章が銭（2020）に基づき、加筆修正を施したものである。

¹⁰ この2つの用例は、陳晦（2014）でも挙げられている。

中国語において、植物に関するメタファー表現がたくさん存在している。」)

ここでは、羅・葛（2010）の一部の用例を引用する。

第一に、植物の特徴を利用して人を喩える。

<桃花>

桃の花のような美しい人

<小辣椒>

大胆で、気迫のある人

<开心果>

いつも他人を喜ばせる人

<墙头草>

日本語では二股膏薬という意味で、あちらに従ったり、こちらに従ったり、態度が一定しない人

第二に、植物を借りて、人間の外観を表現する。

<花容月貌>「美しい顔の喩え」、<艳若桃李>「美しい顔の喩え」、<樱桃小口>「美しい唇の喩え」、<杨柳细腰>「いいスタイルの喩え」、<桃花眼>「きれいな目の喩え」、<萝卜腿>「太い足の喩え」などが、例として取り上げられる。

第三に、植物に関する表現で人の年齢を喩える。

<豆蔻少女>、<花信年华>などが示されている。

前者は10代の少女のことを指し、後者は20代の女性のことを指す。

第四に、古い詩の中でも植物に関する語句を用い、人の品格を表すことがある。

例えば、<朝饮木兰之圣露兮、兮餐秋菊之落英>、<芝兰生于深林、不以无人而不芳>などの詩句は、人々の節操を固く守ることを指している。

以上、羅・葛（2010）で取り上げられた用例を見てきた。ほかに植物と人間（または人間の営み）と繋がっている中国語の補足例を【表2】で提示する。

【表2】中国語における植物と人間の繋がりを表す補足例

中国語表現例	日本語訳
<花痴>	男性に惚れている女性のことを指すのがほとんどである。この場合、惚れられる対象は男性と言っても「花」のように美しいと見られる。
<奇葩>	変わった人
<草根>	地位がとても低く、権力のない人
<独苗>	一人っ子、しかも男の子を指す場合が多い
<攀高枝>	金持ちや権力者の後ろに追いつく人
<朽木>	精神の腐った人間

【表 2】では、概念メタファー《人は植物》の常用例を補足した。これに加え、近頃は<谢了>「枯れた」、<摆烂>「腐らす」は流行語になっている。<谢了>「枯れた」について、もともとは花などの枯れた状態を指し、この場合は、花、蕾などの植物は主語として通常の表現の中に現れてくる。最近、「人々のがっかりした気分またはやる気のない状態」を指すようになった。この時は、自分自身を指すことがほとんどであるため、主語は省略される。特に若い世代の間で使われることが多い。また、<摆烂>「腐らす」は、新鮮な野菜、花などをずっと置いておくと、腐ってしまうということから、「人間の怠ける状態」を表している。

4.4 問題提起と研究目的（対象）

4.4.1 問題提起

4.3 の先行研究で見たように、植物の含まれる言葉を用いて物事を喩えていることが多くあり、植物と深く繋がっていることを反映している。なかでも人間と植物の繋がりはいろいろな場面で見られると日英中の文献によって指摘されている。

一方、それらの多くは概念メタファー《人間は植物》の下位カテゴリー表現（具体例の有り様）に対する分析や理解にとどまっている。《人間は植物》に関する表現例の応用状況について、明らかにされていないところがまだ多い。それをより一層追究する必要がある。

ると考えられる。

4.4.2 研究目的（対象）

《人間は植物》に関する下位概念メタファーの具体例が会話談話のどの場面で応用されるか、またどのぐらいの応用頻度かを確認していくことが本章の研究目的である。

なお、本章の考察対象を会話談話中の植物に関する四字熟語に絞っておく。日本語の場合、「連句」、「和歌」などにおける談話のレトリック研究は大森（2004）が挙げられる。大森（2004）の述べるように、日本では、俳句や和歌といった短詩形詩歌を愛好し、自らも作るという人たちの数は非常に多い。こちらでは、大森（2004）で取り上げられている一例を見てみよう。

1998年の、スペースシャトル「ディスカバリー」に乗り込んだ宇宙飛行士の向井千秋氏が「宙がえり何度もできる無重力」を詠んで、それに対する下の句を募集したところ、14万以上もの応募があった（大森：188-189）。また、大森（2004）によれば、優秀作として表彰された作品の中には、「（41）湯舟でくるり、わが子の宇宙」と「（42）月のうさぎとシャルウィダンス」という下の句があった。これらの句に対する説明を大森（2004）ではこう述べている。

（41）は小さな子供の入浴時の様子と宇宙遊泳をダブらせたものである。現代の科学技術の粋を結集した宇宙開発の大きな仕事と、人類の未来を担う、可能性に溢れた小さな子供の日常生活の情景が、「くるり」という動きにおいてメタフォリカルに重なり合った句で、空間的、時間的なスケールの大きさが感じられる。（42）は、ディスカバリーが浮かぶ宇宙区間から、われわれにとって最も身近な天体の一つである月を、さらにその表面に浮かぶ模様からうさぎをメトニミカルに連想し、月のうさぎと宙返りしながらダンスを踊るという、ほほえましい空想の世界を作り出している。

大森（2004：189）

以上は大森（2004）がおこなった二つの下の句に対する説明解釈である。向井千秋氏の上の句に対して、多くの人たちが応答した。大森（2004）の述べたように、人々はメタファーやメトニミーなどのレトリカルな認知能力に基づき、下の句を詠んだわけである。そ

れぞれ上下両句からなる歌の対話、想像的世界を成立させたのである。

また、ほかの連句における談話のレトリックについて言えば、最も古いものは『万葉集』に見られる。同じく大森（2004）における談話のレトリックに関する例文や解説を見ていこう。

「佐保川の水を塞き上げて植ゑし田を 尼作る」

「刈る早稲飯は独りなるべし 家持接ぐ」

佐保川の水を塞き止めて植えた田を、と詠む尼の句は、自ら娘を稲にたとえたメタファーである。娘に求婚者が現れたことに対して、せっかく丹誠こめて育てた娘なのに手放さなければならないことを嘆いているわけである。それに対して大伴家持は、しかたがないよ、娘はいずれ結婚して1人のものになってしまうのだから、と慰めるべく、これはメタファーで、田を刈って早稲の飯を食べるのはただ独りなのだろう、と応えているのである。

大森（2004：190）

さらに、大森（2004）によれば、和歌における詩的談話の形成にレトリックがどのような役割を果たしているのかという点について、次のような例を挙げて説明している。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る （額田王）

天智天皇によって催された近江の蒲生野における薬狩（野山に出て薬草を採る行事）の際に、額田王が天智天皇の弟で皇太子の大海人皇子に贈った歌である。額田王は、以前、大海人皇子に愛されて皇女を産んだが、この歌が詠まれた時点では天智天皇に召されて宮中に侍している。染料の原料となる紫草という草を栽培している標野（御料地）で、天智天皇に伴っている額田王に、皇子は恐れ気もなく袖を振る。万葉の時代、「袖を振る」という行為は、相手に対する親愛の気持ちを表すメトニミカルな象徴的行為であった。額田王は人目もはばからずに大胆な愛情表現を示す皇子をはらはらして見守りながら、野守（御料地の番人）に見られてしまったらどうなさいませう、と呼びかけている。この歌には、二つのメトニミーが詠み込まれている。皇子の恋愛感情を示す「袖振る」と、その皇子の感情を天皇、あるいは宮廷社会が咎めるという

事態を引き起こす原因となる「野守が見る」である。これらのメトニミーを詠み込むことによって、今となってはもはや許されない皇子の恋心をやんわりとたしなめるとともに、皇子に対してなおも失っていない額田王の優しい感情を醸し出した歌になっている。

大森 (2004 : 194-195)

上述のように、大森 (2004) は異なる点 (連句、和歌など) からレトリックの手段や形式を見ている。これに対し、言語表現のもう一種四字熟語というものは、漢語においての特有の言語現象の一種となり、表現上は短くて濃縮されているが、意味上は長い文に負けないほど高度な表現手段となり、覚えやすく人々に様々なイメージを与える。また、四字熟語は中国でも日本でも使われている。飯間浩明 (2018) によれば、日本では「四字熟語」という用語は戦後に広まった新語のようで、「四字熟語」という用語で呼ばれることには、古風な語も、新語も、教訓的なものも、そうでないものも含まれる。それらの共通点は、「日常生活を送る上で、覚えておくといい四字の漢字熟語」(飯間浩明 (2018)) ということになる。

多数の四字熟語の中で、植物が含まれる四字熟語表現も少なくない。その中の一部は、人間とつながりのある植物四字熟語となり、つまり、植物に関する四字熟語で人間 (人間の営み) を表しているのである。なお、四字熟語は普段単独で出ることではなく、前後文脈が前提として、その中から意識的に出されるのがほとんどである。

そのため、本章では人間 (人間の営み) を表す植物の四字熟語表現が会話談話においてどのように使用されているかやどのぐらいの使用頻度になるかを確かめてみたい。

4.5 考察

4.5.1 データの扱い

人間を喩えるのに用いられる概念メタファー《人間は植物》の具体例は「一般表現」、
「慣用表現」、「俗語表現」など、様々な形からなる。

前述のように、本章では、その形の一つである「四字熟語」(場合によって、四字熟語は「成句」とも言われる) に注目することにする。四字熟語は日中両国の国民にとって、

なじみのある言葉表現の一つであり、文章の中はもちろん、会話談話でもよく使われている。小松原（2016）では、「言語表現の意味を詳しく観察していくほど、言語使用のコンテキストに関係しない表現などというものは無いように思われる」と述べている。四字熟語も同じように、独自で現れる場合（非常に少ないと思われる）とコンテキストのある（例えば会話談話の中に出現すること）場合、言語表現上の理解や効果は異なると考えられる。本章はコンテキストの役割を重視し、四字熟語の例を挙げるとともに、それらを含む具体的な会話談話例を考察対象とする。

本章で取り上げるデータの出处について言えば、まず、人間（または人間の営み）を喩えている植物四字熟語をランダムに15個列挙する。それから、補足として、中国語の植物四字熟語（成句）に関する参考書《成语有意思・植物世界》、《成语里的博物学・植物》をもとに、重複例を除き、上述の二冊の本の中で取り上げられた人間とかかわりのある植物四字熟語をすべて抽出する。

4.5.2 考察方法

まず、4.1で述べたように、人間（人間の営み）を表す植物四字熟語を46個収集する。それから、関連データに基づき、中国語の検索コーパス《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）（<http://bcc.blcu.edu.cn/>）を用い、会話談話例を検索してみる。《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）の略称は「BCC」であり、北京言語大学教授団より開発され、現段階における中国の社会言語生活を反映している体系的で大規模な検索コーパスであると言われている。《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）の使用紹介によれば、本コーパスの収録字数は約95億字で、「文学」、「新聞」、「会話」、「古語」など多領域にわたる検索コーパスである。

このコーパスに接続すれば、上述の各領域の検索へアクセスできる。したがって、本章においては植物に関する四字熟語が会話談話中の応用状況を把握することが目的であるため、《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）コーパスの検索領域（項目）の「会話」に注目する。「会話」領域（項目）検索欄に調べたい四字熟語を入力すれば、植物四字熟語を含む会話談話例が存在している場合、例文が出てくるはずである。かつ、それらの会話談話例の中から、本章の研究方向と一致する人間（人間の営み）を喩えている例を用例として抽出することができる。これにより、会話談話中の植物四字熟語の使用状況や使用頻度

が把握できるようになる。

4.5.3 考察過程

以下、《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）検索コーパスを使った考察情報を【表3】に整理する。

【表3】植物四字熟語に関する会話談話の表現例

中国語四字熟語	主要意味訳	コーパスによる代表例（中国語）
背靠大树	有権者に頼ること	なし
残花败柳	年を取って元気のない人、女性を指すことが多い	满脸风尘、 残花败柳 、腹黒い女人。
花季雨季	16、17歳の少女少女	惋惜、 花季雨季 の年齢、那么美丽、可惜。
黄花闺女	青春で若い女の子	哪个 黄花闺女 被你骗上了。
金枝玉叶	身分が高い人	なし
开枝散叶	家族繁栄のために、子供を多く生むこと	你早已不关心我、还想我为皇家 开枝散叶 。
落叶归根	年を取って、実家に戻ること	上海是个让人待了就想 落叶归根 的地方。
木头桩子	反応が遅い人	哎呀、 木头桩子 、生日快乐、早生贵子。
三寸金莲	布に絞られて、小さくされた足	那是女人的 三寸金莲 啊。
艳若桃李	外観が美しいこと	艳若桃李 、冷若冰霜、嗯嗯、就像我。
玉树临风	カッコ良い男性のこと	没事、没事、你高、就是八十也 玉树临风 。
枝繁叶茂	家族の人数が多いこと	你家还真多小孩、必须必须 枝繁叶茂 。
指桑骂槐	甲を叱るつもりなのに、わざと乙を叱る	指桑骂槐 、说谁呢。
煮豆燃箕	男兄弟互いに殺し合ってしまうこと	なし
树大招风	あまりにも目立つ人は恨みを招く	树大招风 、我们其实是活该啦。
不辨菽麦	人間の愚かさ	なし
春华秋实	品行方正で自律できる人或は人の努力の結晶	なし
寸草春晖★	親に恩返ししようとしても僅かなことしかできない	なし
椿萱并茂★	両親が健康に生活していること	なし
豆蔻年华	13.14歳の少女	豆蔻年华 、又老了一岁。
焚芝锄蕙	有能な人が禍にあうこと	なし

红豆相思	男女が慕いあうこと	红豆相思 、相思也是一种情怀。
红杏出墙	女性の不倫のことを指す場合が多い	你不要趁我不在就各种 红杏出墙 。
青枝绿叶	元気満々で若い人	青枝绿叶 の青春、总有一天逝去。
青出于蓝	生徒（後輩）が先生（先輩）より優れること	师妹更加厉害， 青出于蓝 。
桑榆暮里	人間の年を取ったこと	なし
松萝共倚	夫婦間仲がいいこと	なし
水性杨花	女性の軽はずみのこと	なし
揠苗助长	むりやり子供を成長させること	走路都没学会就想要飞？ 揠苗助长 …
游丝飞絮	自分の考えや思考を持たない人	なし
苍松翠柏	品格ある人	なし
李代桃僵	他人の罪を着ること	なし
闭月羞花★	女性の美しい容貌	绝世容颜～、沉鱼落雁、 闭月羞花 。
出水芙蓉	美しい女性のこと	宝贝长这么大了呀、越来越 出水芙蓉 啦。
含苞待放	未成年の少女のこと	16岁便是那 含苞待放 的玉兰、有那么多期待
花枝招展	女性の派手な身振り	打扮的 花枝招展 。
空谷幽兰	品格が備わること	可惜我是一朵真实的 空谷幽兰 。
梨花带雨	女性の可愛さや美しさ	梨花带雨 、她真的太好看了。
浓桃艳李	容貌がよく、元気のある人	なし
草木皆兵★	人があれこれを疑うこと	なし
芒刺在背	人の恐ろしい状態	なし
萍水相逢★	人々の偶然の出会い	我们只是 萍水相逢 。
香草美人	品格が備わる人	なし
藕断丝连	男女間の絶えない感情や連絡	我们要互相亏欠、我们要 藕断丝连 。
青梅竹马	幼なじみ	因为我和他 青梅竹马 。
投桃报李★	友人間の付き合い	你若 投桃报李 、我会十分感激。
計 46 個		28/46

(★は、後述のように日本語においても見られる例)

上の 46 個の植物四字熟語（人間または人間の営みを表す）では、様々な例を見ることができる。

①【表 3】の植物に関する四字熟語は「人間」または「人間の営み」を表すというものの、人間の営みより直接人間（外貌・特徴）を表すほうが比較的多い。まずは、人間（外貌・特徴）を表す例について述べる。【表 3】の中では、男性を喩えるよりも、女性を喩えるケースがより多い。男性を表す植物四字熟語は〈玉树临风〉のみである。〈玉树临风〉は「カッコ良い男性」のことを指す。

反対に、女性を表すのは〈残花败柳〉、〈黄花闺女〉、〈三寸金莲〉、〈艳若桃李〉、〈豆蔻年华〉、〈红杏出墙〉、〈水性杨花〉、〈闭月羞花〉、〈出水芙蓉〉、〈含苞待放〉、〈花枝招展〉、〈梨花带雨〉、〈浓桃艳李〉と合計 13 個ある。これらの 13 個の植物四字熟語をさらに検討すれば、「女性の年齢」、「女性に対するプラス評価」、「女性に対するマイナス評価」という 3 種類に分類できる。

「女性の年齢」：〈黄花闺女〉、〈豆蔻年华〉、〈含苞待放〉 3 つ全部若い女性のことを表す。

「女性に対するプラス評価」：〈三寸金莲〉、〈艳若桃李〉、〈闭月羞花〉、〈出水芙蓉〉、〈梨花带雨〉、〈浓桃艳李〉この六つの植物四字熟語について、〈三寸金莲〉は女性の小さな足に対する褒めた言い方であり、ほかの植物四字熟語は女性の美しい容貌のことを指す。

「女性に対するマイナス評価」：〈残花败柳〉、〈红杏出墙〉、〈水性杨花〉、〈花枝招展〉は女性に対するマイナス評価を持ち、〈残花败柳〉は「女性の年を取って、元気のない状態」を表す；〈红杏出墙〉、〈水性杨花〉は、女性の不倫、軽はずみの喩えであり、〈花枝招展〉は女性の派手すぎる身なりを表す。

男女（容貌・特徴）のいずれも表すことができる植物四字熟語は 16 個ある。これは上述と同じように、「男女の年齢」、「男女に対するプラス評価」、「男女に対するマイナス評価」の 3 種類に分類することができる。

「男女の年齢」：〈花季雨季〉、〈青枝绿叶〉、〈桑榆暮里〉、〈青梅竹马〉について、年齢順に言えば、〈青梅竹马〉は幼い子のことをいう。〈花季雨季〉は 16、17 歳の少年少女のことを指す。また、青年のような若い人は〈青枝绿叶〉と呼ばれる。最後に、年を取った人のことは〈桑榆暮里〉という。

「男女に対するプラス評価」：〈金枝玉叶〉、〈枝繁叶茂〉、〈春华秋实〉、〈青出于蓝〉、〈松萝共倚〉、〈苍松翠柏〉、〈空谷幽兰〉、〈香草美人〉という植物四字熟語は性別を問わず、人々の良さを喩える。例えば、人々の品格についての喩えでは、〈春华秋实〉、

〈苍松翠柏〉、〈空谷幽兰〉、〈香草美人〉が見られる。人の身分の高いことを〈金枝玉叶〉で表す。また、家族の人数が多く、賑やかなことを〈枝繁叶茂〉といい、夫婦間仲がいいことを〈松萝共倚〉という。〈青出于蓝〉は弟子や後輩が優れていることの喩えである。

「男女に対するマイナス評価」：〈木头桩子〉、〈不辨菽麦〉、〈游丝飞絮〉、〈芒刺在背〉は反応が遅い、正しい判断を持たないなど、人々に対するマイナス評価となる。

以上、人間（外貌・特徴）を表す 30 個の植物四字熟語の比喻性や特徴を見てきた。しかし、【表 3】で示したように、取り上げた植物四字熟語はいずれも人間（人間の営み）を表すことができるが、すべての植物四字熟語が会話談話に用いられているわけではない。人間（外貌・特徴）を表す 30 個の植物四字熟語の中で、コーパス検索で会話談話例が付くのは 19 例ある。会話談話例の付く表現を詳しく見ていこう。

男性を表す唯一の植物四字熟語の会話談話例は〈没事、没事、你高、就是八十也玉树临风。〉「日本語訳：平気、平気、君は背が高いから、80歳になってもカッコいいよ」である。

また、「女性」を喩える植物四字熟語が会話談話に応用されている状況は以下の通りである。

「女性の年齢」に関する会話談話例

〈哪个黄花闺女被你骗上了。〉「日本語訳：知らない若い女の子が君に騙された。」

〈豆蔻年华、又老了一岁。〉「日本語訳：13、14歳の少女、また年が1つ上がった。」

〈16岁便是那含苞待放的玉兰、有那么多期待〉「日本語訳：16歳、白木連の蕾だ、期待される。」

「女性に対するプラス評価」に関する会話談話例

〈那是女人的三寸金莲啊。〉「日本語訳：それは女の小さな足だ。」

〈艳若桃李、冷若冰霜、嗯嗯、就像我。〉「日本語訳：美しいが、冷たい、そう、私はそうである。」

〈绝世容颜～、沉鱼落雁、闭月羞花。〉「日本語訳：めったにない美しい容貌だ。」

〈宝贝长这么大了呀、越来越出水芙蓉啦。〉「日本語訳：こんなに大きくなったか、ますますきれいになるね。」

〈梨花带雨、她真的太好看了。〉「日本語訳：彼女は本当にきれいだ。」

「女性に対するマイナス評価」に関する会話談話例

〈满脸风尘、**残花败柳**、腹黒的女人。〉「日本語訳:全く元気がなく腹黒い女だ。」

〈你不要趁我不在就各种**红杏出墙**。〉「日本語訳:私のいない間に不倫なんかしないで。」

〈打扮的**花枝招展**。〉「訳:あまりに派手すぎた身なりだ。」

なお、以下、男女のいずれも表せる植物四字熟語の会話談話例をあげる。

「男女の年齢」に関する会話談話例

〈惋惜、**花季雨季**の年齢、那么美丽、可惜。〉「日本語訳:残念、16、17歳であんなにきれいなのに、残念。」

〈**青枝绿叶**的青春、总有一天逝去。〉「日本語訳:青春はいつの間にか消えてゆく。」

〈因为我和他**青梅竹马**。〉「日本語訳:彼と幼なじみだ。」

「男女に対するプラス評価」に関する会話談話例

〈你家还真多小孩、必须必须**枝繁叶茂**。〉「日本語訳:お子さんが多いね。絶対に繁盛になれる。」

〈师妹更加厉害、**青出于蓝**。〉「日本語訳:後輩が先輩よりもっと強い。」

〈可惜我是一朵真实的**空谷幽兰**。〉「日本語訳:残念ながら、私は本当に品格がよい人だ。」

「男女に対するマイナス評価」に関する会話談話例

〈哎呀、**木头桩子**、生日快乐、早生贵子。〉「日本語訳:あっ、大木、誕生日おめでとう、早く子供を生め。」

②①に対し、人間の営みや人間の行為を表す表現は〈背靠大树〉、〈开枝散叶〉、〈落叶归根〉、〈指桑骂槐〉、〈煮豆燃萁〉、〈树大招风〉、〈寸草春晖〉、〈椿萱并茂〉、〈焚芝锄蕙〉、〈红豆相思〉、〈握苗助长〉、〈李代桃僵〉、〈草木皆兵〉、〈萍水相逢〉、〈藕断丝连〉、〈投桃报李〉の合計16個である。さきほど述べたように、コーパスの検索により、すべての植物四字熟語が比喩として会話談話に使われているわけではない。ここでは、人間の営みや人間の行為を表す16個の四字熟語のうちの、会話談話例の付かない7個を見てみよう。例えば、権力者に頼ることは〈背靠大树〉といい、この場合〈大树〉は「権力のある人」の喩えである。次の〈煮豆燃萁〉は「男兄弟互いに殺し合ってしまうこと」の喩えである。また、親孝行と関わりのある四字熟語には〈寸草春晖〉と〈椿萱并茂〉

があり、前者は子供の僅かな力〈寸草〉と親の無限の愛〈春晖〉と鮮明な対比になっている。後者の四字熟語は両親の体が健康であることを喩えている。さらに、有能な人は「マンネンタケ」などに喩えられ、その有能な人が禍に遭うことを〈焚芝锄蕙〉という。次に、〈李代桃僵〉は他人の罪を着ることの喩えである。最後の例は、人があれこれを疑い、草木まで「敵」だと見なされることを〈草木皆兵〉という。以上はコーパス検索で会話談話例の付かない四字熟語であるが、人の営みを確実に表せるし、これらのような四字熟語は実際の日常会話でどのような存在であるかを後に検証する必要があると考える。

次に、人間の営みを表せる上にコーパス検索で会話談話例の付く四字熟語の一部も見ていこう。例えば、〈落叶归根〉に関する会話談話表現は〈上海是个让人待了就想落叶归根的地方。〉「日本語訳:上海は人に実家に戻りたい気持ちを与える都市だ」となり、上海のような大都市で生活や仕事をしている人のストレスを反映し、どうしても実家に戻りたいという気持ちを表している。また、〈树大招风〉〈树大招风、我们其实是活该啦。〉「日本語訳:あまりにも目立つ人は恨みを招く、これは私たちの自業自得だ」という会話談話は自分たちの目立った行動などを反省している。さらに、〈揠苗助长〉〈走路都没学会就想要飞? 揠苗助长…〉「日本語訳:歩くのもまだできないのに、飛ぶまで考えてるの、むりやり成長させるのだ」などがあげられる。

【表 3】は中国語における植物に関する四字熟語が会話談話のなかでどのように応用されているかも示している。しかしながら、《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）の検索結果を見る限り、すべての植物四字熟語は会話談話に用いられているわけではない。本章で取り上げた 46 個の植物四字熟語をさらに二つのグループに分けたいと思う。一つ目は、人間（人間の営み）を喩えるのにコーパスの検索で会話談話用例が見られるパターンである（A グループ、28 個）。該当する用例文はそれぞれの四字熟語の右側にすでに付け加えた。四字熟語自体の意味解釈はもちろん、この 28 個の会話談話例も様々な面から人間（人間の営み）を表している。

これに対し、二つ目は、残りの 18 個（B グループ）の四字熟語である。〈春华秋实〉を除き、ほかの 17 個は、該当する会話談話用例が 1 例も見当たらなかった。それらをコーパスで検索してみたところ、会話談話用例数はいずれも「0」であった。なお、四字熟語〈春华秋实〉は検索したところ、それを含む例文は少し出てくるが、人間（人の営み）を喩える比喩性が見られないため、B グループに入れたいと考える。【表 3】では、区別するためにコーパス《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）に〈背靠大树〉、〈金枝玉叶〉、〈煮

豆燃萁>など植物に関する四字熟語の会話談話例が収録されていないものを「なし」と記した。46個の四字熟語の中で、コーパスで会話談話例が見られないものが18個もあった。かなり大きな割合だと考えられる。この現象に対し、本章でBグループに属する四字熟語は実際の日常会話で使われているかをさらにアンケート調査を通して検証してみた。

このアンケート調査での有効回答は合計55件であった。20代から50代までの男女(20人、35人)にアンケートの協力をしてもらい、Bグループに属する18個の四字熟語に対する「理解程度」や日常会話での「使用頻度」の調査を行った。アンケート調査の結果は次の【表4】で示す。

【表4】「Bグループ四字熟語」に対する理解や使用のアンケート調査

Bグループ 四字熟語	理解程度 (計 55)			使用頻度 (計 55)		
	よくわかる	普通	全く分からない	よく使う	時々使う	あまり使わない
背靠大树	31	21	3	2	23	30
金枝玉叶	35	19	1	3	21	31
煮豆燃萁	22	25	8	1	9	45
不辨菽麦	5	21	29	1	6	48
春华秋实	19	30	6	4	21	30
寸草春晖	15	33	7	3	11	41
椿萱并茂	3	12	40	1	2	52
焚芝锄蕙	1	9	45	1	1	53
桑榆暮里	3	16	36	1	5	49
松萝共倚	1	11	43	1	2	52
水性杨花	31	23	1	2	20	33
游丝飞絮	5	23	27	2	7	46
苍松翠柏	22	24	9	5	14	36
李代桃僵	21	22	12	4	15	36
浓桃艳李	10	27	18	1	9	45
草木皆兵	36	18	1	9	27	19
芒刺在背	26	26	3	4	19	32

香草美人	12	25	18	2	9	44
------	----	----	----	---	---	----

【表 4】が示すように、実際のアンケート調査をしてみたところ、確かにこれらの四字熟語の応用頻度はそれほど高くないことが分かる。時々使われている四字熟語（〈草木皆兵〉、〈背靠大树〉、〈金枝玉叶〉など）はある程度あるが、ほとんど使われていない四字熟語（〈焚芝鋤蕙〉、〈椿萱并茂〉、〈松萝共倚〉など）もかなり存在し、ほぼ半数以上を占めている。使用頻度が低い四字熟語について、その主な原因として、使用者の当四字熟語に対する理解の程度が低いため、その使い方や使用場面がよくわからないということが考えられる。

以上、中国語四字熟語の会話談話の中での応用状況を確認してきた。

これに対し、既存の中国語植物四字熟語（【表 3】）の中で、日本語の場合でも使われているか否かを『新明解四字熟語辞典』を利用して調べてみた。46 個の植物四字熟語の中で、〈寸草春晖〉、〈椿萱并茂〉、〈闭月羞花〉、〈草木皆兵〉、〈萍水相逢〉、〈投桃报李〉などの中国語の四字熟語が日本語の四字熟語辞典にも入っていることがわかった。

【表 3】では、日本語四字熟語辞典『新明解四字熟語辞典』においても見られる四字熟語に「★」をつけて示してある。

また、日本語における植物に関する四字熟語表現をウェブ上の〈<https://www.weblio.jp/>〉を参考にして収集した。該当する用例数はそれほど多くないが、【表 5】のようになる。

【表 5】日本語四字熟語の表現例

日本語四字熟語	主要意味
金口木舌★ <small>きんこうぼくぜつ</small>	言論によって社会の人々を指導する人物。
木戸御免 <small>きどごめん</small>	相撲や芝居などの興行場に、木戸銭なしで自由に出入りできること（人）。
槁木死灰★ <small>こうぼくしかい</small>	肉体は枯れた木のようにであり、心は冷たい灰のようであること。（人の）心身に生氣・活力・意欲などのないことのとえ。
羞花闭月★ <small>しゅうかへいげつ</small>	容姿のすぐれて美しい女性のたとえ。中国語では、〈闭月羞花〉の言い方がある。
飛花落葉 <small>ひかりくよう</small>	人生のはかなさや世の無常であることのとえ。

日本語における植物に関する四字熟語表現は、以上であった。この 5 つの四字熟語を『日

本語日常会話コーパス』(chunagon.ninjal.ac.jp)を利用して検索してみたところ、関連する会話談話例はなかった。なお、【表 5】で「★」の付けた植物四字熟語は中国語においても見られることを指している。つまり、日中両国における植物四字熟語は、それぞれ独自のものと互いに共通しているものが存在している。

4.6 本章のまとめ

本章は人間(または人間の営み)を表わす植物に関する四字熟語に注目し、それらの会話談話での実際の応用状況を確認することが目的であった。中国語では、植物に関する四字熟語は概念メタファー《人間は植物》の表現例として成り立つことが可能であるが、会話談話のコンテキストによって、ほとんど使われない場合も少なくない。また、四字熟語ごとの応用頻度がそれぞれである。さらに、日中の植物四字熟語を比較してみた。それぞれ独自のものと互いに共通しているものが両国間に存在していることが分かる。

第4章用例一覧

4.3.3 における語彙表現例

- <杏林> 「医学分野のことを指す」
- <梨園> 「演劇、芸術分野のことを指す」
- <杏坛> 「教育分野のことを指す」
- <需要多少米> 「お米がいくら必要か」
- <校花> 「学校で最もきれいな女子学生のこと」
- <班草>/<校草> 「クラスで或は学校で最もかっこいい男子学生の喩え」
- <桃花> 「桃の花のような美しい人」
- <小辣椒> 「大胆で、気迫のある人」
- <开心果> 「いつも他人を喜ばせる人」
- <墙头草> 「二股膏藥」
- <花容月貌> 「美しい顔の喩え」
- <艳若桃李> 「美しい顔の喩え」
- <樱桃小口> 「美しい唇の喩え」
- <杨柳细腰> 「いいスタイルの喩え」
- <桃花眼> 「きれいな目の喩え」
- <萝卜腿> 「太い足の喩え」
- <豆蔻少女> 「10代の少女のことを指す」
- <花信年华> 「20代の女性のことを指す」
- <朝饮木兰之圣露兮、兮餐秋菊之落英> 「人々の節操を固く守ることを指す」
- <芝兰生于深林、不以无人而不芳> (同上の句)
- <花痴> 「男性に惚れている女性のことを指すのがほとんどである。この場合、惚れられる対象は男性と言っても「花」のように美しいと見られる。」
- <奇葩> 「変わった人」
- <草根> 「地位がとても低く、権力のない人」
- <独苗> 「一人っ子、しかも男の子を指す場合が多い」

<攀高枝>「金持ちや権力者の後ろに追いつく人」

<朽木>「精神の腐った人間」

<谢了>「人々のがっかりした気分またはやる気のない状態を指す」

<摆烂>「人間の怠ける状態」

4.5.3 における中国語四字熟語表現例

中国語四字熟語	主要意味訳
背靠大树	有権者に頼ること
残花败柳	年を取って元気のない人、女性を指すことが多い
花季雨季	16、17歳の少年少女
黄花闺女	青春で若い女の子
金枝玉叶	身分が高い人
开枝散叶	家族繁栄のために、子供を多く生むこと
落叶归根	年を取って、実家に戻ることに
木头桩子	反応が遅い人
三寸金莲	布に絞られて、小さくされた足
艳若桃李	外観が美しいこと
玉树临风	カッコ良い男性のこと
枝繁叶茂	家族の人数が多いこと
指桑骂槐	甲を叱るつもりなのに、わざと乙を叱る
煮豆燃箕	男兄弟互いに殺し合ってしまうこと
树大招风	あまりにも目立つ人は恨みを招く
不辨菽麦	人間の愚かさ
春华秋实	品行方正で自律できる人或は人の努力の結晶
寸草春晖	親に恩返ししようとしても僅かなことしかできない
椿萱并茂	両親が健康に生活していること
豆蔻年华	13、14歳の少女
焚芝锄蕙	有能な人が禍にあうこと
红豆相思	男女が慕いあうこと

红杏出墙	女性の不倫のことを指す場合が多い
青枝绿叶	元気満々で若い人
青出于蓝	生徒（後輩）が先生（先輩）より優れること
桑榆暮里	人間の年を取ったこと
松萝共倚	夫婦間仲がいいこと
水性杨花	女性の軽はずみのこと
揠苗助长	むりやり子供を成長させること
游丝飞絮	自分の考えや思考を持たない人
苍松翠柏	品格ある人
李代桃僵	他人の罪を着ること
闭月羞花	女性の美しい容貌
出水芙蓉	美しい女性のこと
含苞待放	未成年の少女のこと
花枝招展	女性の派手な身振り
空谷幽兰	品格が備わること
梨花带雨	女性の可愛さや美しさ
浓桃艳李	容貌がよく、元気のある人
草木皆兵	人があれこれを疑うこと
芒刺在背	人の恐ろしい状態
萍水相逢	人々の偶然の出会い
香草美人	品格が備わる人
藕断丝连	男女間の絶えない感情や連絡
青梅竹马	幼なじみ
投桃报李	友人間の付き合い

4.5.3 における植物四字熟語の会話談話例

●男性を表す会話談話例

〈没事、没事、你高、就是八十也玉树临风。〉 「日本語訳：平気、平気、君は背が高いから、80歳になってもカッコいいよ」である。

●「女性の年齢」に関する会話談話例

- 〈哪个黄花闺女被你骗上了。〉「日本語訳:知らない若い女の子が君に騙された。」
- 〈豆蔻年华、又老了一岁。〉「日本語訳:13、14歳の少女、また年が1つ上がった。」
- 〈16岁便是那含苞待放的玉兰、有那么多期待〉「日本語訳:16歳、白木連の蕾だ、期待される。」

●「女性に対するプラス評価」に関する会話談話例

- 〈那是女人的三寸金莲啊。〉「日本語訳:それは女の小さな足だ。」
- 〈艳若桃李、冷若冰霜、嗯嗯、就像我。〉「日本語訳:美しいが、冷たい、そう、私はそうである。」
- 〈绝世容颜~、沉鱼落雁、闭月羞花。〉「日本語訳:めったにない美しい容貌だ。」
- 〈宝贝长这么大了呀、越来越出水芙蓉啦。〉「日本語訳:こんなに大きくなったか、ますますきれいになるね。」
- 〈梨花带雨、她真的太好看了。〉「日本語訳:彼女は本当にきれいだ。」

●「女性に対するマイナス評価」に関する会話談話例

- 〈满脸风尘、残花败柳、腹黑的女人。〉「日本語訳:全く元気がなく腹黒い女だ。」
- 〈你不要趁我不在就各种红杏出墙。〉「日本語訳:私のいない間に不倫なんかしないで。」
- 〈打扮的花枝招展。〉「訳:あまりに派手すぎた身なりだ。」

●「男女の年齢」に関する会話談話例

- 〈惋惜、花季雨季の年齢、那么美丽、可惜。〉「日本語訳:残念、16、17歳であんなにきれいなのに、残念。」
- 〈青枝绿叶的青春、总有一天逝去。〉「日本語訳:青春はいつの間にか消えてゆく。」
- 〈因为我和他青梅竹马。〉「日本語訳:彼と幼なじみだ。」

●「男女に対するプラス評価」に関する会話談話例

- 〈你家还真多小孩、必须必须枝繁叶茂。〉「日本語訳:お子さんが多いね。絶対に繁盛になれる。」

〈师妹更加厉害、青出于蓝。〉 「日本語訳:後輩が先輩よりもっと強い。」

〈可惜我是一朵真实的空谷幽兰。〉 「日本語訳:残念ながら、私は本当に品格がよい人だ。」

●「男女に対するマイナス評価」に関する会話談話例

〈哎呀、木头桩子、生日快乐、早生贵子。〉 「日本語訳:あっ、大木、誕生日おめでとう、早く子供を生め。」

●人間の営みを表す会話談話例

〈上海是个让人待了就想落叶归根的地方。〉 「日本語訳:上海は人に実家に戻りたい気持ちを与える都市だ」

〈树大招风〉 〈树大招风、我们其实是活该啦。〉 「日本語訳:あまりにも目立つ人は恨みを招く、これは私たちの自業自得だ」

〈揠苗助长〉 〈走路都没学会就想要飞? 揠苗助长…〉 「日本語訳:歩くのもまだできないのに、飛ぶまで考えてるの、むりやり成長させるのだ」などがあげられる。

4.5.3 における日本語四字熟語表現例

日本語四字熟語	主要意味
きんこうぼくぜつ 金口木舌	言論によって社会の人々を指導する人物。
きど ごめん 木戸御免	相撲や芝居などの興行場に、木戸銭なしで自由に入出りできること（人）。
こうぼくしかい 槁木死灰	肉体は枯れた木のように、心は冷たい灰のようであること。（人の）心身に生氣・活力・意欲などのないことのとえ。
しゅうか へいげつ 羞花閉月	容姿のすぐれて美しい女性のたとえ。中国語では、〈閉月羞花〉の言い方がある。
ひか らくよう 飛花落葉	人生のはかなさや世の無常であることのとえ。

第5章 ことわざに見られる比喩の日中対照研究

—植物の生長に関わることわざを考察対象として—

5.1 はじめに

本章は、植物の生長段階に関することわざを考察対象とし、それらに比喩がどのように存在しているかを明らかにした上で、中国語のことわざとの対照研究を行う。ことわざと比喩の関係を論じる上で最も重要な先行研究である武田(1992:143)では、「比喩と言えは隠喩をまっさきに思い浮かべるほど、隠喩は比喩らしい比喩であるが、ことわざにかぎって言えば、この比喩形式をもつものは多くない。」と論じている。しかしながら、隠喩は植物の生長段階に関することわざには様々な形式で見られる。日本語と中国語の両方でどのような形式の隠喩がこのタイプのことわざに表れるかを論じることが本章の主眼となる¹¹。

以下、5.2 節では、ことわざの定義を確認した上で、日本語における植物の生長段階に関することわざの例を挙げる。5.3 節では、5.2 節でとりあげた日本語の例に対する比喩の考察を行う。5.4 節では、対照的な観点から、中国語における植物の生長段階に関することわざの比喩について論じる。まとめとして5.5 を付す。

¹¹ 日中両国において「隣の花は赤い」(别人的花红)のような同じ表現、又は「炒り豆と小娘」(路边红杏人自摘)のような全く異なる表現も存在している。本章は植物の生長段階に関することわざにとどまるが、日中両語におけることわざの全体対照研究の予備的な考察になるものである。

5.2 植物の生長段階に関することわざ

植物は擬人化されやすく、自ら変化して生長する点で生物として共通性を有しているという提言が鍋島（2011：160）によってなされている。植物の生長に関わる「最初から最後に至る」までの過程を想像してみよう。一般的な植物の生長と言えば、基本的に「種」（特に種蒔き）から始まり、そして「根」、「芽（芽生え）」、「花（開花、花咲く）」¹²、「実（結実、実る）」などを経て、「葉（落葉）」で終わるのが普通である。本節では、このような植物の生長段階に関わる過程に従い、ことわざの用例を提示する。

5.2.1 ことわざの定義づけ

本章の考察対象であることわざに関する定義の仕方が必ずしも研究文献の間で一致していない。ことわざに対して、改めて定義づけをする必要があると考える。

石田（2015：10）において、ことわざ・格言は二つ以上の単語からなっている点、そしてこれらの単語の結びつきが比較的固い点が慣用句に似通っていると言及されている。一方、慣用句とことわざ・格言の異なるところ及び両者の区別についても述べられている。

まず、石田（2015：10）では、「灯台下暗し」、「能ある鷹は爪を隠す」ということわざの例を通して、ことわざは、日本の社会・文化的な知恵や価値観を示す機能と相手にこの知恵や価値観を伝えたり、忠告したりする機能を持つと指摘されている。これに対し、慣用句は、「足を引っ張る」、「口が軽い」などこのような機能を持つものではなく、何らかの動作や状態、また属性や性質を表していることが多いと述べられている。

また、句の構造の面、文法の面からも慣用句とことわざ・格言の区別について説明されている。具体的には、慣用句は（文字通り）句であるのに対して、ことわざ・格言は一つ

¹² 実際のデータを収集すると、「花」に関することわざがかなり存在しているが、「花」よりも「開花」または「花咲く」の方が植物の生長状態の変化を明らかに反映しているため、「開花」、「花咲く」の表現に注目し、用例を集める。

の文に相当する場合が多い。且つ、動詞慣用句は「一タ形」で過去の動作や出来事を表すことが多いのに対して、動詞を中心とすることわざ・格言は普通「一ル形」や「命令形」で使われることが多いとまとめられている。

また、日本の国語辞典における（辞典の全体的な名称を略とする）ことわざに対する解釈を見ると、【表1】のようにまとめられる。

【表1】国語辞典におけることわざに対する解釈

辞典区分	新明解	広辞苑	広辞林	日本国語	岩波	旺文社	新潮現代
ことわざ	教訓	教訓・風刺	教訓	教訓や風刺	訓戒・風刺	教訓	教訓・風刺・真理

各国語辞典の解釈によれば、ことわざは長くない句であり、且つ、表1で示したように、ことわざはその句が伝達した教訓、風刺、真理に注目することが多いとわかる。これは、石田（2015）で述べられたことわざの持つ機能とほぼ合致する。つまり、ことわざは短い句で教訓、風刺、真理を表すと定義することが適切であると考える。

5.2.2 日本語における植物の生長段階に関することわざ

以上のようなことわざの定義に基づき、日本語における植物の生長段階に関することわざの例について、近藤浩文（1982）『植物故事ことわざ』保育社、足田輝一（1995）『植物ことわざ辞典』東京堂出版、時田昌瑞（2000）『岩波ことわざ辞典』岩波書店に基いて取り上げる。一部のデータの出典は、インターネットの『ことわざ辞典オンライン』（<https://kotowaza.jitenon.jp/>）も参考にした。なお、一つのことわざが二つ以上の生長を構成する要素（生長段階に関する言葉）を有する場合、それぞれの構成要素の比喩を分析するため、同じことわざに対して複数回を取り上げることがある。例えば、後にあげる「根がなくても花は咲く」ということわざについて、植物の生長に関わる「根」と「花

咲く」という二つの要素が存在するが、それぞれの要素を考察するため、ことわざの用例として、両方で取り上げる。

日本語における植物の生長段階に関することわざは以下のとおりである。

(1) 種（種、種まき）

- (1a) 嘘にも種が要る
- (1b) 権兵衛が種蒔きや烏がほじくる
- (1c) 蒔かぬ種は生えぬ
- (1d) 楽は苦の種苦は楽の種

(2) 根

- (2a) 舌は禍の根
- (2b) 根浅ければ則ち末短く、本傷るれば則ち枯れる¹³
- (2c) 根がなくても花は咲く
- (2d) 根を断ちて葉を枯らす

(3) 芽（芽生え）

- (3a) 焼き栗が芽を出す¹⁴

(4) 花（開花、花咲）

- (4a) 石に花咲く
- (4b) 女寡に花が咲く
- (4c) 根がなくても花は咲く

¹³ このことわざは中国起源であることが確実であるが、日本においても使われるようになったため、ここで取り上げる。同様に、例（6a）も中国起源のことわざである。

¹⁴ このことわざについて、中村文哉氏の教示による。

(5) 実（結実、実る）

(5a) 実のなる木は花から知れる

(5b) 実るほど頭が下がる稲穂かな

(6) 葉（落葉）

(6a) 一葉落ちて天下の秋を知る

以上のように、植物の生長段階に関する要素を「種（種まき）→根→芽（芽生え）→花（開花、花咲く）→実（結実、実る）→葉（落葉）」という順序に従い、それぞれのことわざを合計 15 例取りあげた。これらの中に、例 (2a) 「舌は禍の根」は実質的に、武田 (1992) で述べられた「口は禍の門」と同じ類のことわざである¹⁵。本章では、「口は禍の門」と「舌は禍の根」をはじめ、これまでの先行研究を踏まえながら、植物の生長段階におけることわざの比喻を考察していく。

5.3 日本語におけることわざの比喻

まず、比喻（本章では、主に直喩、隱喩、換喩、提喩を指す）は重要なキーワードの一つであるので、その定義を確認しておく。初山 (1997)、森 (2012) を参考にし、本章における直喩、隱喩、換喩、提喩を以下のように定義する。

直喩：喩えるものと喩えられるものとの間に何らかの類似性が見られ、且つ、比喻であることを示す標識「ようだ」、「みたいだ」、「あたかも」、「まるで」等が表現のなかにあるものである。

隱喩：二つの事物・概念の間に何らかの類似性が見られ、一方の事物・概念を表す形式を用い、他方の事物・概念を表すという比喻。これは「a は b だ」という形をとる場合と喩えるもののみが文中に現れ、喩えられるものは隠されている場合がある。

換喩：二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上

¹⁵ 森 (2012) の「豆腐にかすがい」、「糠に釘」、「暖簾に腕押し」のような同じ内容を違った表現で表している「類をなすことわざ」を参考にした。

の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

提喩：より一般的な意味「類＝上位カテゴリー」を持つ形式を用いて、より特殊な意味「種＝下位カテゴリー」を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。

5.3.1 表現形式から見ることわざの比喩

「口は禍の門」について、武田（1992：166）では、明示比喩であると示されていた。しかし、具体的に明示比喩とはどういう面で考えられているか、あるいは、どのように定義されているかを示されていない。武田（1992：167）は明示比喩に対し、たとえられるものが明示されていない表現を暗示比喩と名付けられ、その比喩形式としては、隠喩・提喩・換喩が考えられると提言されている。仮に、明示比喩（明喩）を直喩として捉えられても、「口は禍の門」という表現の中「ようだ」、「みたいだ」のような直喩である示す標識が見当たらない。

隠喩の形式面に関するより詳細な研究である山梨（1988）では、次のように述べられている。

一般に、たとえとしての類似性や関連性を示す表現が背後におかれた言葉のあやが隠喩とされている。しかし、この種の隠喩は、一般に予想される以上にいろいろなかたちで表される。たとえば、[A is B] の形式の連辞的な隠喩は、その典型例の一つにすぎない。

山梨（1988：15）

その上で、山梨（1988）は隠喩の形式のフレームを5種類に分けている。

それぞれ、①連辞的隠喩（例：男はオオカミである）、②主辞的隠喩（例：狼が襲いかかってきた）、③述辞的隠喩（例：彼は夢を食べて生きている）、④統合的隠喩（例：ふと良心の鏡が曇る）、⑤文脈的隠喩である。

山梨（1988：15-19）

ここでは、焦点を①連辞的隠喩に当てたいと考える。連辞的隠喩というのは、[A is B]の形をした、つまり、A はBである（例えば、君の瞳は宝石だ）といったたぐいの表現である。言うまでもなく、この種の隠喩は、表現の形が目され、隠喩の定義の一部である「a はbだ」という形をとる場合である。これにより、「口は禍の門」及び「舌は禍の根」ということわざをそれらの表現の形から判断すれば、山梨（1988）で述べられたような連辞的隠喩を用いるといえよう。また、本章で取り上げた例の中、例（1d）「楽は苦の種 苦は楽の種」も連辞的隠喩であろう。

連辞的隠喩はことわざの表面から比喩を判断すること、言い換えれば、ことわざの形式から比喩であることが分かるものである。「直喩」もこのタイプに近い。直喩の場合は、示す標識（みたいだ、まるでなど）がはっきりと表現の中に現れている。本章では、連辞的隠喩と直喩をあわせ、ことわざの比喩について、その表現の形式から一見で分かるものを「表現形式による比喩」と呼ぶことにする。本章において、直喩を用いることわざをも考察対象の一部にするが、取り上げた用例の中に該当する直喩表現が見当たらない。表現の形式からことわざの比喩性を判断することに対し、ことわざの中に隠されている比喩をどのように分析すればよいかを次節から見てみよう。

5.3.2 構成要素から見ることわざの比喩

5.3.1 では、表現の形式から見て明らかに比喩性を有することわざを「表現形式による比喩」と規定し、その中に典型的な隠喩と直喩が含まれると考えた。一方、ことわざの比喩を分析する際、異なるフレームが存在することがある。ここでは、山梨（1988）で提言されている隠喩のフレームを続けてみていく。フレームの分類の中、主辞的隠喩、述辞的隠喩、統合的隠喩に対するそれぞれの解釈がある。まず、主辞的隠喩について、「狼が襲いかかってきた」という例が取り上げられている。

この表現は、文字通りの表現としても使える。しかし、状況によっては、このタイプの表現は、ある存在の行動ないし行為の“様態”を、主語の部分示されている動物の属性に託して叙述している修辭的な表現として理解することも可能である。たとえば、目つきのきつい危険を感じさせる男が突然襲いかかってきた状況を考えた場合、その状況を「狼が襲いかかってきた」のように言い表すことも可能である。

逆に述語の部分に比喩的な修辭性があるものについて、山梨 (1988) では「彼は夢を食べて生きている」という例があり、この場合には、述部が慣用句として、空しい実質のない生活を比喩的に叙述していると述べられていた。もう一つのフレームは、統合的隱喩ということであり、これは主部と述部の両方に同時にみとめられる複合的な比喩表現も考えられると記述されていた。具体例として、森鷗外の「太郎兵衛は…現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇って、其金を受け取ってしまった」が示されている。

以上の隱喩的な表現の三つのフレームには共通点が見られる。以上の用例のいずれも表現の一部に焦点を当てており、表現全体を通して比喩を表しているわけではない。

中村 (1991) では、同じような状況を分析し、言葉の表現を構成している要素について、以下のように述べられている。

統合的比喩は、表現を構成している要素間の結合、あるいは、成分の呼応に、世間の慣用からの著しいずれが見られ、それによって生ずる意外性や非論理性が、その表現の比喩らしさとして受容主体に汲みとられる、という共通点が認められる。

中村 (1991 : 277)

これらの考え方をふまえると、ことわざを構成する様々な要素の間にも比喩が見られるということが想像できる。例えば、例 (1a) 「嘘にも種が要る」の「種」は「材料」の喩えであり、また、例 (5a) 「実のなる木は花から知れる」について、「実のなる木」は「大成する人」の喩えと見られる。このような「構成要素」からことわざの比喩を見ることは隱喩のみならず、他の比喩法を用いる場合もあると推測できよう。たとえば、例 (2a) の「舌は禍の根」ということわざは、「舌」という要素が「しゃべること」を喩え、これは明らかに人間の器官とその器官の機能の隣接関係に基づく換喩であろう¹⁶。

¹⁶ 武田 (1992) では、「口は禍の門」に対し、「口」によって「ことば」を表すという道具と機能との関係であると説明されている。

5.3.3 全体表示と文脈から見ることわざの比喻

実際に、ことわざの比喻を分析するフレームとして、前述のフレームにとどまらず、ことわざ全体の比喻についても考慮しなければならないと思われる。

山梨（1988）では、隠喩の五つ目のフレームとして、文脈的隠喩というものがあった。この場合、言語的な前後の文脈やその表現が発せられる言語外的な文脈が問題になると記述されていた。また、中村（1991）によれば、文脈比喻、その表現形式が基本的にあらわすはずの言語的な意味と、それがその場であらわすことが文脈的に期待される臨時的個別的な意味との対応に本質的な逸脱がある、という共通の性格が見られると述べられた。

これに対し、ことわざを文脈に置かれてその場の内容を喩える機能を有することはもちろんだが、ことわざは定型句という特殊な存在で、特に文脈に置かなくても、個体として我々の目の前に現れるときもその喩える機能が考えられる。ただ、ことわざが個体として使われても文脈に置かれてもいずれもことわざの全体表示に注目するのである。たとえば、「火中の栗を拾う」ということわざについて、その比喻性を判断する際に、まず、表現形式から比喻が見当たらないし、また、ことわざの構成要素「栗」などからもその比喻を把握できない。この場合は、「火中の栗を拾う」の全体表示と文脈を見なければならない。このようなことわざの全体表示の意味合いから比喻を判断する場合、ことわざの「全体表示と文脈から見る比喻」と呼ぶことにする。つまり、ことわざ自体を一括りとして、そのことわざの比喻的な機能を扱うのである。本節以下、「全体表示と文脈から見る比喻」というフレームを用いることわざを確認してみよう。

まず、隠喩を見てみれば、例（2c）／（4c）の「根がなくても花は咲く」を挙げる。これは「まったく事実無根のことでも噂が立つことがある」という意味解釈になり、根拠のないことの発生が植物に喩えられている隠喩である。また、例（5a）の「実のなる木は花から知れる」ということわざは、「大成する人は幼少時からわかる」という植物の認知領域から人間の認知領域への転移が生じ、つまり、人間が植物に喩えられている隠喩と考えられる。なお、例（2d）、例（4a）、例（5b）についても上述の例と同じ役割を有するこ

とわざである。

なお、本章で取り上げたことわざの中、「全体表示と文脈から見る比喩」というフレームで見ると、提喩と見られることわざもいくつか見られる。提喩は先ほど述べたように、類で種を表す、又は種で類を表す比喩である。

たとえば、例(1a)の「嘘にも種が要る」について、「嘘つき」という具体的なことより「何事にも準備が必要」への拡張と考えられ、つまり、「種」と「類」の関係が見なされる提喩的表現である。また、例(3a)の「焼き栗が芽を出す」ということわざは、具体的な「焼き栗が芽を出せないこと」を用い、世間の不可能な物事を表している。これも下位カテゴリー(種)を通して上位カテゴリー(類)を表す提喩的表現であろう。これらと同じ提喩的発想を持つことわざは例(1b)、(1c)も考えられる。

ここまで、ことわざの「全体表示と文脈」というフレームで隠喩または提喩を用いることわざの例を見てきたが、実際に考察を行うにあたっては、隠喩と提喩のどちらに関わっているかについての判断に迷う場合もある。

森(2011)では、隠喩と提喩の境界事例について述べられている。その中の一部を要約すると「慣用句、ことわざは慣用的意味に定着するプロセスにおいて隠喩と提喩のどちらに関わるのか紛れる現象がある。ことわざの中でも、どのように意味記述をするかによってどちらが適用出るのが揺れる例が存在する。」となる。

ことわざに関する分析について、森(2011)では、「舟に刻みて剣を求む」という用例が取り上げられている。

典型的に使用される「人間が昔からのしきたりを愚かにも守って時代の流れについていけない」という状況で記述すれば、川の流れと時の推移との間のマッピングも含め、隠喩となるが、〈一つの考えにとらわれて多様な条件を考慮しないこと〉と述べれば、元の状況を含みこむこともでき、上位カテゴリーと下位カテゴリーの間の転義、則ち提喩ととらえることもできるのである。

森(2011:145)

つまり、森(2011)に述べられているように、上述のことわざは意味の記述の仕方、あるいは、捉え方によって、隠喩とも提喩とも考えることができ、両者の境界事例となっていると言えるのである。

これに従うと、植物の生長段階に関することわざにおいても隠喩と提喩の境界に置かれている例が見られる。例(2b)の「根浅ければ則ち末短く、本傷るれば則ち枯れる」の一つの解釈として、「根が十分張っていないければ枝葉も生長しない、幹がいためば枝も枯れる」という樹木の生長を人間界にマッピングした隠喩表現である一方、「基礎がしっかりしていない物事は発展せず、いずれ衰える」というような森羅万象を表している表現でもあると考えることができる。この場合は、提喩と考えられる。

まとめに、異なるフレームに見られる日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩の分析を【表2】で示す。(比喩が見当たらない場合、「×」で表示する)

【表2】異なるフレームに見られる日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩

ことわざの番号	ことわざの表現形式	ことわざの構成要素	ことわざの全体表示と文脈
(1a)	×	隠喩	提喩
(1b)	×	×	提喩
(1c)	×	隠喩	提喩
(1d)	隠喩	隠喩	×
(2a)	隠喩	換喩	×
(2b)	×	隠喩	隠喩/提喩
(2c)	×	隠喩	隠喩
(2d)	×	隠喩	隠喩
(3a)	×	×	提喩
(4a)	×	×	隠喩
(4b)	×	隠喩	×
(4c)	×	×	同例(2c)
(5a)	×	隠喩	隠喩
(5b)	×	隠喩	隠喩
(6a)	×	隠喩	×

以上、日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩を【表2】のようにまとめた。まず、「表現形式から見ることわざの比喩」の場合、本章において示したことわざ例の中では僅か2例が考えられる。それらは「aはbだ」の形で表している典型的な隠喩

とも言える。また、「ことわざを構成する要素」の中、比喩を用いるのは11例が考えられ、それぞれは隠喩または換喩を用いることが分かった。さらに、ことわざを一括りにし、「全体表示と文脈」のフレームによれば、ことわざを用いる比喩は隠喩5例¹⁷、提喩4例、さらに隠喩と提喩の境界に属するのは1例に分けられる。

5.4 中国語におけることわざの比喩

比較として、中国語の例をも取り上げる。中国における植物の生長段階の特徴は日本と同じ認識を持つことが想像できる。なお、日本語での植物の生長過程を表す「種(種蒔き)」、「根」、「芽(芽生え)」、「花(開花、花咲く)」、「実(結実、実る)」、「葉(落葉)」に対し、中国語では、〈种子, 播种〉、〈根〉、〈芽, 发芽〉、〈开花〉、〈结果〉、〈叶, 落叶〉という表現になる。また、用例の収集については、宗豪(2002)《谚语新编》广西民族出版社; 孟守介[他](1990)《汉语谚语词典》北京大学出版社に対象を絞って取り上げた。一部のデータの出典は、インターネット〈<http://t.shznw.net/yanyu>〉も参考した。括弧内は日本語の直訳である。

(7) 种, 播种 (種、種蒔き)

(7a) 种是金, 土是银, 错过季节无处寻

(種は金であり、土は銀であり、季節が過ぎると探しても探せない)

(8) 根 (根)

(8a) 根子不正秧必歪

(根が真っすぐでなければ、秧も必ず歪む)

(8b) 树高千丈, 落叶归根

(樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる)

(8c) 斩草要除根

(草を薙るのに根まで伐る)

¹⁷ 例(2c)と例(4c)は同じことわざであるため、ことわざの「全体表示と文脈」で捉えられる場合、一つのことわざにする。同じく、中国語の例についても同じ扱いとする。

(9) 芽, 发芽 (芽、芽生え)

(9a) 柳树发芽暖洋洋, 冬天不会有几长

(柳の芽が生えると、冬はそろそろ終わる)

(10) 开花 (開花)

(10a) 花有重开日, 人无再少年

(花は再開できるが、人間は少年時代に戻れない)

(11) 结果 (結実)

(11a) 枯树不结果, 谎言不值钱

(枯木に実はならない、嘘は価値にならない)

(12) 叶, 落叶 (葉、落葉)

(12a) 树高千丈, 落叶归根

(樹木は千丈まで伸びても落ちた葉が根本に集まる)

(12b) 离开群众的人, 就像落地的树叶

(群衆から離れた人はまるで枯れ落ち葉のようになる)

中国ではことわざの数は数え切れないほど存在しているが、植物の生長段階に関することわざの用例は比較的少ない。かつ、中国語母語話者の感覚では、そういうことわざの使用頻度がそれほど高くない感じられる。本章では、重なる例を含め、9例(実質的には8例である)挙げた。中国語の例に対しても先述した三つのフレームで分析してみよう。

5.4.1 表現形式から見ることわざの比喻

まず、「表現形式から見ることわざの比喻」について、2例が考えられる。それぞれ例(7a)〈种是金, 土是银, 错过季节无处寻〉と例(12b)〈离开群众的人, 就像落地的树叶〉である。(7a)〈种是金, 土是银, 错过季节无处寻〉(種は金であり、土は銀であり、季節が過ぎると探しても探せない)の形としては日本語の用例と似ている。つまり、〈种是金, 土是银〉は典型的な隱喩型(「aはbだ」、「a is b」)のことわざだと考えられる。例(12b)を「ことわざの表現形式」から見れば、直喩を用いることわざと見られる。例(12b)

〈离开群众的人，就像落地的树叶〉の日本語訳は「群衆から離れた人はまるで枯れ落ち葉のようになる」となり、これは直喩である標識「まるで」が表現の中に現れてくるのである。このようなことわざの表現形式から見る直喩型のことわざは日本語の用例の中に見当たらない。

5.4.2 構成要素から見ることわざの比喩

また、「構成要素から見ることわざの比喩」について、日本語の場合、隠喩と換喩を用いることわざが存在していると分析した。本章において示した中国語の例については、隠喩型のことわざのみが見られる。具体例としては、例(8a)〈根子不正秧必歪〉(根が真っすぐでなければ、秧も必ず歪む)が挙げられ、この〈根〉は「基礎、もと」の意味を指す。また、例(8b)〈树高千丈，落叶归根〉(樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる)という例については、〈根〉「根」と〈落叶〉「落葉」と両方が現れるため、本章において用例として2回取り上げられた。このことわざの構成要素としての「樹木」、「落ち葉」、「根」はそれぞれ「人(特に若い人)」、「年を取った人」、「故郷、地元」を喩えている隠喩的表現と考えられる。

5.4.3 全体表示と文脈から見ることわざの比喩

ことわざを「全体表示と文脈」から見た場合、中国語の例として次のようなものは比喩とは考えられない。例(9a)〈柳树发芽暖洋洋，冬天不会有几长〉(柳の芽が生えると、冬はそろそろ終わる)、例(10a)〈花有重开日，人无再少年〉(花は再開できるが、人間は少年時代に戻れない)と例(11a)〈枯树不结果，谎言不值钱〉(枯木に実はならない、嘘は価値にならない)である。これらのことわざはいずれも対句形式であり、ことわざを個体として分析した場合、表現の前後は説明文のような形式になり、特に比喩を有することは考えられない。なお、例(7a)〈种是金，土是银，错过季节无处寻〉(種は金であり、土は銀であり、季節が過ぎると探しても探せない)ということわざの前半は対句形式となり、後半は説明文の形であるが、これも特に「全体表示と文脈」から見た場合比喩が見当たらない。

これに対し、「全体表示と文脈」から見た場合、例(8b)／(12a)〈树高千丈，落叶归

根) (樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる) は対句形式であるが、比喩となる。このことわざは「人間 (特に若い人) はいくら業績を作っても年を取ると、地元に戻って余生を過ごす」という意味を指す。これは植物を用いた、人間界を喩える隠喩と考えられる。ほかに、「全体表示と文脈」から隠喩と見られるのは、例 (8c) 〈斬草要除根〉 (草を筆るのに根まで伐る) と例 (12b) 〈离开群众的人, 就像落地的树叶〉 (群衆から離れた人はまるで枯れ落ち葉のようになる) である。例 (8c) は、植物の表現を通して禍のことを喩えている。これは日本語の例の例 (2d) と似ている。さらに、例 (12b) は、群衆から離れた人の特徴が植物である落ち葉によって表現されている。

中国語の例の中にも隠喩と提喩の境界に置かれる例が見られる。そのようなものとして例 (8a) 〈根子不正秧必歪〉 (根が真っすぐでなければ、秧も必ず歪む) と例 (8b) / (12a) 〈树高千丈, 落叶归根〉 (樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる) が考えられる。これらの2例を隠喩で考えれば、いずれも植物の表現を通して人間 (の営み) を喩えていることわざである。一方、これらのことわざは提喩表現と見られることもできる。例 (8a) と例 (8b) / (12a) は具体的な植物を用い、それぞれ「物事の本質・基礎をしっかりとしないといけない」及び「世間の物事は追及的に本質にもどる」という下位カテゴリーから上位カテゴリーへの転移と考えることができる。

前節と同じように、異なるフレームに見られる中国語における植物の生長段階に関することわざの比喩の分析を【表 3】として示す。(比喩が見当たらない場合、「×」で表示する)

【表 3】異なるフレームに見られる中国語における植物の生長段階に関することわざの比喩

ことわざの番号	ことわざの表現形式	ことわざの構成要素	ことわざの全体表示と文脈
(7a)	隠喩	×	×
(8a)	×	隠喩	隠喩/提喩
(8b)	×	隠喩	隠喩/提喩
(8c)	×	隠喩	隠喩
(9a)	×	×	×
(10a)	×	×	×
(11a)	×	×	×

(12a)	×	隠喩	同例 (8b)
(12b)	直喩	隠喩	隠喩

5.5 本章のまとめ

本章では、武田(1992)の論述を巡って、これまでの先行研究に基づき(特に山梨(1988))、植物の生長段階に関することわざに対する比喩の分析を三つのフレームの観点から扱った。つまり、「ことわざの表現形式」、「ことわざの構成要素」、「ことわざの全体表示と文脈」を通してことわざの比喩を考えてきた。武田(1992)では、隠喩を持つことわざは多くないと指摘されたが、ここまでの分析でわかるように、この論述は妥当性が欠けている。本章においてことわざの比喩を判断するのにいずれのフレームでも隠喩型のことわざの割合は低くないことが分かった。言い換えれば、隠喩型のことわざは比較的によく存在しているということである。

このようなフレームに従い、中国語における植物の生長段階に関することわざの例についても取り上げてみた。「ことわざの表現形式」から見る場合、日本語では典型的な隠喩を用いることわざが存在するのに対して、中国語の場合、典型的な隠喩のみならず、直喩型のことわざも見られる。また、「ことわざの構成要素」から見る場合、日本語では、換喩と隠喩を用いることわざが見られる一方、中国語では、隠喩を有することわざしか見られない。さらに、「ことわざの全体表示と文脈」のフレームでことわざの比喩を捉えると、中国語の用例の中には、対句形式のようなことわざが存在し、その類のことわざにおいては、部分的には比喩表現が見られるが、全体表示においては比喩表現であるとは言えない。

最後になるが、本章においても植物の生長段階に関する要素の比喩的な機能を見てみよう。日本語の例によれば、「種」は「準備」や「苦勞」、「成果」や「収穫」、及び物事の「原因」を表せる。また、「根」は「根本」、「もと」、「根源」という表現に使われる。これらの共通的な特徴としては、「根」が地面に一番接近しているように、こういう安定さがほかの物事に対してもしっかりと保つことというように移転されていると考えられる。一方、「焼き栗が芽を出す」について、「あり得ないことや不可能と思われることが現実的になる」という意味になり、これは単なる「芽」だけでは、特に何を喩えているか明確ではない。これと似ているのは例(4a)の「石に花咲く」であり、比喩的效果が見られないのである。なお、「実」に関する二つの例について、人間の「成就」と「知識」

を表している。「一葉落ちて」の「落葉」は、物事の「前兆」という意味になる。

これに対し、中国語の用例の場合は、生長要素の中、まず、〈種（種子）〉は「金」にたとえられていて、〈種（種子）〉自体の生長要素としての比喩はあまり見られない。一方、〈根〉の比喩的な機能は日本語の「根」と似ている。つまり、中国語の植物の生長段階に関することわざにおいても〈根〉は日本語のように「もと」を表すことが多い。また、顕著的に比喩的な機能を有するのは「落ち葉」であり、これは「年を取った人」のたとえである。

本章は日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩を確認した上で、中国語のことわざとの対照を行った。日中両語の対照を通して、比喩上に、共通している部分とずれている部分が分かれていることが分かった。そういう相違が生じた原因はことわざを構成する各要素の意味的な解釈が異なる場合があるからである。このような意味的なずれの認知的な考察は銭（2019）では「種」と「開花」を巡って考察したが、今後、より広い分野での対照研究をする必要があると考えられる。

第5章用例一覧

5.2.2 におけることわざ

(1) 種 (種、種まき)

- (1a) 嘘にも種が要る
- (1b) 権兵衛が種蒔きや鳥がほじくる
- (1c) 蒔かぬ種は生えぬ
- (1d) 楽は苦の種苦は楽の種

(2) 根

- (2a) 舌は禍の根
- (2b) 根浅ければ則ち末短く、本傷るれば則ち枯れる
- (2c) 根がなくても花は咲く
- (2d) 根を断ちて葉を枯らす

(3) 芽 (芽生え)

- (3a) 焼き栗が芽を出す

(4) 花 (開花、花咲)

- (4a) 石に花咲く
- (4b) 女寡に花が咲く
- (4c) 根がなくても花は咲く

(5) 実 (結実、実る)

(5a) 実のなる木は花から知れる

(5b) 実るほど頭が下がる稲穂かな

(6) 葉 (落葉)

(6a) 一葉落ちて天下の秋を知る

5.4 におけることわざ

(7) 種, 播種 (種、種蒔き)

(7a) 種是金, 土是銀, 错过季节无处寻

(種は金であり、土は銀であり、季節が過ぎると探しても探せない)

(8) 根 (根)

(8a) 根子不正秧必歪

(根が真っすぐでなければ、秧も必ず歪む)

(8b) 樹高千丈, 落叶归根

(樹木は千丈まで伸びても落ち葉が根本に集まる)

(8c) 斩草要除根

(草を薙るのに根まで伐る)

(9) 芽, 发芽 (芽、芽生え)

(9a) 柳树发芽暖洋洋, 冬天不会有几长

(柳の芽が生えると、冬はそろそろ終わる)

(10) 开花 (開花)

(10a) 花有重开日, 人无再少年

(花は再開できるが、人間は少年時代に戻れない)

(11) 结果 (結実)

(11a) 枯树不结果, 谎言不值钱

(枯木に実はならない、嘘は価値にならない)

(12) 叶，落叶 (葉、落葉)

(12a) 树高千丈，落叶归根

(樹木は千丈まで伸びても落ちた葉が根本に集まる)

(12b) 离开群众的人，就像落地的树叶

(群衆から離れた人はまるで枯れ落ち葉のようになる)

第6章 概念メタファー《メンタルは植物》の「まだら」問題について

6.1 はじめに

これまでの概念メタファー研究において、「人間」あるいは「人々の営み」は様々な表現(《人生は旅》Lakoff and Johnson(1980)、《人間は植物》靱山(2006a)(2006b)、《感情は水/液体》鍋島(2003、2011)など)で捉えられている。

上述の概念メタファーはいずれも身体的経験豊富で具体的な起点領域から身体的経験があまりない抽象的な目標領域への概念領域間の体系的な写像を表している。概念メタファー理論やそれに基づく応用は我々の生活とかかわっていて、現実から切り離せないと言っても過言ではない。

また、近年、コーパスデータを用いての概念メタファー研究も増えつつある。実際に、コーパス言語学は概念メタファー理論と同様に、1980年代初頭に台頭し、現在、応用言語学や関連分野の多くの学者たちが、コーパス言語学がとる仮説と方法になじんでいる。コーパス言語学の方法は、現代のコンピューターがもつ大規模の記憶容量と高速処理能力に依存している。これによって、単純であるが無限に繰り返されるタスクを人間が行うより何千倍も速く、そして正確に実行できるのである(Deignan 2005)。

例を挙げれば、大石(2006)では、『EDR 日本語コーパス』から作成されたデータに基づいて、〈水〉のメタファーを分析された。このデータベースは、EDR 日本語共起辞書を元データとし、その中から、879種の「格助詞」-「動詞」¹⁸ペアについて、その格成分を意味カテゴリーに分類し、カテゴリーごとの対応関係を登録したものである。その結果、〈水〉の存在様態の違いに対応して、複数の異なる認知様式が存在

¹⁸ データでは、76種類の動詞が「水」をはじめとする〈液体〉カテゴリーの語群を項としてとっている。ただし、これらすべてにおいて〈水〉をモト領域としたメタファーが成り立っているというわけではないと大石に指摘されている。

し、サキ領域によって利用される様式が異なることを検証された。

後藤（2018）では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』の検査にかけ、日本語の「放出動詞」と「感情名詞」¹⁹との共起事例を手作業で抽出された。両者の共起関係をコーパス調査によって明らかにした上で、「感情は液体」という一般化から導かれないそれらの個別的な写像について述べられている。他にも、『名大会話コーパス』、『国語研日本語ウェブコーパス』など数多くの日本語のコーパスが使われている。このように使用されるコーパスの種類も多様である。

本章は、コーパスデータ的一种である『筑波ウェブコーパス』²⁰を利用し、概念メタファー「メンタルは植物」をめぐって、調査を行う。以下、6.2 節で「まだら」問題に関する概説や先行研究を述べる。6.3 節で先行研究に基づく疑問点を指摘する一方、本章の調査目的を示す。6.4 節では、調査内容とその分析結果を提示する。まとめとして6.5 節を付す。

6.2 「まだら」問題に関する先行研究

各々の概念メタファー表現を検討してみると、表現の中には容認度の高低、言い換えれば容認度の差（ギャップ）が生じることがある。

6.2.1 「理論は建物」の使われている部分と使われていない部分

認知言語学の先駆と見られる Lakoff and Johnson（1980）の書かれた *Metaphors We Live By* は、様々な言語に訳されている。うち、中国語版の一部には以下のように記載されている。

“建筑”这一概念中被用来建构“理论”这一概念的部分是其基础和外壳。而其屋

¹⁹ 「放出動詞」：噴出する、噴く、溢れる、滲むなどが取り上げられている；「感情名詞」：嫌悪、歓喜、満足、不安、希望などが取り上げられている。

²⁰ 日本語のウェブサイトから収集して構築した約 11 億語のコーパスである。

頂，内部房间，楼梯和玄关过道等没有用来建构“理论”这一概念的任何部分。因此在此隐喻“理论是建筑”中有被使用的部分（基础，外壳），也有未被使用的部分（房间，楼梯等）。

Lakoff and Johnson (1980) [何文忠 译 (2015: 54)]

(訳：〈建物〉という概念に属する「土台」や「外殻」は〈理論〉を表すのに使われている。その一方、「屋根」、「部屋内部」、「階段」、「玄関」など、〈理論〉という概念に用いられていない。つまり、概念メタファー〈理論は建物〉について、〈建物〉に関する言葉を通して〈理論〉を表す際、「土台」のような「使われている部分」と「部屋」/「階段」のような「使われない部分」と両方存在しているのである。)

概念メタファー表現に容認度の差があることは上記の論述からすでに指摘されていた。

6.2.2 「まだら」問題という名付け

鍋島 (2011:139) では、水の用語とその容認度判定を行っている。

中で、〈勇氣 があふれる/満ちる/湧く/ほとぼしる〉などの表現は容認可能なのに対し、〈*勇氣 が流れる/こぼれる/漏れる/溜まる〉などの表現は容認不可能であるとしている。同じように、鍋島 (2011:140) では〈不満 があふれる/満ちる/湧く/こぼれる/漏れる/溜まる/にじむ〉は容認可能であるが、〈*不満 がほとぼしる/滴る/流れる〉は容認不可能と見られている。〈感情は水〉があるとしても、個別の感情と動詞によって容認度が振れると述べられている。

このような、メタファー表現の生産性にばらつきが出る現象は鍋島 (2011) では「まだら」問題と呼ばれている。本章では、鍋島 (2011) に従い、メタファー表現から出てきた容認度の差を「まだら」問題という形で取り上げる。

6.2.3 「まだら」問題が生じた要因について

先に言及した後藤 (2018) では、メタファー表現のギャップ（「まだら」問題）を引き起こす要因や要因に対する解説として、主に以下のようなことを述べている。

メタファー表現のギャップを引き起こす要因は、少なくとも3種類へと区分される。第一に、概念間の対応関係の欠如である。第二に、概念間に潜在的対応関係があるものの、特定の要因が表現の成立へと制約を課すものである。第三に、同義語に課される経済的指向・慣習性によるものである。

後藤 (2018:202)

それぞれの要因について、第一は、Lakoff (1993) で提案された「不変性原理」(メタファー写像では、起点領域の認知トポロジー、すなわち、イメージスキーマ構造が目標領域の内在的構造に矛盾しない形で保持される) で、次の2点を示す。1点目、メタファー写像は体系的であり、目標領域の概念が起点領域のイメージスキーマに従って構造的に対応付けられることを意味する。2点目、目標領域は起点領域からの写像を「拒否」することである。メタファー表現のギャップは「起点領域のイメージスキーマ構造が目標領域の内在的構造に矛盾しない形で」によって説明される。

第二として、鍋島 (2011) は、「認知の諸機構と複数のメタファー基盤に基づく入力合成されることで、特定のメタファー表現が産出されると同時に、入力同士が衝突を起こすことでメタファー表現のギャップが生じる」という、「多重制約充足的メタファー観」を提唱する。この多重制約充足観は、ギャップに対する説明の一般方針として2点を要求することになる。一つは、ある特定の概念メタファーに基づくメタファー表現を収集し、それらの比較対照を十分に行うことで、メタファー表現の成立・不成立を左右する基盤を特定することである。もう一つは、複数の基盤の介入が同時に認められた際に、それらの関係性を精査し、適切な説明を与えることである。

第三として、松本 (2006) は、類義語・同義語間で生じるギャップの要因として「語義的経済性の制約」を提案している。概念間の対応関係がある時、ある語がそれに基づくメタファー的意味を実現させることができるのは、より適切な語(過剰指定がより少ない表現)がなく、かつ、同じ意味を表すものとして他の語が定着していない場合のみである。松本の「語義的経済性の制約」は、語義や慣習性といった、語レベルでのメタファー表現の分析の必要性を呈したという点が重要のようである。

後藤 (2018) 自身では、《感情は液体》日本語メタファー表現のコーパス調査を通じて、「感情名詞」と「放出動詞」の対応の「まだら」の要因特定を研究された。且

つ、次のような結論が導き出されている。

I 「放出動詞」と「感情名詞」の対応関係を決定づける中心的な動機付け・制約は、〈力〉のスキーマである。

II ギャップを引き起こす要因の特定には、関連する表現の体系的な観察や用例の前後文脈の観察が有効打となる。

6.3 問題提起、調査目的、仮説

6.3.1 問題提起

これらの先行研究を踏まえて別の分野のメタファーについて本章では考察を行う。我々は日常の中、「根強い偏見」、「根深い恨み」、「根のない観念」など、植物の部位である「根」と形容詞の複合形をメンタルに関わる名詞と組み合わせた表現もよく耳にする。概念メタファー《人間は植物》の下位カテゴリーの1つとして、《メンタル²¹は植物》が整理できる。

一方、上述の先行研究に見たような「まだら」問題が概念メタファー《メンタルは植物》に存在しているかどうかはまだ明らかではない。仮に、《メンタルは植物》に関する表現に容認度の差（ギャップ）が存在するとすれば、そのギャップの度合いの確認が必要だと考えられる。また、概念メタファー表現にギャップを引き起こす要因について、先行研究で述べられているものを除き、ほかにどのような要素が存在しているかを本章で分析してみたい。

6.3.2 調査目的

本章は先行研究に基づき、概念メタファー《メンタルは植物》の「まだら」問題への探求を中心とする。植物の部位を表す「根」と数多くの形容詞との複合形の用例を

²¹ [物質よりも]主として精神の方に関係が有る様子。新明解国語辞典（第5版）

コーパスで調べる。

「まだら」問題は概念メタファー《メンタルは植物》の中にどのように存在しているかを確認すると同時に、概念メタファー表現を構成する形容詞の本来の意味合いや性質は「まだら」問題に影響を及ぼすか否かを論じてみる。

6.3.3 仮説

なお、調査を始める前に、以下の仮説を立てる。

仮説1：概念メタファー《理論は建物》、《感情は液体》のいずれも「まだら」問題が存在しているという先行研究の検証から見れば、《メンタルは植物》も同じ現象を起こす可能性が高いと考える。つまり、「まだら」問題は概念メタファー《メンタルは植物》の中にも見られると仮説とする。

仮説2：数多くの形容詞の中で、そもそも人々の感情や性格を表す形容詞は「根」と複合され、概念メタファー《メンタルは植物》を成す場合、普通の形容詞より容認度が高いと想定される。つまり、感情や性格を表す形容詞はメンタルを表すのにもっと有利だと想定するのである。

6.4 調査

「まだら」問題を巡って、鍋島（2011）では、「水のメタファー」のみならず、「可能性のメタファー」（鍋島 2011:235）についても述べられている。詳しく言えば、形容詞7つ、名詞六つの組み合わせには、どちらの構文を利用するか（修飾用法 VS 叙述用法）によって容認可能性が異なるため、両方の判断、いわば7×6×2通りの容認可能性が鍋島の直感で検討されている。

また、後藤（2018）では、従来の概念メタファー理論では、伝統的な言語学の手法に倣い、主として作例や内省による研究が行われてきたと言及されているとともに、コーパスデータに基づくメタファー研究の増加も指摘されている。本章では、客観的な『筑波ウェブコーパス』を用いたデータ分析を行い、「まだら」問題を考察していく。基本、各表現例の容認度判定は筆者の直感によるが、必要な場合、日本語母語話者に確認してもらった場合もある。なお、本章での「根」と「形容詞」と組み合わせ

た表現の構文構造は、鍋島によって述べられた「修飾用法」、「叙述用法」のどちらかに該当することである。インターネット時代になった現在、我々はウェブコーパスを活用すれば、用例の収集と分析にとっても役に立つ。特に母語は日本語でない外国人にとって、いろいろなデータベースに注目するおかげで、日本語表現や日本語知識に対する理解を深めることができる。

6.4.1 植物の概念メタファーについて

本章の冒頭でも述べたが、概念メタファーに関する研究は様々である。なお、概念メタファーにおける人間の心の動きは気象現象に関する表現²²で表せる一方、植物を通して表現することも少なくない。人間の心の動きが中心となった研究として、森(1996)では、上代日本語における「根の下延へ」、「草木が繁っている」という植物に関する表現で人間の「心」と「思い」を表すと述べられた。また、Lakoff and Johnson (1980)《アイディアは植物/考えは植物である》、靱山(2006)《人(心・精神の状態の変化の過程)は植物である》などが取り上げられる。上述したように、《メンタルは植物》も日常の表現のなかによく現れているといえよう。

コーパス利用が盛んになったと同時に、コーパス調査で植物に関する概念メタファー研究も見られるようになってきた。代表的なのは Deignan (2005) である。Deignan (2005) では、目標領域への写像の一貫性の程度を調査するという目的で、コーパス (*Bank of English* のサブコーパス) に見られる植物領域の中心語がすべて検査されている。研究結果に基づき、四つの重要な発見を指摘している。第一に、全般的に見てコーパスデータは、植物とそのふるまいについての私たちの知識が様々な目標領域に写像され、それらは全て生長の要素を含みつつ固有の構造を持っているという仮説と一致した。植物関連語彙のメタファー用例の大部分が、用例数(トークン)と語彙の種類(意味タイプ)の観点から、この写像の具現化であると説明できた。第二に、

²² 松浦(2017)博士学位論文「現代日本語における気象現象の概念化—概念メタファー理論によるアプローチ」の第5章を参考した。

この全般的写像にはきちんと当てはまらないメタファーの例も少々見つかった。これらはこのメタファー総体の具現化と言えないことはないが、単純明瞭な具現化とは言えない。第三の主な発見として、いくつかの植物語彙のメタファーが、一つか二つの固定された構造でしか起きないことがある。第四に、Kövecses (2002)²³によって論じられた〈複雑な抽象的体系〉(Complex Abstract Systems) という目標は、いくつかの下位領域に分類できるが、その中で主要なものは、ビジネス、人間関係、思考、人々である。植物語彙の中にはこれらの中の一つと強く結びつくものがあり、理由はわからないが、他の領域においてはほとんど出現しない。

以上の Deignan (2005) の観点では、特に第二、第三によれば、コーパス調査から植物に関する概念メタファーの「まだら」問題が見られている。

6.4.2 調査方法と調査手順

本段階では、調査方法や調査手順について述べる。

本章全体は『筑波ウェブコーパス』を用いて、「根」と「形容詞」を組み合わせた全ての表現を検索し、それらの表現の文脈前後関係を一つずつ確認する。

コーパスに「根」というキーワード(調べたい語)を入力して絞り込むと、「根」は、「形容詞」以外、「動詞」、「名詞」、「形容動詞」などとの組み合わせも出てくる。本章の主眼は、形容詞本来の意味合いや性質が〈メンタルは植物〉に影響を与えるかどうかは考察目的となるため、本章での考察対象を「形容詞」及び「形容詞」の活用形(連体修飾、連用修飾など)に絞り込む。

したがって、本データベースの検索により、「根」+「形容詞」の組み合わせについては、〈根 ϕ 〉だけではなく、根の後ろに「助詞」が付いてくるパターンもある。それぞれは〈根が〜〉、〈根は〜〉、〈根も〜〉、〈根の〜〉、〈根に〜〉、〈根より〜〉となり、全部7つのパターンがあることが確認できた。つまり、本章の調査対象は「根+(助詞)」と「形容詞」の組み合わせた構文である。

²³ Kövecses (2002) は植物の根源領域からの写像が〈複雑な抽象的体系は植物である〉という概念メタファーによるとして、その目標領域を「社会的組織(会社など)、科学の分野、人々、経済・政治体制、人間関係、そして一組の思考」であるとした(2002:98)。

6.4.3 調査内容と調査結果

上述の各パターンについて、それらと「形容詞」との複合の種類数を【表 1】にまとめる。

なお、種類の数や用例を統計する際、以下の点を示しておきたいと考える。

①データベースの入力について、例えば、パターン〈根の～〉では、「根のしるい」という表現があるが、「しるい」についての意味は不明で、データベースの例文をクリックして確認したところ、「根のしるい」ではなく、「根の著しい」であった。このような場合、データを訂正した上で、調査を進める。

②構文に当てはまらない表現が混じってしまうことがある。調査データをチェックした際、「根気強い」、「根気やすい」のような構文に当てはまらない表現がデータに混じってしまう場合、調査データから削除することにする。

③「同意異形」の形容詞（例えば、「暖かい」と「温かい」）を1つの種類として数える。次の【表 1】は、「根+（助詞）」と「形容詞」と組み合わせた種類数のまとめである。

【表 1】「根+（助詞）」と「形容詞」と組み合わせた種類数

パターン	+異なる形容詞	総種類数
根が	深い、ない、浅い、多い、少ない、よい、太い、長い、大きい、弱い、明るい、強い、赤い、黒い、優しい、細い、広い、白い、荒い、短い、高い、早い、悪い、小さい、細かい、新しい、力強い、暗い、数少ない、ひどい、うまい、難しい、茶色い、苦い、粗い、甘い、奥深い、固い、ものすごい/すごい、きつい、清い、臭い、柔らかい/軟らかい、暖かい、数多い、古い、厳しい、卑しい、えらい	49 種
	深い、優しい、いい/よい/	

根は	ええ、浅い、細い、悪い、太い、弱い、少ない、小さい、短い、長い、ない、多い、新しい、高い/小高い、明るい、広い、赤い、細かい、白い、柔らかい/軟らかい、暗い、大きい、黒っぽい、逞しい、温かい/暖かい、強い、堅い、古い、奥深い、熱い、苦い、軽い、力強い、人懐っこい、人恋しい、みずみずしい	38 種
根も	多い、ない、深い、少ない、浅い、よい、大きい、強い、細い、面白い、弱い、すごい、太い、美味しい、赤黒い	15 種
根の	深い、ない、長い、太い、浅い、大きい、強い、弱い、多い、少ない、優しい、明るい、白い、細かい、赤い、美しい、荒い/粗い、よい、きつい、近い、細い、素晴らしい、短い、熱い、悪い、丸い	26 種
根に	近い、優しい、多い、深い、黒い、白い、悪い、よい、美味しい、細い、新しい、強い、小さい、厚い、遠い	15 種
根より	多い、大きい、長い、低い、深い、遠い	6 種
根φ	よい、ない、暗い、太い、深い	5 種

以上のように、2020 年の『筑波ウェブコーパス』のデータでは、「根+（助詞）」は「形容詞」との組み合わせの中で、〈根が〜〉は「形容詞」との共起種類（49 種）が最も多い。一方、〈根φ〉は「形容詞」との共起が意外に少なく、わずか5 種である。また、種類ごとにいくつかの表現を持つ。たとえば、パターン〈根φ〉では、「根よい」に関する表現は14 件あるとコーパスに載せてある。

なお、具体的な表現を見れば、全ての構文が《メンタルは植物》という概念メタファーを成すわけではない。『筑波ウェブコーパス』におけるデータを分析したところ、

《メンタルは植物》として成り立つのは、〈根が〜〉、〈根は〜〉、〈根の〜〉、〈根φ〉と形容詞「明るい」、「浅い」、「暖かい/温かい」、「熱い」、「暗い」、「ない」、「人恋しい」、「人懐っこい」、「深い」、「太い」、「優しい」、「良い/よい/ええ」、「弱い」、「悪い」との共起である。

では、ほかの「形容詞」は「根」との組み合わせで、《メンタルは植物》として成立しないだろうか。用例を見ていこう。（用例の出典はすべて2020年の『筑波ウェブコーパス』のデータであり、下線は筆者による）

- * 苺は、根が浅い品種です；
- * 意外に根が強いので鎌での採集をお勧めします；
- * 根が荒いところほど魚の隠れ場所になりますので（後略）；
- * 堤防の先端付近以外は根がキツく浅いため釣りにならない；
- * 水分過剰になると根は弱くなる；
- * ねぎの根は強く、収穫した後も根が残り、土が使いえなくなる；
- * 根はたくましくて量が多く、根張りが強い；
- * 根の荒い場所では1回で巻きかえることもある；
- * 椿やつげなど根の細かいもの（後略）；
- * あまり根が急成長しないものや根の美しいもの、丈夫なものの方がいいですね；

……

上述の用例からわかるように、表現自体は「根+（助詞）」と「形容詞」の組み合わせであっても、両者の結びつきはやはり《メンタルは植物》に欠如しているのである。

また、本章では、パターン〈根も〜〉、〈根に〜〉、〈根より〜〉は上述の「形容詞」と共起しながらも、いずれの表現も概念メタファー《メンタルは植物》にはならないと思う。具体的に、以下の用例が見られる。（用例の出典はすべて2020年の『筑波ウェブコーパス』のデータであり、下線は筆者による）

- * 葉もつけず、根もなく、明らかに異形だ；
- * それどころか、以前よりも大人から見えにくい形になったぶん、問題の根も深い；
- * 台風などの影響を受けたことがない地域に自生するので、根も浅く強風には強く

ありません；

*こうすると土の中に空気や水分の入るすき間ができ、根もよく張ります；

*真下から花を見上げる美しさも楽しみたい気持ちは分かるのですが、根も非常に弱いのです；

*指でイジイジと時間をかけて根を崩していくより、よっぽど根には優しく、時間もかかりません；

*水は与えすぎると根によくはないので、少なめの管理をします；

*ダイコンの葉は、根よりビタミンやミネラルが多く、食べてもおいしいものです；

……

同じように、以上の例は文として客観的な叙述で、違和感がないが、比喩の視点では、「メンタル」の喩えとあまり結びつけない。ただし、例「*それどころか、以前よりも大人から見えにくい形になったぶん、問題の根も深い。」は、「問題」の喩えとなり、つまり「問題は植物」という別のカテゴリーの概念メタファーである。

これまでは「メンタルは植物」として成り立たないパターンを列挙した。ここからは、概念メタファー「メンタルは植物」として成り立つ用例（一部）も取り上げる。

（用例の出典はすべて2020年の『筑波ウェブコーパス』のデータであり、下線は筆者による）

「根＋（助詞）」＋「明るい」

- (1) 仕事が安心してできる様になり、私はどちらかと言うと根が明るいのでより明るく仕事の皆と接することができる様になりました。
- (2) もともと根は明るい性格の私です。
- (3) …根の明るい、モダンな人なのです。

「根＋（助詞）」＋「浅い」

- (4) 然しこの決心は如何に根の浅いものであったか！

「根＋（助詞）」＋「暖かい/温かい」

- (5) 「イタリア人もフランス人も、根は温かくて、哀愁を愛する人たちよ」と笑った。

「根＋（助詞）」＋「熱い」

- (6) 強気で短気な性格だが根はとても熱く、正義感と仲間意識は人一倍強い。
- (7) 何かを作りたい、と思った時に人を巻き込んでいく事が出来るようなモチベーションが高く、根の熱い人が社内には多いです。

「根＋（助詞）」＋「暗い」

- (8) 私は表柄ポジティブというか 元気に楽しく振る舞っているのですが、最近自分は根が暗いような気がして…
- (9) 私もうつになる前は根は暗かったんですけど、表面的にはすごく元気で仕事以外のことにもいろいろ手を出していました。
- (10) 根暗いやつは…

「根＋（助詞）」＋「ない」

- (12) 父子が先でなければ君臣の義に根がない
- (13) …あるいは文化国家といふ根のない観念から出てきたりする。

「根＋（助詞）」＋「人恋しい」

- (14) 静かなところに一人で身を置きたい…根は人恋しいくせに、なぜだかそう思ってしまうことが多い。

「根＋（助詞）」＋「人懐っこい」

- (15) 色々いい加減で結構したたかだけど根は人懐こくて家族思い。

「根＋（助詞）」＋「深い」

- (16) …鬱屈は根が深い
- (17) ちょっとなにを考えてるのかわからなくて、でも根はそんなに深くなくて、ちょっと小意地が悪くて…
- (18) 大抵の場合、人間関係を清算する場合、根の深い感情的な原因が存在します。

「根＋（助詞）」＋「太い」

(19) …強く、根太く、生きていきます!

「根 + (助詞)」 + 「優しい」

(20) ダメな父親であっても、誰のことも傷つけることはないし、何より根がやさしいので、優梨子も最終的には大好きになる。

(21) ただ、根は優しくて意外と男前。

(22) 少女と出会い、対話する中で、根の優しさがこぼれ出てくる。

「根 + (助詞)」 + 「良い/よい/ええ/いい」

(23) 大谷さんは根が良い人なので、なかなか「嫌な人」になれなかったのだ。

(24) この2人も根はいい人だと思います。

(25) 私の夫もほんとに根の良い人間で大好きなのですが…

(26) 彼は根よく二、三カ月、毎日、その仕事をつづけていった。

「根 + (助詞)」 + 「弱い」

(27) 「俺様」で居たい人は、根が弱かったり、中身がお子様だったりするのがバレたくないから、大きく見せようと必死なんですね。

「根 + (助詞)」 + 「悪い」

(28) 根が悪い人はいない。

(29) あの人も根は悪くない。

(30) 根の悪い生徒などいません。

上述の例からわかるように、「根 + (助詞)」 + 「形容詞」の組み合わせで、人間の性格のみならず、人々の心の動き（決心、モチベーション、やる気）や脳の動き（思い、観念、考え）のようなメンタル的な面を表すことも可能である。一方、こういった「可能性」がどの程度であるか引き続き掘り下げる必要があると考えられる。

【表 1】では、「根 + (助詞)」と「形容詞」と組み合わせた種類数を羅列した。すでに述べたように、そのなかで、《メンタルは植物》として成立できる組み合わせ（種類）もあれば、成立できない組み合わせ（種類）も存在している。なお、《メン

タルは植物」として成立できる組み合わせ（種類）の中でも、「根＋（助詞）」と「形容詞」の結びつきによって、「メンタルは植物」として成り立たない具体的な表現も示さないといけない。

以下の【表 2】では、「根＋（助詞）」と「形容詞」の複合形で、概念メタファー「メンタルは植物」を成す件数（括弧なしの数字）をまとめた。括弧内の数字は各パターンにおける一般表現（「メンタルは植物」として成り立たない表現）も含めた総件数。

【表 2】 概念メタファー「メンタルは植物」が成立する表現のまとめ

根が	根は	根の	根φ	共起事例	小計
13 (15)	5 (5)	3 (4)		明るい	21 件
		1 (15)		浅い	1 件
	2 (4)			暖かい/温かい	2 件
	1 (1)	1 (1)		熱い	2 件
3 (3)	1 (3)		3 (4)	暗い	7 件
2 (108)		1 (45)		ない	3 件
	1 (1)			人恋しい	1 件
	1 (1)			人懐っこい	1 件
18 (328)	2 (115)	16 (185)		深い	36 件
			1 (2)	太い	1 件

9 (9)	58 (58)	4 (4)		優しい	71件
2 (33)	47 (55)	2 (3)	1 (14)	良い/よい/ええ/いい	52件
1 (19)				弱い	1件
2 (5)	15 (16)	1 (1)		悪い	18件

上の【表 2】によれば、概念メタファー「メンタルは植物」が成立する表現と成立しない一般表現と、両方とも分布している。例 (1) から例 (30) までのように、概念メタファー表現はもちろん数少なくない。なお、こちらでの一般表現はどのようなものかをも見てみよう。

*脂を多く含んだ松の幹や根が明るく燃えることは古くから知られており、コエマツ、アブラマツ、ヒデやシデなどと呼ばれ、あかりとして利用されてきました；

*しかし、日が昇ると焼けて、根がないため枯れてしまいました；

*根は良いので問題ありません；

……

一見、これらの表現も「根＋（助詞）」と「形容詞」の混合であるが、実際は「メンタル」に関する喩えではない。あるいは、表現の中の「形容詞」は「根」ではなく、別の語（明るく燃えるなど）を修飾しているのである。これらの表現を「メンタルは植物」から取り外す。

つまり、【表 2】の欄に、埋めてあるところもあれば、空欄のままのところもある。

【表 2】に、概念メタファー「メンタルは植物」に関する表現の件数と一般表現の件数との百分率を記した（四捨五入）。百分率が高ければ高いほど、欄の色が濃くなる²⁴。これにより、「まだら」問題が概念メタファー「メンタルは植物」の中に存在してい

²⁴ 鍋島（2011）での「水のメタファー」に対する区別方法を参考した。

る状態が分かる。

6.4.4《メンタルは植物》の容認の度合いについて

本段階では、概念メタファー《メンタルは植物》の容認の度合いについて述べたいと考える。

本章で取り扱うデータから見れば、「根+（助詞）」と「形容詞」の組み合わせで人間のメンタル面を表わす際の生産性の度合いは異なっている。

仮説として、「根+（助詞）」と「感情や性格を表す形容詞」と組み合わせる場合、概念メタファー《メンタルは植物》に関する事例表現の容認度がより高く、「感情や性格を表す形容詞」はメンタルを表すのにもっと有利だという仮説を立てたが、実体はそうでもないようである。

本章の【表2】では、「感情や性格を表す形容詞」と言えるのは「人恋しい」、「人懐っこい」、「優しい」のみだと考える。ほかの形容詞は比喻の意味で人間の性格や感情を表す場合もあるが、それらの「プロトタイプの意味」（典型的な修飾意味）から見れば、厳密に「感情や性格を表す形容詞」とは言えないと考えられる。

たとえば、「明るい」、「暗い」、「暖かい/温かい」、「熱い」は基本、光熱の状態などを修飾する形容詞であり、「浅い」、「深い」は物事の深さ（性質）を表わす形容詞である。また、「よい/良い/ええ/いい」、「悪い」、「弱い」は善悪、評価に関する形容詞である。なお、形容詞「太い」、「ない」も同じように、人々の感情、メンタル面を修飾しないと見られる。

まとめれば、本章でのデータに基づく《メンタルは植物》の表現について、「根+（助詞）」+「感情や性格を表す形容詞」の共起事例は合計71件である。その中、「人恋しい」、「人懐っこい」に関する表現の百分率は100%（【表2】）となったが、共起事例はそれぞれ1件のみで、説得力は少し弱いと考えられる。つまり、この3つの「感情や性格を表す形容詞」のみで、仮説がなかなか成立しにくい。

これに対し、「根+（助詞）」+「普通の形容詞」（「感情や性格を表す形容詞」以外の形容詞）の共起事例は合計144件である。かつ、その中で百分率の高いもの[「根+（助詞）」は普通の形容詞（「明るい」、「熱い」、「暗い」、「悪い」）と関連する表現の容認度は高いと見られること]も少なくない。つまり、《メンタルは植物

》に関する表現の中、「感情や性格を表す形容詞」よりも「普通の形容詞」の方が活躍しているようである。ここからはむしろ形容詞の性質は《メンタルは植物》にあまり大きな影響を与えていないのではないかとと言える。

また、【表2】を見れば、「*根優しい」「*根悪い」などは存在していないが、「根が優しい」、「根は優しい」、「根の優しい」、「根が悪い」、「根は悪い」、「根の悪い」は《メンタルは植物》に用いられている。《メンタルは植物》の「まだら」問題では、現代日本語の助詞の視点から見る価値もあると考える。本章の調査では、「根」+助詞「は」+「形容詞」の組み合わせからなったメタファー表現は最も容認度が高いと見られる。

6.5 本章のまとめ

本章では、先行研究を踏まえた上で、『筑波ウェブコーパス』を利用して概念メタファー《メンタルは植物》の「まだら」問題を考察した。植物の部位である「根+（助詞）」と「形容詞」との組み合わせで、《メンタルは植物》を成すことが可能である一方、パターンによって、それらの度合いも異なっている。つまり、「まだら」問題が《メンタルは植物》の中にも存在していることが本章で明らかにした。

また、上述からわかるように、「根+（助詞）」+「普通の形容詞」の組み合わせからなった《メンタルは植物》の表現の中で容認度の高いものも少なくない。概念メタファー《メンタルは植物》に対し、「感情や性格を表す形容詞」はメンタルを表すのにもっと有利だといったのはあまり妥当ではないと考えられる。つまり、形容詞の性質や修飾意味から《メンタルは植物》に関する表現の容認判断を行うだけではなく、表現事例の各要素を踏まえながら実行していくべきである。

本章で取り扱ったデータによれば、日常で馴染みのある慣用的な「根深い」に関する用例は見当たらなかった。これに対し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のデータでは、「根深い動揺」、「根深い不満」など、《メンタルは植物》に関する表現は確かに存在している。これは恐らくデータを処理する際、各コーパスの自らの特性を反映していると考えられる。また、コーパスに関する対照研究を今後の課題の一つとして研究に入れたいと考える。

第6章用例一覧

6.4.3における一般表現例

- * 苺は、根が浅い品種です
- * 意外に根が強いので鎌での採集をお勧めします
- * 根が荒いところほど魚の隠れ場所になりますので（後略）
- * 堤防の先端付近以外は根がキツく浅いため釣りにならない
- * 水分過剰になると根は弱くなる
- * ねぎの根は強く、収穫した後も根が残り、土が使えなくなる
- * 根はたくましくて量が多く、根張りが強い
- * 根の荒い場所では1回で巻きかえることもある
- * 椿やつげなど根の細かいもの（後略）
- * あまり根が急成長しないものや根の美しいもの、丈夫なものの方がいいですね
- * 葉もつげず、根もなく、明らかに異形だ
- * それどころか、以前よりも大人から見えにくい形になったぶん、問題の根も深い
- * 台風などの影響を受けたことがない地域に自生するので、根も浅く強風には強くありません
- * こうすると土の中に空気や水分の入るすき間ができ、根もよく張ります
- * 真下から花を見上げる美しさも楽しみたい気持ちは分かるのですが、根も非常に弱いのです
- * 指でイジイジと時間をかけて根を崩していくより、よっぽど根には優しく、時間もかかりません
- * 水は与えすぎると根によくないので、少なめの管理をします
- * ダイコンの葉は、根よりビタミンやミネラルが多く、食べてもおいしいものです
- * 脂を多く含んだ松の幹や根が明るく燃えることは古くから知られており、コエマツ、アブラマツ、ヒデヤシデなどと呼ばれ、あかりとして利用されてきました
- * しかし、日が昇ると焼けて、根がないため枯れてしまいました
- * 根は良いので問題ありません

6.4.3 における概念メタファー表現例

「根 + (助詞)」 + 「明るい」

- (1) 仕事が安心してできる様になり、私はどちらかと言うと根が明るいのでより明るく仕事の皆と接することができる様になりました。
- (2) もともと根は明るい性格の私です。
- (3) …根の明るい、モダンな人なのです。

「根 + (助詞)」 + 「浅い」

- (4) 然しこの決心は如何に根の浅いものであったか！

「根 + (助詞)」 + 「暖かい/温かい」

- (5) 「イタリア人もフランス人も、根は温かくて、哀愁を愛する人たちよ」と笑った。

「根 + (助詞)」 + 「熱い」

- (6) 強気で短気な性格だが根はとても熱く、正義感と仲間意識は人一倍強い。
- (7) 何かを作りたい、と思った時に人を巻き込んでいく事が出来るようなモチベーションが高く、根の熱い人が社内には多いです。

「根 + (助詞)」 + 「暗い」

- (8) 私は表柄ポジティブというか 元気に楽しく振る舞っているのですが、最近自分は根が暗いような気がして…
- (9) 私もうつになる前は根は暗かったんですけど、表面的にはすごく元気で仕事以外のことにもいろいろ手を出していました。
- (10) 根暗いやつは…

「根 + (助詞)」 + 「ない」

- (12) 父子が先でなければ君臣の義に根がない
- (13) …あるいは文化国家といふ根のない観念から出てきたりする。

「根＋（助詞）」＋「人恋しい」

- (14) 静かなところに一人で身を置きたい…根は人恋しいくせに、なぜだかそう思ってしまうことが多い。

「根＋（助詞）」＋「人懐っこい」

- (15) 色々いい加減で結構したたかだけど根は人懐こくて家族思い。

「根＋（助詞）」＋「深い」

- (16) …鬱屈は根が深い
- (17) ちよつとなにを考へてるのかわからなくて、でも根はそんなに深くなくて、ちよつと小意地が悪くて…
- (18) 大抵の場合、人間関係を清算する場合、根の深い感情的な原因が存在します。

「根＋（助詞）」＋「太い」

- (19) …強く、根太く、生きていきます！

「根＋（助詞）」＋「優しい」

- (20) ダメな父親であっても、誰のことも傷つけることはないし、何より根がやさしいので、優梨子も最終的には大好きになる。
- (21) ただ、根は優しくて意外と男前。
- (22) 少女と出会い、対話する中で、根の優しさがこぼれ出てくる。

「根＋（助詞）」＋「良い/よい/ええ/いい」

- (23) 大谷さんは根が良い人なので、なかなか「嫌な人」になれなかったのだ。
- (24) この2人も根はいい人だと思います。
- (25) 私の夫もほんとに根の良い人間で大好きなのですが…
- (26) 彼は根よく二、三カ月、毎日、その仕事をつづけていった。

「根＋（助詞）」＋「弱い」

- (27) 「俺様」で居たい人は、根が弱かったり、中身がお子様だったりするのがバレ

たかないから、大きく見せようと必死なんですね。

「根 + (助詞) 」 + 「悪い」

- (28) 根が悪い人はいない。
- (29) あの人も根は悪くない。
- (30) 根の悪い生徒などいません。

第7章 中国語母語話者による日本語メタファー表現の比喩解釈

7.1 はじめに

本章では、有菌（2016）を援用し、鐘（2013）を中心にした先行研究を承け、中国人日本語教師の日本語メタファー表現に対する比喩解釈のアンケート調査を行った。調査の結果に基づき、中国人日本語教師のメタフォリカル・コンピテンスを述べた上で、日本語メタファー理解に影響を及ぼす原因についての分析を試みた。その上で、植物が含まれる日本語メタファー表現を理解するのに、文脈は被験者にマイナスの影響を与えることもあることを論じ、日本語学習者の語に対する文化的背景知識の拡張が重要であることを述べる。

7.2 先行研究と問題提起

7.2.1 先行研究

外国語学習の比喩解釈（理解）に関する研究は様々になされてきている。

(1) 有菌（2016）では、英語のメトニミー（に基づくメタファー）による名詞転換動詞を日本語母語話者が解釈する際のエラーデータを基に、フレームの重要性と、フレーム喚起とその要素同士の関連付けに影響する文脈の重要性を示している。

(2) Littlemore（2003）では、バングラデシュの学生を対象にし、文化背景はメタファー解釈への影響などについて調査が行われた。結論として、メタファーの解釈には学生たち（留学生）が異文化背景からの自らの価値システム（value system）やスキーマ（schema）に従いやすいことを得た。また、この現象は講師にとっても重要な問題であり、今後の教授法について色々提言されている。

(3) Littlemore et al.（2016）では、英語母語話者日本語学習者がメトニミー解釈に問題が見られ、メトニミーをメタファーとして解釈されるケースが少なくないと指摘された。またユーモアとアイロニーが含まれるメトニミー表現はより理解しにくいことが述べられている。

また、中国人日本語学習者のメタファー理解、習得に関する文献は陈(2015)、鐘(2013)、鐘(2015)などがある。

(4) 陈(2015)では、日本語科の学生は日本語を専門としているが、大学2年生下半期になってもメタファー能力がまだ低レベルにあることが調査で明らかになった。また、その原因について、日本語教育ではメタファー意識がまだ希薄であり、教師も学生も普通の授業でイメージ・スキーマ意識が欠けていることに起因する可能性があるとして分析された。改善法として、日本語学習者にメタファー能力の重要性を認識させたうえで、日々の授業で意識的にメタファー理解能力を訓練する必要があると言及されている。

(5) 鐘(2013)では、中国人日本語学習者のメタファー表現理解力の養成を目指す研究として、日本語を専攻している大学3年生を対象に、メタファー表現理解テストを実施した。この研究では、母語とメタファー基盤に関わる概念・言語の知識、認知様式の知識及び文化知識の要素と日本語メタファー表現の理解との関連性について述べられている。それにより、母語に基づく概念・言語の知識と認知様式の知識の両方は、中国人日本語学習者の日本語メタファー表現の理解に多くの影響を及ぼす要素であり、中でも、特に概念・言語知識のほうが非常に影響力が強いことなどを結論付けられている。しかし、ここで言う文化知識の影響は不明である。

(6) 鐘(2015)において、応用認知言語学研究の視点から、日本語教育におけるメタフォリカル・コンピテンス(MC)²⁵養成の研究を推進する目的で、1つの授業実践例を設けられた。結果は、応用認知言語学的な指導法(認知法)は従来の指導法(暗記法)による記憶効果を保持するうえに、学習者のメタファー表現理解力を向上させる持続的効果があることなどが明らかになっている。この研究で使われた学習・テストの内容は上下メタファーの下位カテゴリーであることが特徴である。

上述のメタフォリカル・コンピテンス(MC)の重要性について、Littlemore(2001)では、MCは外国語習得の成功に貢献でき、コミュニケーション能力の発達やコミュニケーション・ストラテジーの使用において、重要な役割を果たしていると主張されている。なお、本章でいうメタファー表現の理解力はMCに等しいと考えられる。

²⁵ 鐘(2015)では、研究者により、MCの定義は多少異なるが、その殆どは「メタファー表現の識別力・理解力及び産出力」に焦点を当てていると指摘された。

7.2.2 問題提起

以上のように、中国人研究者の先行研究の共通点として、被験者（被調査者）はみな大学在籍中であり、彼らの日本語学習時間がそれほど長くないということが挙げられる。そのため、日本語メタファー表現解釈（理解）への不適切さがあることが予想できる。

また、先行研究によれば、中国人日本語教師の今後の教え方、指導法の改善に期待することが多いが、具体的な検討や指導計画はされていない。これに対し、筆者はより学習時間が長く、且つ、日本語教育に携わっている中国人日本語教師の日本語メタファー表現に対する解釈（理解）に関心を持つ。特に、鐘（2013）では、母語に基づく文化知識を適切に生かされれば、日本語メタファー表現の理解に貢献できることがあると指摘されている。だが、本章の立場では、母語に基づく文化知識の範囲が幅広く、中国人母語話者が持つ日常知識（経験）の面から見れば、メタファー表現理解に支障を起こしてしまう場合については問題があると考えられる。

7.3 調査

7.3.1 調査対象

現在の中国では、高校生から日本語学習を始めるのが盛んである。本章では、中国人日本語教師のメタフォリカル・コンピテンスを考察するために、2019年5月5日から5月25日にかけて、中国の高等学校で勤務している日本語教師合計13名にアンケート調査を行った。彼ら全員、日本語能力試験N1を取得し、中国語が母語である。なお、日本語の学習年数は平均して7年間であり、日本語教師としてのキャリアは平均して1年間である。

7.3.2 調査内容

調査内容として、1a. 壁の花、2a. 雑草、3a. 新米、4a. 桃李、5a. 同期の桜、6a. 濡れ落ち葉、7a. 古株、8a. 大和撫子合計8つの植物に関するメタファー表現を取り上げる。

それぞれの表現を含める例文²⁶を以下に述べる。

1b. 女は、まだダンスがうまく踊れなくて、早々に壁の花になっていた。

2b. 「自分が雑草のごとく生い茂って、他のものを害していないか」という観点を決して忘れないことです。

3b. 0歳児をもつ新米のパパとママ、またはパパの参加をお待ちしています。

4b. 桃李もの言わざれども、下おのずから蹊を成す。

5b. 夜な夜な職場の同僚や同期の桜とアルコールの力を借りてストレス発散するというものであった。

6b. 高度経済成長期にサラリーマン生活を送った五、六十代の男性はいわゆる濡れ落ち葉族で、妻にべったりと言われますから、もし、そうならとても妻の介護ができるとは思えません。

7b. 古株の女子社員達の仲が悪く、争いに巻き込まれて迷惑しています。

8b. 着物や小物が無料レンタルの「大和撫子コース」（3、7か月の2コース）は、仕事帰りに手ぶらで立ち寄れて便利。

植物に関するメタファー表現を考察材料にした理由は、植物と人間との関わりが深くみられるからである。植物に関する表現を通して、人間あるいは人間の（営み）を表していることが先行研究で論じられている（Lakoff and Johnson（1980）、Lakoff and Turner（1989）、森（1996）、靱山（2006）等）。銭（2019）でも日中両語の「種」と「開花」を巡って、それらの認知上の相違を考察した。本章は一つのケーススタディーとして、植物が含まれる日本語メタファー表現（慣用的な表現）は人々によってどのように理解されているかを掘り下げていく。

²⁶ 本章における例文の出典は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から収集した。

7.3.3 調査方法

調査にあたって、調査内容を2つに分ける。それぞれは次の手順で行う。

タイプ1 第一に、上記の表現 1a. ~8a. がそのまま現れる場合、推測される比喩的な意味を書いてもらう。第二に、その意味だと考えられる理由を被験者は記入する。これにより、被験者によるその解釈に至る動機付けへの追究が可能である。第三に、各表現の難易度を順につけてもらう。

タイプ2 タイプ1での各々の表現を例文 1b. ~8b. に使われる場合、それらの文脈中の意味、その意味だと解釈される理由を回答してもらう。そして、例文に置かれる際のメタファー表現の難易度を回答してもらう。

7.3.4 仮説

アンケート調査を実施する前に、以下の仮説を立てる。

仮説1: 「雑草」、「桃李」のような漢語表現は中国語にも見られ、かつ、被験者の日本語の学習時間が長いため、調査に対する正解率も高い(60%以上)と予想する。

仮説2: タイプ1とタイプ2と比べ、文脈有無の関わりで、後者のほうがより理解、解釈されやすいという仮説を立てる。

7.4 調査の結果

7.3.2 で取り上げた各表現の意味解釈は『新明解国語辞典』第7版に従う。辞典に載っていない表現に関しては、インターネットの『デジタル大辞泉』(<https://dictionary.goo.ne.jp>)を参照し、それらの解釈の適切さを日本語母語話者²⁷に判断した上でまとめた。

①壁の花: パーティーなどで、会話の輪から外れている女性。もともとは、舞踏会で、踊りに誘われず壁際に立っている女性をいった語。 (<https://dictionary.goo.ne.jp>) —

²⁷ 森田厚氏のご協力をいただいた。

『デジタル大辞泉』 小学館

②雑草：あちこちに自然に生えているが、利用（観賞）価値がないものとして注目されることがない（名前の知られていない）草。「住む人もなく雑草ばかりが生い茂る廃屋／雑草のようにたくましく〔逆境に屈することなくしたたかに〕生きる」²⁸（『新明解国語辞典』第7版：583）

③新米：そのことに関する時日が浅く、十分に慣れていないこと（人）。（『新明解国語辞典』第7版：768）

④桃李：「桃李もの言わざれど、下おのずから蹊を成す〔＝徳のある人のところには、自然に人が集まってくるもの〕」。（『新明解国語辞典』第7版：1071）

⑤同期の桜：《同名の軍歌から》予科練の同期生を桜にたとえた語。転じて一般に、同期生。（<https://dictionary.goo.ne.jp>）—『デジタル大辞泉』 小学館

⑥濡れ落ち葉：《濡れた落ち葉が地面に貼り付いて取れないさまから》仕事も趣味も仲間もなく、妻に頼りきって離れようとしめない定年退職後の男。〔補説〕平成元年（1989）ごろの流行語。（<https://dictionary.goo.ne.jp>）—『デジタル大辞泉』 小学館

⑦古株：（一）古くなった、木や草の株。（二）〔実力のありそうな古顔〕、古顔。²⁹（『新明解国語辞典』第7版：1345）

⑧大和撫子：（一）ナデシコの異称。（二）〔か弱いながらも、りりしいところがあるという意味で〕日本女性の美称。（『新明解国語辞典』第7版：1529）

7.4.1 メタファー表現の難易の序列

まず、日本語メタファー表現に対し、被験者に順を付けてもらった難易の序列を【表1】を通して見ていく。13名の回答により、最も簡単だと回答されたのを1点、最も難しいと回答されたのを8点と付与する。なお、被験者により、序列をつけなかった場合、0を付与する。

²⁸ 雑草：日常に、「雑草」は平凡な人を指す解釈もあるようだが、本章では、雑草の比喩的な意味を『新明解国語辞典』第7版に従う。

²⁹ 古顔：〔その職場などに〕古くからいる人。古参。（『新明解国語辞典』第7版：1345）

【表 1】 被験者による植物が含まれる表現に対する難易の序列

①壁の花	タイプ 1	6	8	4	2	7	6	0	6	8	5	0	1	7	
	タイプ 2	4	8	5	1	5	6	0	7	6	5	0	7	4	
②雑草	タイプ 1	5	1	5	3	2	3	0	1	4	1	0	6	5	易
	タイプ 2	5	2	1	2	2	3	0	1	5	3	0	6	3	
③新米	タイプ 1	3	3	7	7	5	1	0	2	5	6	1	2	2	
	タイプ 2	2	3	3	4	3	2	0	2	3	4	1	1	1	
④桃李	タイプ 1	1	2	3	4	1	2	0	3	2	4	0	5	1	易
	タイプ 2	1	1	2	6	1	1	0	3	2	1	0	2	2	易
⑤同期の桜	タイプ 1	7	4	6	6	6	4	0	7	7	2	0	4	6	
	タイプ 2	7	4	7	7	7	4	0	4	8	2	0	3	7	
⑥濡れ落ち葉	タイプ 1	8	6	8	5	3	5	0	8	1	8	0	8	8	難
	タイプ 2	8	6	6	3	6	5	0	8	1	8	0	8	8	難
⑦古株	タイプ 1	4	5	2	8	4	7	0	4	6	7	0	7	3	
	タイプ 2	3	5	4	5	4	7	0	5	7	6	0	5	5	
⑧大和撫子	タイプ 1	2	7	1	1	8	8	0	5	3	3	0	3	4	
	タイプ 2	6	7	8	8	8	8	0	6	4	7	0	4	6	

まとめとして、日本語メタファー表現の難易状況を【表 2】で示す。

【表 2】 被験者による植物が含まれる表現の難易のまとめ

	最もやさしい表現	最も難しい表現
タイプ 1	雑草 (3 人) ; 桃李 (3 人)	濡れ落ち葉 (6 人)
タイプ 2	桃李 (5 人)	濡れ落ち葉 (5 人)

表からわかるように、タイプ 1 では、被験者にとって、最もやさしいと感じたのは「雑草」、「桃李」であるのに対し、最も難しいと感じたのは「濡れ落ち葉」である。タイプ 2 では、「桃李」が最もやさしいと答えた者は 5 人いた。最も難しいのは「濡れ落ち葉」

のままである。

7.4.2 メタファー表現の比喩解釈

次に、被験者による植物が含まれる表現に対する比喩解釈の結果を【表3】に整理した。本調査では、比喩解釈の結果を4種類に分類した³⁰。第1種類、被験者によって回答しなかった場合及び表現のままに記した場合を「未解釈」にする。第2種類、回答を記入したが、その正しさがかなり欠けているのを「誤解釈」にする。第3種類、回答が完璧ではないが、正解にかなり近く、あるいはその比喩的な意味の一部を答えた場合、「近正解」にする。第4種類、回答が完璧である場合、「正解」と記す。【表3】の括弧内は回答の合計数である。

【表3】被験者による植物が含まれる表現に対する比喩解釈の比較

植物が含まれる表現		未解釈	誤解釈	近正解	正解
①壁の花	タイプ1	(2)	(9)	(1)	(1)
	タイプ2	(1)	(8)	(3)	(1)
②雑草	タイプ1	(3)	(4)	(0)	(6)
	タイプ2	(6)	(3)	(1)	(3)
③新米	タイプ1	(0)	(2)	(0)	(11)
	タイプ2	(0)	(0)	(0)	(13)
④桃李	タイプ1	(0)	(11)	(1)	(1)
	タイプ2	(6)	(4)	(1)	(2)
⑤同期の桜	タイプ1	(3)	(1)	(5)	(4)
	タイプ2	(3)	(4)	(4)	(2)
⑥濡れ落ち葉	タイプ1	(3)	(7)	(2)	(1)
	タイプ2	(7)	(3)	(1)	(2)

³⁰ Littlemore et al. (2011) のメタファー解釈のエラー分類を参照にした。

⑦古株	タイプ1	(1)	(4)	(2)	(6)
	タイプ2	(2)	(1)	(1)	(9)
⑧大和撫子	タイプ1	(0)	(1)	(9)	(3)
	タイプ2	(6)	(0)	(5)	(2)

【表3】を見ると、タイプ1もタイプ2も回答がばらばらになっている。それらの解釈に至った理由を分析し、特に「誤解釈」についての理由を見たところ、以下の示唆を得た。

(1) 母語の違いによって、同じメタファー表現に対しても異なる解釈が見られる。

(2) 日本語メタファー表現を解釈（理解）するのに、文脈は「諸刃の剣」のような役割になる。

(3) 日本語学習者の持つ文化的背景知識は日本語メタファー表現解釈に不足している場合がある。

(1) について言えば、「雑草」や「桃李」に対する誤解釈は意外に多かった。

「雑草」についての誤解釈は主に〈要られていない草〉、〈乱雑〉、〈役に立たないもの（人）〉、〈他人の資源を奪う人〉などがある。また、解釈せずに、中国の漢字〈杂草〉になってしまったケースもいくつあった。このような現象を「未解釈」に分類した。中国語では、〈杂草〉（雑草）が〈たくましい性格〉の喩えになる一方、時には〈要られていないもの（人）〉、〈役に立たないもの（人）〉のような比喩も使われている。しかし、日本語の辞典には、「雑草」について、〈たくましい性格〉の喩えのみと記載されているため、本章では、「雑草」を〈要られていないもの（人）〉、〈役に立たないもの（人）〉と解釈された場合、「誤解釈」として判断した。

なお、「桃李」について、多くの被験者はそれを〈学生〉の意味として理解した。日中両国間に「桃李」に対する解釈の分岐が見られる。日本語の辞典及び日本人に尋ねた回答では、やはり「桃李物言わざれども、下おのずから蹊を成す」ということわざがよく認識されている。つまり、日本語では、「桃李」を〈徳のあり、優れる人〉と解釈するのが普通である。これに対し、中国人にとって、〈桃李満天下〉ということわざのほうがよく認識されており、〈桃李満天下〉の場合、「桃李」を〈自分の取り立てた門人〉という解釈がより適切であろう。この点から見れば、中国人母語話者が「桃李」を〈学生〉と解釈したのは不思議ではない。これは同様の漢字（「雑草」や「桃李」）メタファー表現のずれが日中両国間に存在していることを反映している。

次に、文脈の影響について述べる。「新米」や「大和撫子」という例を見てみよう。本調査の中で、「新米」に対する「誤解釈」は比較的少ない。一番の理由として、このメタファーを勉強したことがあるからである。また、「新米」に関する「近正解」と「正解」の合計数を計算してみたら、タイプ1よりタイプ2のほうが多くなった。一見、文脈はメタファー表現解釈（理解）にプラスの影響を与えているようである。

しかしながら、「大和撫子」について、タイプ1の場合、「近正解」と「正解」は合計12件であったのに対し、タイプ2に移ると、7件まで下がった。これを見れば、被験者は余計に文脈に左右され、正解を出すことが難しくなってしまうことが分かる。言い換えれば、このような場合、文脈はメタファー表現解釈（理解）にマイナスの影響をもたらしている。

さらに、日本語学習者の語に対する文化的背景知識の拡張が重要であることを「同期の桜」³¹、「古株」を通して説明していく。

「同期の桜」という例は、「近正解」に当たった回答が比較的が多かった。それは「同期」というキーワードから、何らかの〈時期の共通性〉が被験者によって解釈されている。一方、回答の中、両タイプとも「同期の桜」を〈女子同僚〉、〈同期生の中の優れる人〉、〈同級生の中の可愛い女の子〉と過解釈してしまったケースが多く見られる。理由として考えられるものには、〈「桜」（花）は女性を描写することが当然〉、〈日本では、桜は大人気なので、優秀な象徴〉、〈桜は綺麗で可愛い女性の喩え〉、〈桜は人々にプラスのイメージを与える〉などがある。つまり、「桜」（花）に対する日常的な知識経験が被験者の頭の中に起動しているのである。同じように、「古株」についても、〈古い貨幣、価値がない〉、〈古い木〉、〈株価に強い人〉というような誤解釈が現れるが、これも、「古い」、「株」に対する一般認知が働いているからである。やはり、日本語を学習する際、語に対する認知領域の拡張も意識的に取り入れなければならないと思われる。

最後の2例、「壁の花」と「濡れ落ち葉」を見て行こう。誤解釈が最も多いのは「壁の花」であり、誤解釈に関する理由はタイプ1とタイプ2とそれほど変わらない。例えば、壁だけに注目した被験者は、中国語の〈墙头草〉（日和見主義者）というイメージに従う

³¹ このメタファー表現は鍋島（2011:113）でも挙げられている。

解釈が多かった。なお、壁と花と両方に注目した場合、外見だけで、実用・実力のないもの（人）、という点から「壁の花」を中国語の〈花瓶〉³²と解釈した回答が多かった。この点については、恐らく鐘（2013）の結論に合致しているところがあると考えられる。つまり、母語に基づく言語知識の役割が影響を与えているため、日本語メタファー表現に対しても中国語らしい解釈がされたということである。「濡れ落ち葉」はタイプ1、タイプ2のいずれも一番難しいと答えられたメタファー表現である。被験者は日頃からふれる機会はないということで、「無解釈」又は「誤解釈」に当たった回答が多かった。

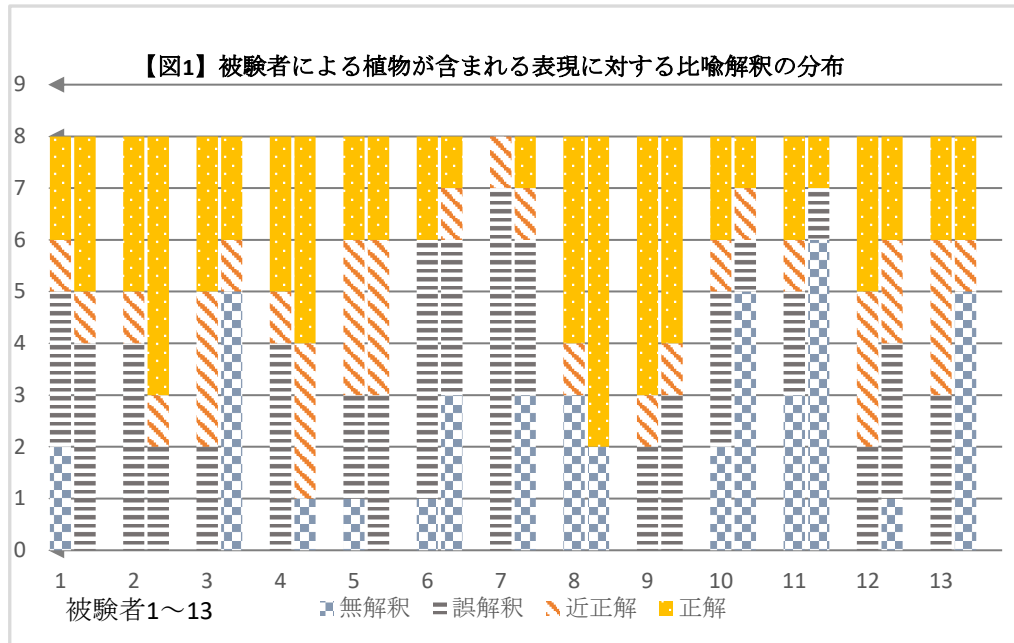
7.4.3 文脈の影響

上述の「新米」、「大和撫子」の事例を見ると、文脈はメタファー表現理解に影響を及ぼすことがあるとわかった。文脈の影響については以下の観点からも考えてみる。

【図1】の横軸は、被験者1から被験者13を指す。縦は8つのメタファー表現（左はタイプ1、右はタイプ2）に対する解釈分類の分布と合計数である。この図を見れば、タイプ2における「近正解」と「正解」の合計数はタイプ1より多かったのは5人いた。それぞれは、1、2、4、7、8人目である。また、5人目の回答では、「近正解」と「正解」の合計数はタイプ1とタイプ2と同じである。つまり、5人目の答えについて、タイプ1における「近正解」（3件）と「正解」（2件）の合計数は5件であり、タイプ2も同じ件数である。また、6人目の回答では、タイプ1における「近正解」（0件）と「正解」（2件）の合計数は2件であり、タイプ2では、「近正解」（1件）と「正解」（1件）の合計数は2件である。これも5人目のように、6人目の答えの場合でも、「近正解」と「正解」の合計数はタイプ1とタイプ2と同じであると見られる。

なお、他の被験者の答えでは、タイプ2の「近正解」と「正解」の合計数はタイプ1より少なかったことが【図1】にも反映している。したがって、文脈がついてもメタファー表現理解には必ずしも有利とは言えないのではないだろうか。

³² 〈花瓶〉：形は綺麗だが、中身も丈夫さも欠けている性質から、外見だけ美しく実力のない女性の喩えである。



7.5 第二言語教育・習得と異文化間コミュニケーション

この節では、第二言語教育・習得と異文化間コミュニケーションに関する論述にも触れる。これは、外国人の日本語習得のメタファーに関わる面についても示唆を与えるかもしれないと考えるからである。

荒川・森山（2009）では、言語類型論的特徴の比較について述べられている。彼らは日英以外の言語、韓国語、中国語などについても論述を行い、「韓国語は日本語にかなり近いものの、韓国語、中国語ともに日英両語の間に位置しているようである」と指摘している。

また、荒川・森山（2009）によると、「日本語は、把握のしかた、スル型・ナル型、感情形容詞の使用、モダリティ表現のどれを取ってみても、言語類型論的には一方の極に位置し、ほかの言語に比べ明確な特徴を有していることになる。このことはほかの言語を母語とする学習者が日本語を学ぶ際に、注意すべき点であり、教師も学習者がその違いに気づくことができるような指導をする必要があるであろう」と述べられている。これにより、日本語の明確な特徴について荒川・森山（2009）により指摘され、特に日本語を学ぶ方と教える方と、両方とも区別して注意する必要があると強調されている。

さらに、上のような現象を荒川・森山（2009）では、以下の用例を取り上げられながら、言語類型論的な特徴の違いに注意することが重要であると述べられている。

中国語の法副詞「一定（イーティン）」と日本語の陳述副詞「きっと」とは、同じようにデオンティック³³な意志・依頼用法（きっと～します、きっと～してください）とエピステミック³⁴な推量用法（きっと～だろう）とがあるが、中国語の「一定」では前者がプロトタイプであるのに対し、日本語の「きっと」では後者がプロトタイプになる。このような違いに学習者が気づかない場合、中国人日本語学習者が「きっと」を意志・依頼用法には用いるが、推量用法には用いない可能性がある。また日本人中国語学習者では逆のことが起こることもあり考えられる。このような誤りは、両者のモダリティの言語類型論的な特徴の違いを学習者に気付かせることで解決できるであろう。

荒川・森山（2009：90）

第二言語教育において、荒川・森山（2009）は井上（2002）の論述を取り上げている。

第二言語教育において、その言語の文法的、語彙的な特徴や学習者の母語との差異について言及するのは至極当然のことである。しかし最近、文化や把握のしかた（パースペクティブ³⁵）、発想の違いなど、これまであまり問題にされてこなかった違いが、日本語教育をはじめとした第二言語教育において、教えるべき内容として取り上げられることが少なくない（井上2002）。

荒川・森山（2009：90）

これに対する理由として、荒川・森山（2009）では以下のように説明されている。

それは、それぞれの言語にはそれを支える文化やパースペクティブ、発想があり、それを理解することで、その言語に見られる種々のことがらを有機的に理解することが可能になると考えるようになってきたためである。

33 デオンティック:拘束的

34 エピステミック：認識的

35 パースペクティブ:遠近法

これまでは、語学文法面から第二言語の教育・習得に必要な注意点について荒川・森山 (2009) の観点を見てきた。また、本章の調査結論と一致するところ、つまり、外国語学習者に対する文化的背景知識の拡張に関する荒川・森山 (2009) の論述をここで確認してみる。

荒川・森山 (2009 : 90) では、「今日のような人と人とが国境を越えて交わり、第二言語 (外国語) を介してのコミュニケーションが日常的に行われるグローバル時代にあっては、単に文法や語彙といった言語面の理解だけではなく、その背景に存在する文化やパースペクティブ、発想の違いをも考慮に入れないと、コミュニケーションにさまざまな誤解や摩擦をもたらすことになる。したがって日本語教育でも、このような非言語的な側面にまで学習者に気づきを促すことができる総合的な言語教育が求められている」と述べられている。

荒川・森山 (2009) で扱ってきたさまざまな表現も、単に文法や語彙という面だけではとらえることができない。言語類型論的特徴の違いが反映しており、言語教師は学習者に対し、それらに対する気づきを促すことが求められている。

また、第二言語、あるいは外国語を学習する際、無視してはいけない異文化間コミュニケーションについての論述が松木 (2004) に見られる。

松木 (2004) では、「人類学の視点から異文化間コミュニケーションを取り扱った重要な研究にガンパーズ (John Gumperz) の研究がある」と紹介している。

それは対人コミュニケーション、すなわちコミュニケーションの相互作用におけるダイナミックな諸相に基づいているという点で特徴的である。こうしたアプローチは1970年代から形をとり始め、1980年代には広く知られるようになった。ここで重要となるのは、文化の全体的な背景というよりも民族性 (ethnicity) の現れ (および個としてのアイデンティティに注目する場合には民族的アイデンティティ ethnic identity) であり、多文化社会の中で起こるコミュニケーションの過程で、どのように文化的、民族的なステレオタイプが創られていくのかという点である (Gumperz 1982a, 1982b)。

松木 (2004 : 233)

付け加えると、これに対する用例分析を Gumperz の主張に基づき、松木 (2004) では取り上げている。

ある英国の空港の職員用カフェテリアで、インド系とパキスタン系のウェイトレスが接客態度が横柄であるとしてネガティブな印象を与えていたのだが、ガンパーズは、その原因の一つとなっていた彼女たちの独特なイントネーションに注目する。中でも顕著なのは、鶏料理に肉汁のソースをかけるかどうか客に尋ねる際の “Gravy?” という簡単な問いかけが、母語のイントネーションの慣習に影響されることによって、尻上がりにならず尻下がりになってしまっていた例である。英語の会話では、通常は肉汁のソースをかけるかどうかを尋ねる場合は問いかけであって、尻上がりになるのが普通である。だが、インド系とパキスタン系のウェイトレスたちは、尻下がりのイントネーションによって、客に向かって「これは肉汁ソースである」という状況にそぐわない断定的な（結果として押しつけがましい）発話を行ったように解釈されてしまい、そのことが彼女らのネガティブなイメージを創りあげていたと解説される (Gumperz 1982b : 173)。

松木 (2004 : 233)

以上のように、異文化間コミュニケーションのなか、語学文法面の特徴の違い、文化的背景知識の拡張のほかに、それぞれの民族性、言い換えれば民族性アイデンティティへの配慮意識も取り入れなければならない、これは7.4節までに分析してきた、メタファー解釈の言語文化の違いを考慮した言語教育においても反映させるべきであると考えられる。

7.6 本章のまとめ

本章をまとめて言えば、先行研究を踏まえた上で、中国人若年層日本語教師が日本語メタファー表現に対する解釈（理解）のアンケート調査を通じ、中国人日本語教師のメタフォリカル・コンピテンス及びメタファー表現理解に影響を及ぼす原因を考察したということになる。

本調査では8つのメタファー表現をそれぞれタイプ1、タイプ2に置かれた場合の解釈

を13名の被験者に回答してもらった。アンケート調査に当たって、全部で208件の回答数であり、その中で、「正解」となったのはタイプ1が33件で、タイプ2が34件で合わせて67件である。結果的に、中国人若年層日本語教師のメタフォリカル・コンピテンスはそれほど高くない現状（平均正解率 32.21%）であることが分かった。また、具体例を通して、中国人日本語学習者（被験者）によるメタファー解釈のずれを述べた。日本語学習者にとって、意識的に語に対する文化的背景知識を拡張することが重要だとの啓発を受けたのである。本章の調査の限りでは、文脈は日本語メタファー表現理解にマイナスの影響があることもわかった。

なおまた、本調査での被験者は地域的に広い範囲（南京市、無錫市、蘇州市、ハルビン市、湖北省、四川省、山東省など）から集めた若年層日本語教師である。今回の調査結果は中国広範囲でのメタファー学習現状の一つの反映であると考えられる。

かつ、以上に基づき、外国語教育側にせよ、外国語学習側にせよ、文法面の特徴の把握、文化的背景知識の拡張、そして民族性アイデンティティへの尊重、いずれも重要で普段から意識するべきだということである。

付録

付録1 「アンケート調査内容」

以下は言葉の比喩的な意味に関する匿名のアンケート調査です。

回答する際、辞書などを使わずに、ご自身、中国語で回答するようにお願いいたします。

ご協力ありがとうございます。

一、以下の言葉について、単独に現れる場合、推測される比喩的な意味。

1a. 壁の花

2a. 雑草

3a. 新米

4a. 桃李

5a. 同期の桜

6a. 濡れ落ち葉

7a. 古株

8a. 大和撫子

二、その意味だと考えられた理由（動機付け）。

1a.

2a.

3a.

4a.

5a.

6a.

7a.

8a.

三、難易の順番をつける（易→難）。

四、文に使われる場合、推測される比喩的な意味。（中国語に翻訳してください）

1b. 女は、まだダンスがうまく踊れなくて、早々に壁の花になっていた。

2b. 「自分が雑草のごとく生い茂って、他のものを害していないか」という観点を決して忘れないことです。

3b. 0歳児をもつ新米のパパとママ、またはパパの参加をお待ちしています。

4b. 桃李もの言わざれども、下おのずから蹊を成す。

5b. 夜な夜な職場の同僚や同期の桜とアルコールの力を借りてストレス発散するというものであった。

6b. 高度経済成長期にサラリーマン生活を送った五、六十代の男性はいわゆる濡れ落ち葉

族で、妻にべったりと言われますから、もし、そうならとても妻の介護ができるとは思えません。

7b. 古株の女子社員達の仲が悪く、争いに巻き込まれて迷惑しています。

8b. 着物や小物が無料レンタルの「大和撫子コース」（3. 7か月の2コース）は、仕事帰りに手ぶらで立ち寄れて便利。

五、その意味だと考えられた理由（動機付け）。

1b.

2b.

3b.

4b.

5b.

6b.

7b.

8b.

六、難易の順番をつける（易→難）。

付録2-1 「アンケート調査明細-壁の花」

壁の花	単独意味	文脈意味
回答 1	<p>坚强的。</p> <p>●たくましい。</p>	<p>花瓶。</p> <p>●花瓶。</p>
回答 2	<p>假花，墙纸。</p> <p>●造花、壁紙。</p>	<p>徒有外表没有实力的花瓶一样的存在。</p> <p>●表面だけで実力のない花瓶のような存在である。</p>
回答 3	<p>无关轻重的，背景。</p> <p>●とんでもない、背景。</p>	<p>那个女人，尚且无法流畅的跳舞，很快就沦为站在墙边无人邀请的背景。</p> <p>●まだうまく踊れないその女性が、すぐに誘われない壁の背景のような存在になってしまった。</p>
回答 4	<p>因为不出众，而受到冷落的女性。</p> <p>●外觀などあまり目立たない女性、無視されてしまったこと。</p>	<p>女性因不擅跳舞而受到冷落。</p> <p>●女性はダンスが苦手だったため、人に無視されている。</p>
回答 5	<p>与自己无关的事情。</p> <p>●自分と関係のないことである。</p>	<p>晾在一边，不受欢迎。</p> <p>●放っておく、モテないこと。</p>
回答 6	<p>墙头草，花瓶。</p> <p>●二股膏薬、花瓶。</p>	<p>这个女人还不能跳好舞，早早就成了墙上的一朵花。</p> <p>●まだうまく踊れないその女性は、すぐに壁の上にある一輪の花のようになってしまった。</p>
回答 7	<p>比喻短暂而冰清玉洁之物。</p> <p>●短くて純粋なものたとえである。</p>	<p>女的舞蹈还是跳不好，早已被雪藏（晾在一边）。</p> <p>●女性はまだうまく踊れなくて、よそに放置されている。</p>
回答 8	<p>未回答。</p> <p>●無回答。</p>	<p>无回答。</p> <p>●無回答。</p>
回答 9	<p>衬托他人的，类似绿叶。</p> <p>●青葉のように他人を支えることである。</p>	<p>陪衬。</p> <p>●引き立て役。</p>
回答 10	<p>中看不中用。</p> <p>●見た目はいいが、使えない。</p>	<p>女性舞跳得不好，很快就会成为中看不中用的花瓶。</p> <p>●踊りが下手な女性は、花瓶になってしまった。</p>
回答 11	<p>无回答。</p> <p>●無回答。</p>	<p>女孩子都还没有好好跳舞就已经早早成为大家关注的焦点了。</p> <p>●女性は、まともに踊る前から早くも注目の的になっていた。</p>
回答 12	<p>华而不实之物。</p>	<p>华而不实。</p>

	●派手で非現実的なものである。	●派手で非現実的である。
回答 13	<p>不起眼，无人问津。</p> <p>●気取らず、聞く人もいないである。</p>	<p>那个女人，不擅长跳舞，无人邀请无人问津。</p> <p>●その女性は、ダンスが得意でないため、誰も誘わないである。</p>

付録 2-2 「アンケート調査明細-雑草」

雑草	単独意味	文脈意味
回答 1	不合理的。 ●ミスフィッツ。	掠奪他人的资源机会的人。 ●他人の資源チャンスを略奪する人である。
回答 2	野草一样的杂乱。 ●雑草のような乱雑さである。	形容像杂草一样一个有顽强的生命力。 ●粘り強い生命を持つ雑草と表現される。
回答 3	生命力旺盛的。 ●生命力が活発であることである。	绝不可忘记「如杂草般繁茂的生长, 但不要危害到其他人」的观点。 ●「雑草のように伸びても、他人に迷惑をかけない」という考えを決して忘れてはいけないである。
回答 4	杂草般顽强的生命力。 ●雑草のような強い生命力である。	如杂草一般旺盛的生命力。 ●雑草のように勢いがある生命力である。
回答 5	杂草, 无用的东西。 ●雑草、役に立たないものである。	野草, 杂草, 碌碌无为。 ●雑草、雑草、何もしないである。
回答 6	杂草。 ●雑草。	永远不要忘记“我像杂草一样长大, 不伤害其他东西”。 ●「雑草のように伸びて、何にも害を与えない」ということを決して忘れてはいけないである。
回答 7	比喻不屑于主流, 我行我素之流, 然而本身并无多大之能耐。 ●本流にはこだわらないが、自分には大した能力がない人のたとえである。	绝对不要忘记“自己如同杂草般疯长, 有无祸害他物”之想法。 ●自分が雑草のように育っている、他人を傷つけていない、という思いを決して忘れてはいけないである。
回答 8	逆境中坚强生存。 ●逆境を生き抜く強さである。	逆境に屈することなくしたたかに生きる。 ●逆境に屈することなくしたたかに生きる。
回答 9	平凡的小人物, 坚韧, 生命力强。 ●平凡な小者、頑丈で生命力が強い。	平凡, 坚韧, 无害。 ●平凡、頑丈、無害。
回答 10	杂草。 ●雑草。	不要忘记“你自己如果像杂草一样肆无忌惮地生长, 是会给其他人带来麻烦的”。 ●「自分が雑草のように成長すると、他人に迷惑をかける」ことを忘れないでください。
回答 11	比喻意志坚强的人。	无回答。

	●意志の強い人の比喻する。	●無回答。
回答 12	生命力頑強。 ●生命力が頑丈である。	吃干饭。 ●対価を払わずに他人の労働の成果を享受する人である。
回答 13	野草。 ●野草。	一定不要忘记这个观点：自己像野草一样野蛮生长的时候，会不会伤害别人呢？ ●この視点を忘れないでください：雑草のように乱暴に成長すると、他の人を傷つけるか？

付録2-3 「アンケート調査明細-新米」

新米	単独意味	文脈意味
回答 1	<p>新手。</p> <p>●初心者。</p>	<p>新人。</p> <p>●新米。</p>
回答 2	<p>新人。</p> <p>●新米。</p>	<p>新人。</p> <p>●新米。</p>
回答 3	<p>某方面没有经验，新手。</p> <p>●ある場面で経験がない、初心者。</p>	<p>等待有新生儿的新手爸爸和妈妈，或者是爸爸的参加。</p> <p>●新生児を持つお父さん、お母さん、またはお父さんの参加を待ってる。</p>
回答 4	<p>新的。</p> <p>●新しい。</p>	<p>不熟练的新人。</p> <p>●未熟な新人である。</p>
回答 5	<p>新人。</p> <p>●新米。</p>	<p>新人，第一次做某事的人。</p> <p>●新人、初めて何かをする人である。</p>
回答 6	<p>新人。</p> <p>●新米。</p>	<p>我们期待着一个新手爸爸、妈妈或爸爸带着一个新生儿参与。</p> <p>●新生児を持つパパ、ママ、パパの参加を期待している。</p>
回答 7	<p>稚气与豪气同存。</p> <p>●幼稚さと傲慢さが共存している。</p>	<p>新手爸妈，期待宝宝的参与。</p> <p>●新米親、お父さんの参加を期待している。</p>
回答 8	<p>对某事还没有十分习惯的人。</p> <p>●まだ何かにあまり慣れていない人である。</p>	<p>未熟な人。</p> <p>●未熟な人。</p>
回答 9	<p>新手。</p> <p>●初心者。</p>	<p>新手。</p> <p>●初心者。</p>
回答 10	<p>新人。</p> <p>●初心者。</p>	<p>期待即将为人父母的新手爸妈，或者爸爸的参加。</p> <p>●これから親になる初心者の親御さん、またお父さんの参加する。</p>
回答 11	<p>比喻刚出道没经验的人。</p>	<p>刚出生的新手爸爸妈妈，或者是期待爸爸的参</p>

	●初心者。	加。 ●生まれたばかりの新米親御さん、またはお父さんの参加を期待してる。
回答 12	新人。 ●初心者。	新人。 ●初心者。
回答 13	新人, 新手。 ●初心者。	等待有新生儿的新手爸爸妈妈或爸爸的参加。 ●新生児を持つお父さんやお母さんの参加をお待ちしている。

付録2-4 「アンケート調査明細-桃李」

桃李	単独意味	文脈意味
回答 1	学生。 ●学生。	有才能的人。 ●才能が持ってる人である。
回答 2	学生。 ●学生。	学生。 ●学生。
回答 3	碩果。 ●実りある。	桃李不言下自成蹊。 ●桃や李(すもも)は何も言わないが、美しい花や良い香りの果実を求めて人が集い、その樹木の下には自然と蹊(みち)ができる。
回答 4	指学生。 ●学生のことである。	做了好事, 有号召力感染人心。 ●善を行い、人の心を染めて魅力を持っている。
回答 5	学生。 ●学生。	学生。 ●学生。
回答 6	学生。 ●学生。	桃李不言, 下自成蹊。 ●桃や李(すもも)は何も言わないが、美しい花や良い香りの果実を求めて人が集い、その樹木の下には自然と蹊(みち)ができる。
回答 7	沉甸甸的枝头, 丰收。 ●沈みゆく枝、豊穰な収穫である。	桃李不说, 下自成蹊。 ●桃や李(すもも)は何も言わないが、美しい花や良い香りの果実を求めて人が集い、その樹木の下には自然と蹊(みち)ができる。
回答 8	徳のある人のところには、自然に人が集まってくるものだ。 ●徳のある人のところには、自然に人が集まってくるものだ。	徳のある人の所には、自然に人が集まってくるものだ。 ●徳のある人の所には、自然に人が集まってくるものだ。
回答 9	学生, 类似桃李满天下。 ●全国各地に教え子がいる。あちこちに自分が育てた弟子がいる。門下生	学生, 教学硕果。 ●学生、指導実績である。

	がたくさんいる。	
回答 10	<p>桃子和李子，桃李满天下。</p> <p>●ピーチとプラム、全国各地に教え子がいる。あちこちに自分が育てた弟子がいる。門下生がたくさんいる。</p>	<p>桃李不言，下自成蹊。</p> <p>●桃や李(すもも)は何も言わないが、美しい花や良い香りの果実を求めて人が集い、その樹木の下には自然と蹊(みち)ができる。</p>
回答 11	<p>比喻学生。</p> <p>●学生を比喻する。</p>	<p>无回答。</p> <p>●無回答。</p>
回答 12	<p>有价值之物。</p> <p>●価値があるものである。</p>	<p>有价值之物。</p> <p>●価値があるものである。</p>
回答 13	<p>门生，学生。</p> <p>●生徒。</p>	<p>桃李不言，下自成蹊。</p> <p>●桃や李(すもも)は何も言わないが、美しい花や良い香りの果実を求めて人が集い、その樹木の下には自然と蹊(みち)ができる。</p>

付録 2-5 「アンケート調査明細-同期の桜」

同期の桜	単独意味	文脈意味
回答 1	无回答。 ●無回答。	女同事。 ●女性の同僚。
回答 2	同期入职的同僚。 ●同期	同一时间入职的同事。 ●同期。
回答 3	同期中的佼佼者。 ●同時期のベスト。	每一夜，都借助着同事以及卡拉 OK 和酒精来缓解内心的压力。 ●每晚、同僚、カラオケ、お酒を使ってストレスを解消している。
回答 4	同级学生里比较优秀的人，比较漂亮的女生。 ●同級生の中で優秀な人、綺麗な女の子である。	同级的漂亮女生？ ●同級生綺麗な女の子である。
回答 5	同窗/同一时代的人。 ●同期・同時代の人。	职场同期中表现优秀的人。 ●同期の中で優秀な人である。
回答 6	同期中优秀的人。 ●同級生の中で優秀な人である。	夜以继日工作的同事们，用酒精的力量，缓解压力。 ●24 時間体制で働く同僚は、アルコールでストレスを解消している。
回答 7	同一起点，终沦为异乡他人，甚至于香消玉殒于他世之人。 ●同じ出発点から、彼らは異国の地で別人になるか、別の世界で死ぬこともある。	夜夜借着酒精之力与职场同僚和狐朋狗友们解消胸中之闷。 ●每晚アルコールで同僚や、同じ穴の貉の友達はストレスを解消している。
回答 8	无回答。 ●無回答。	同期生。 ●同級生。
回答 9	同期生，或同期的比较优秀的人。 ●同級生、または同級で優秀な人である。	女同事。 ●女性の同僚。
回答 10	同一届的同学。 ●同級生。	同一起加班的同事和同学一起，借酒消除压力。 ●残業している同僚たちと一緒に、アルコールを借りてストレスを解消すること。

回答 11	无回答。 ●無回答。	无回答。 ●無回答。
回答 12	战友。 ●戦友。	战友、兄弟。 ●戦友、兄弟。
回答 13	处于同样处境的人。 ●同じ境遇の人である。	每天晚上借由同事和酒精的力量来消除压力。 ●同僚とアルコールの力で、毎晩ストレスを解消する。

付録 2-6 「アンケート調査明細-濡れ落ち葉」

濡れ落ち葉	単独意味	文脈意味
回答 1	无回答。 ●無回答。	怠惰的人。 ●怠け者。
回答 2	跟屁虫。 ●フォロワー。	对妻子言听计从离开妻子无法独立生活的退休白领。 ●妻への服従妻なしでは自立できない退職サラリーマンである。
回答 3	衰败无用的。 ●無駄に腐る。	在高度经济成长期过着工薪族生活的五、六十岁的男性，也就是所谓的落叶族，被妻子数落为稀里糊涂的人，到了关键的时候，实在无法想象他们能承担起妻子的照护任务。 ●高度経済成長期にサラリーマン生活を送った 50~60 代の男性、いわゆる落葉層が、妻に困惑させられている人は、いざという時に妻の世話を任せられるとは思えないである。
回答 4	受到打击一蹶不振的人。 ●打ちひしがれている人たちである。	粘着妻子的丈夫。 ●妻にしがみついている夫である。
回答 5	烂叶子。 ●腐った葉。	无法适应职场，落后于时代的群体。 ●職場に適応できず、時代に遅れている方。
回答 6	脆弱的人。 ●弱い人間。	在经济高速增长时期生活在领薪生活中的五六十年代的男性，也就是所谓的烂叶子一族，经常被妻子嫌弃，如果是那样的话，我不认为他们能很好地照顾妻子。 ●高度経済成長期にサラリーマン生活を送った 50~60 代の男性、いわゆる落葉層が、妻に困惑させられている人は、いざという時に妻の世話を任せられるとは思えない。
回答 7	心比天高，身为下贱之感，被风雨打落枝头，心中始终向往着阳光枝头之人，残忍而现实，一片叹息。 ●心は空よりも高く、劣等感、風雨に打ちのめされ、心の中でいつも晴れ枝を慕う人は、残酷で現実的で、ため息をつくである。	高度经济成长期时过来的 5，60 岁的工薪阶层们，亦被称为落叶一族，常被说成是守着妻子过，如果是那样的话，我认为是没法照顾好他妻子的。 ●高度経済成長期にサラリーマン生活を送った 50~60 代の男性、いわゆる落葉層が、妻に困惑させられている人は、いざという時に妻の世話を任せられるとは思えない。
回答 8	无回答。	无回答。

	●無回答。	●無回答。
回答 9	退休后，没事做，粘着老婆的人。 ●定年後、何もすることがなく、妻にしがみつく人である。	粘着妻子的五六十岁退休男性。 ●妻にしがみつく 5.60 歳男性である。
回答 10	无回答。 ●無回答。	无回答。 ●無回答
回答 11	落汤鸡。 ●ぬれねずみである。	无回答。 ●無回答。
回答 12	惨上加惨。 ●泣き面に蜂、とてもみじめな状態。	无回答。 ●無回答。
回答 13	被困难打倒的事物。 ●困難に打ちのめされたものである。	在经济高速增长期，过着工薪阶级生活的五、六十多岁的男性是所谓的落叶族，因为老是被妻子说，所以根本不会照顾妻子。 ●高度経済成長期、庶民的な生活を送っていた 50～60 代の男性は、いわゆる落葉型で、妻に言われればなしで、妻の面倒を全く見ない。

付録2-7 「アンケート調査明細-古株」

古株	単独意味	文脈意味
回答 1	老员工。 ●ベテランスタッフ。	老员工。 ●ベテランスタッフ。
回答 2	前辈。 ●先輩。	前辈，资格老的人。 ●先輩、ベテラン。
回答 3	拥有长年的经验或经历，老资格。 ●長年の経験や実績、ベテラン。	老资历的女性社员之间关系很差，很头疼被卷入她们之间的勾心斗角。 ●ベテラン女性社員の関係性が非常に悪く、巻き込まれるのが困る。
回答 4	过期不用，一文不值。 ●期限が切れて使わない、価値なしである。	老手。 ●ベテラン。
回答 5	千年老铁树。 ●樹齢千年の鉄の木である。	老员工。 ●ベテラン。
回答 6	在公司中的老人，有经验的人。 ●会社のベテラン、経験を持つ人である。	老的女员工关系不好，被卷入斗争感觉很麻烦。 ●ベテラン女性社員の関係性が非常に悪く、巻き込まれるのが困る。
回答 7	古佛青灯，万事皆无之感。 ●古仏と緑のランプ、無の境地を感じる。	职场老女人们关系特差，斗来斗去，被卷入其中很是烦恼。 ●ベテラン女性社員の関係性が非常に悪く、争いが多く、巻き込まれるのが困る。
回答 8	古顔。 ●古い顔。	その集団に古くからいる人。 ●その集団に古くからいる人。
回答 9	有年纪，有阅历的人。 ●年齢や経験を重ねた人たちである。	有一定资历，思想复杂。 ●ある程度の年功序列と複雑な心境である。
回答 10	善于炒股的人。 ●良い投機家。	古株的女性员工们的关系很不融洽，卷入了纷争很麻烦。 ●古株の女性社員は仲が悪いので、争いに巻き込まれると面倒である。
回答 11	无回答。 ●無回答。	无回答。 ●無回答。

<p>回答 12</p>	<p>虽然旧，但是有价值。</p> <p>●古いけど、でも価値がある。</p>	<p>老员工。</p> <p>●ベテラン。</p>
<p>回答 13</p>	<p>有经验的老手。</p> <p>●経験を持つベテランである。</p>	<p>前辈女职员们关系不好，被卷入纷争中很困扰。</p> <p>●女性社員は仲が悪いので、争いに巻き込まれると困る。</p>

付録2-8 「アンケート調査明細-大和撫子」

大和撫子	単独意味	文脈意味
回答 1	<p>溫柔賢惠の女人。</p> <p>●優しくて貞淑な女性のこと。</p>	<p>女子礼仪。</p> <p>●女性のマナーである。</p>
回答 2	<p>賢良淑徳の女人形象。</p> <p>●穏やかで品がある女性のイメージである。</p>	<p>賢惠溫柔の女子应该做的事情。</p> <p>●穏やかで優しい女性がすべきことである。</p>
回答 3	<p>美丽的日本女性。</p> <p>●美しい日本女性のことである。</p>	<p>这项和服和小物件的免费租赁服务「大和撫子套餐」（3.7 个月的 2 套套餐），在下班回家的路上空手就可以去光顾非常的方便。</p> <p>●和服と小物の無料レンタルサービス「大和撫子プラン」（3 ヶ月、7 ヶ月の 2 つプラン）は、仕事帰りに手ぶらで気軽に立ち寄れる便利である。</p>
回答 4	<p>性格溫柔文静沉稳，并遵从三从四德品德高尚的日本女性。</p> <p>●穏やかで静かで落ち着きがあり、従順と美徳の三徳を守る日本女性である。</p>	<p>无回答</p> <p>●無回答。</p>
回答 5	<p>日本的某样传统事物。</p> <p>●日本のある伝統的なものである。</p>	<p>端庄，日式传统的，具有日式风格特点的。</p> <p>●穏やか、和風式伝統的、和風式特徴持つ。</p>
回答 6	<p>端庄优雅的女性。</p> <p>●凛々しく上品な女性である。</p>	<p>衣服和小物件儿不要钱的租赁服务“大和 套餐”（七个月份的两个套餐）方便工作完的人可以空手而归。</p> <p>●仕事が終わって手ぶらで帰れる方には、洋服や小物の無料レンタルサービス「大和プラン」（7 ヶ月の 2 つプラン）が便利である。</p>
回答 7	<p>石子小路木屐声，晨雾中渐行渐远的和服女子。</p> <p>●小石の道の下駄の音 朝霧に漂う和服の女である。</p>	<p>可以免费租借和服和小饰品的“大和女子套餐”（3 个月和 7 个月 2 种套餐），下班后就能去很是方便。</p> <p>●和服や小物飾りが無料でレンタルできる「大和女性プラン」（3 ヶ月・7 ヶ月の 2 つプラン）は、仕事帰りにとても便利である。</p>
回答 8	<p>日本女性の美称。</p> <p>●日本の女性に対する美称である。</p>	<p>日本女性の美称。</p> <p>●日本の女性に対する美称である。</p>

回答 9	<p>温和能干顾家的日本传统女性。</p> <p>●穏やかで有能で家庭を守る伝統的な日本女性のこと。</p>	<p>传统日本女性。</p> <p>●伝統的日本女性のことである。</p>
回答 10	<p>好像是日本一位有名的美女。</p> <p>●有名な日本美人らしい。</p>	<p>无回答。</p> <p>●無回答。</p>
回答 11	<p>美女。</p> <p>●美女。</p>	<p>无回答。</p> <p>●無回答。</p>
回答 12	<p>贤妻良母。</p> <p>●良き妻、良き母である。</p>	<p>精打细算的家庭主妇。</p> <p>●家計重視の主婦のことである。</p>
回答 13	<p>用于赞扬女性端庄秀丽。</p> <p>●凛々しく上品な女性を褒める用である。</p>	<p>免费租借和服和小物件的“大和抚子套餐”(3.7个月的2套餐), 下班后可以空手回去, 很方便。</p> <p>●和服や小物が無料でレンタルできる「大和撫子女性プラン」(3ヶ月・7ヶ月の2つプラン)は、仕事帰りに手ぶらで帰るのは便利である。</p>

第8章 命名論から見る中国語茶飲料と化粧品の商品名称特徴

8.1 茶飲料の商品名称について

世の中のすべての物がそれぞれの「呼び方」を有している。例えば、現代社会では、字を書く道具はまず「ペン」が想起される。それを「ボールペン」と呼ぶか「フェルトペン」と呼ぶかは必要に応じて決まる。また、花の例を言えば、「ひまわり」、「朝顔」、「バラ」など数多くの呼び方が挙げられる。「ボールペン」、「ひまわり」のように、我々は日常で物事に特徴を付けたり、区別したりするのに、それらにふさわしい呼び方を与えることが必要である。これらは名付け（ネーミング、命名³⁶）と呼ばれる。

本章の構成は、二つの部分からなる。第一部分では、日中両国における命名に関する先行研究を読み、これまでの先行研究を踏まえた上で、現在、中国で流行っている茶飲料³⁷の命名を考察対象とする。かつ、森（2015）で細分化した「表示性」、「表現性」の概念を用い、茶飲料に関する命名を多角的な視点から分析してみたいと考える。その上で、茶飲料命名に対する認知的な考察を試みる。第二部分では、化粧品ブランドのあだ名についての考察である。中国語茶飲料名に対する考察に続き、化粧品分野での商品名の収集や分析も行い、中国語における化粧品に関する呼び方の特性を確認していくことが考察の目的である。なお、各部分における先行研究、問題提起、研究目的、調査やまとめはそれぞれのところで記述する。

8.1.1 先行研究

命名については、様々な角度から研究されている。命名にどのような捉え方があるかを本節で確認してみよう。以下、8.1.2 では命名動機、命名の由来に関する日中両国の文献を見る。8.1.3 では、命名に対する認知的な考察に関する先行研究を見ることにする。

³⁶ 本章では、「命名」という用語を使うことにする。

³⁷ 本章では、茶原料が含まれるミルクティーや果実茶を考察対象にする。

8.1.2 命名動機

窪園（2008）では、日本における社名の由来について分析している。

日本での会社名の由来について、特に<人名>や<地名>に由来するケースが多いと指摘されている。例えば、イトーヨーカドー（伊藤+羊華堂）、スズキ（鈴木自動車<鈴木道雄）、カシオ（樫尾忠雄）など、日常と深く関わっている社名（ブランド名）が見られる。また、窪園（2008:120）では<地名>に由来する社名例も多く紹介されており、「地名に由来する社名は数多い。その多くは創業者の出身地や会社の所在地を元にしてている」と述べる。例えば、京セラ（京都セラミック）、オムロン（OMRON、京都の御室）、ヨドバシカメラ（新宿・淀橋）、ダイキン（大阪金属工業所）などの例がある。

それに加え、日本語で新しい名前が作り出される際には、六つの技法が存在していると窪園が提言している。詳しくは以下の通りである。

- 1、類音声を使った命名---江戸川乱歩（Edgar Allan Poe）、花王（顔）
- 2、混成語---カルピス（カルシウム×サルビス）、ダスキン（ダスト×ぞうきん）
- 3、短縮語---リハビリ（リハビリテーション）、さてん（きっさてん）
- 4、複合語の短縮---ジーパン（ジーンズ・パンツ）、ダイエー（大栄薬品工業）
- 5、頭文字語---Tokyo Denki Kagaku（TDK）、Ajinomoto General Foods（AGF）
- 6、逆さ言葉---ジュンク堂（工藤・淳→淳・工藤→淳工・藤）

上で取り上げた各社名例を再び見れば、確かにそれらの命名特徴はこの六つの技法（あるいは一部）に当てはまる。

また、張（2015）では、植物名に由来する服装のブランドについて述べる。

動物と同様に、植物は鑑賞性を持つという重要な特徴を有するものの一環として人々に重視されている。そのため、われわれが着る服装のブランドにも植物名が見られる。言葉の豊富な表現やそれに対する連想により、消費者にもいい印象をもたらす。張（2015）に挙げられている、植物名に由来する服装のブランド名を、以下の【表1】に示しておく（括弧内は必要に応じて筆者が付けた日本語訳である）。

【表 1】中国語における植物名に由来する服装のブランド名

植物名 (植物名)	象征意义 (シンボル)	服装品牌 (服装ブランド)
松 (松)	坚贞, 高洁, 永恒 (節操など固く守ること、高潔、恒久)	金钱松
竹 (竹)	正直, 孤高, 有节气 (正直、正義を守ること)	春竹, 声雨竹
梅 (梅)	超凡脱俗 (上品であること)	腊梅
菊 (菊)	坚贞, 孤傲 (節操をかたく守ること)	墨菊
莲 (ハス)	圣洁 (神聖で純潔)	碧莲, 阿依莲
牡丹 (ボタン)	富贵 (富貴)	黑牡丹
玫瑰 (バラ)	爱情 (愛情)	金玫瑰

上述の植物名の中、特に「松」、「竹」、「梅」が冬においてもたくましい生命力を持っているという特徴から、高潔な人格の象徴であることが中国人に認められている (張 (2015:109))。

以上の先行研究で分かるように、名前の由来、つまり命名活動は何らかの意味 (目的) によって行われている。あるいはビジネス面では一定の競争力があると見られ、命名活動が進んでいる。

8.1.3 命名の認知的な考察

これまでは名前の由来について見てきた。それに対し、命名を認知言語学の視点から捉えることも行われていて、特に命名に関するカテゴリー化理論は重要な話題になっている。ここでは、森岡・山口 (1985)³⁸、吉村 (1995) を発展させて森³⁹が論じている先行研究を引用する。

³⁸ 森岡健二・山口仲美 (1985) 『命名の言語学 ネーミングの諸相』東海大学出版社

³⁹ 森 (2015)、(2019)、(2020) を参考した。

所属する範疇を示すはたらきを表示力（示差性）、そのものの特徴を理解させるはたらきを表現力（表意性）と呼ぶとすれば、命名と同時に大量の名がこの二つのはたらきをもつということは、やはり不思議な現象と言わなければならない。

森岡・山口（1985:27）

吉村（1995）、固有名の「ふさわしさ」とは、対象独自の個別的な属性を明示しようとする意識、すなわち「表現性（expressiveness）」と、その属性先カテゴリーを明示しようとする意識、すなわち「表示性（representativeness）」との競合から生まれる人間の直感のひとつということになる。

吉村（1995：164）

上記の先行研究はカテゴリー化理論に基づく命名を明確に指摘したと言えるだろう。それらにより、「表示力」、「表現力」、「表示性」、「表現性」⁴⁰というキーワードが提出され、命名を巡ってカテゴリー性に焦点を当てるか、独自性に焦点を当てるかが注目されている。

それに加え、命名に対する「表現性」と「表示性」の研究をさらに発展させたのは森（2013）、（2015）、（2020）である。森（2013:89）では、「われわれの命名は「表示性」と「表現性」のバランスを考えながら行われている。」と指摘する。犬を例として、犬に「イヌ」を付けたら、表示性は限りなく高くなるが、他の犬との区別が付けられない。逆に、犬に「黒板」とか「消火器」という名前を付けてみたら、表現性が限りなく高くなることと引き替えに飼い主の常識が疑われてしまう。

また、森（2015）では、表示性・表現性概念の細分化・精密化が行われている。

表示性には、カテゴリー自体の名称を表示する場合もあれば、カテゴリーの特徴を表示する場合もある。また、カテゴリー自体とは本来関係ないが、それに属する個々

⁴⁰ 本章は吉村（1995）に従い、「表示性」と「表現性」という用語を採用する。

の名称の集積からそのカテゴリーに属するものの名称に共通するものとして抽出でき、結果的にそのカテゴリーの特徴となっているものもある。表現性の原初的な働きは、そのカテゴリーに属する別のものと区別することである。その多くの場合はそのものの特徴を利用しているのであるが、区別することと特徴づけることは分けて考える必要がある。

森 (2015:172)

森 (2015) によれば、錯綜している概念である「表示性」と「表現性」を以下のように整理することができる。まずは「表示性」を見てみよう。

表示性①、カテゴリー自体の名称を示すこと；銀行名の場合、「みずほ銀行」、「三菱UFJ銀行」など、銀行カテゴリーのような用例が存在している。

表示性②、カテゴリー自体の名称そのものではなく、カテゴリーの特徴を示すケース；例えば、洗剤の商品名として「ホワイト」があつて、それは汚れを落とすという洗剤の特徴から、汚れのない状態を意識させる「ホワイト」という名称が採用される。

表示性③、カテゴリーに属する名称であることを想起しやすい要素が存在し、そのカテゴリーに属することを想起しやすいこと；例えば、普段、乗用車の名前と音楽用語とは無縁であるが、本田技研が「バラード」、「コンチェルト」、「ジャズ」、「プレリュード」、「フィットアリア」、「クイント（クインテットの略）」、「ライフディーバ」と多くの乗用車の名前に音楽用語を採用したため、そのつながりが意識されやすくなっているようなケースがあげられる。表示性③はとても面白い現象であり、そもそも「乗用車の名前」と「音楽用語」はまるで「赤の他人」のように無関係であるが、使われる機会が多くなることに従って、だんだん人々に知られるようになる。まさに「元々地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になる」という魯迅の名言が思い出される。

次は「表現性」について見て行こう。

表現性①、対象の特徴をそのまま名付けに使用すること；例えば、黒い犬を「クロ」、白い犬を「シロ」と呼ぶ場合が当てはまる。

表現性②、中学校の学級名のように、「1組、2組、3組…」、「A組、B組、C組」として、区別するだけで、呼び方を付ける。これは区別する機能を持っていないながらも、その名称には特に特徴を表していない。

表現性③、カテゴリーの中で、名付けられる対象を区別する、または特徴づけを行うという意味ではなく、その名称がそのカテゴリーの名称の中での異質性を示すケース、犬に

「アリストテレス」、「ドラゴン」、「スター」のような名前を付ければ、犬らしくない名前として印象付けられる。この現象は、つまり森（2015）で述べられたように、表現性は高くなる一方、表示性は低くなってしまっているものである。かつ飼い主の常識が疑われる恐れもある。

また、表示性、表現性について、森（2020）では、森岡・山口（1985）、吉村（1995）の提示をうけ、森（2015）で題材とした米の品種名に具体的な事例（「みかん」、「梨」、「茶」、「リンゴ」、「桃」、「イチゴ」などの農産物を中心に）をさらに付け加えて説明が行われている。それとともに、「米」などの命名用例を用い、吉村（1995）の命名の認知モデル論と結びつけられている。詳しくは後の段で述べたいと考える。

以上、日本語の文献を確認してきた。中国語の文献においては、譚・雷（2020）が目される。譚・雷（2020）では、植物の命名に対する認知的な分析が行われている。

《現代汉语词典》（現代漢語辞典）第7版による植物名をコーパスとして、譚・雷（2020）は、カテゴリー化理論（基本レベルカテゴリー）を用い、隠喩や換喩の視点から中国語における植物名の言葉特徴、命名理由などを分析する。その一部分は以下のように述べられている。（下線は筆者による）

运用范畴化理论分析现代汉语植物名，发现其构词语素中的属语素多数来自基本层次范畴。

譚・雷（2020:41）

（訳：カテゴリー化理論を用いて現代中国語における植物名を分析する際、その名称構成の多くは基本レベルカテゴリーの名称に基づいて成立されたのである。）

《現代汉语词典》（現代漢語辞典）第7版⁴¹では、〈樹（木）〉（樹（木））、〈草〉（草）、〈花〉（花）、〈果〉（果実）、〈菜〉（野菜）など基本レベルカテゴリーに属する概念からなる植物名（〈白蜡树〉（トネリコ）、〈红木〉（マホガニー）、〈甘草〉（甘草）、〈报春花〉（サクラソウ）、〈奇异果〉（キウイ）、〈苜蓿菜〉（ヒユ））が多

⁴¹ 丸括弧内は筆者が付けた日本語訳である。

く見られる。これは森（2015）で提言された「表示性①」（カテゴリー自体の名称を示すこと）と合致している。

このような基本レベルカテゴリーに基づく命名構造はイメージメタファー（IM）表現にも見られると考える。鍋島（2011:123）では、「イメージメタファーはメタファーの中でも非常に感覚的なメタファーである」と述べられている。視覚的類似性が高いイメージメタファー表現の代表例として、「目玉焼き」は焼き卵のことを指している。面白いことに、「目玉焼き」は中国語では<太陽蛋>（太陽のような卵）と呼ばれている。イメージ的にはもっと柔らかい感じがする。なお、鍋島（2011:128）で取り上げたIM表現例である「すし詰め」は非常に込んでいる状態を表わす。これは中国語では普段<下餃子>（餃子の水に入れて煮込む）と言う。

実際に、これらの用例以外、イメージメタファー表現例の多くは基本レベルカテゴリーに基づいた命名構造であると考えられる。例えば、「シャツ」、「袖」、「ちょうちん袖」など、服に関する用語を見てみよう。もちろん、この場合は「シャツ」が上位カテゴリーに属し、「ちょうちん袖」は下位カテゴリーに属すると見なす。「ちょうちん袖」について、袖の形は丸くて、まるでちょうちんのようなため、IM表現例として鍋島（2011）で取り上げられた。これに対し、「袖」は基本レベルカテゴリーに属する。「袖」に「ちょうちん」を付け、もっと区別明瞭な命名になった。一方、「袖」に「ちょうちん」のみならず、「長」とか（長袖）、「半」とか（半袖）を付けることも可能である。こちらで分かるように、基本レベルカテゴリーに基づく命名活動は豊富である。

これと同じ、基本レベルカテゴリーに基づく命名現象は中国語においても珍しくない。人間の体（外見）を表わす際、「目がきれい」、「口が小さい」などの言い方が最も一般的であろう。一方、これらの「一般的な言い方」とずれている場合、新しい呼び方が生まれてくる。しかもこれらの新しい呼び方の多くはカテゴリー自体の名称が含まれている。以下の【表2】では、中国語における植物名に由来する身体部位名である。

【表2】中国語における植物名に由来する身体部位命名

中国語表現	日本語直訳	評価性
①蘑菇头	キノコの髪型	+ (可愛い髪型)
②凤梨头	パイナップルの髪型	- (ヤンキー髪型)

③瓜子脸	ひまわりの種の顔形	+	(細くてきれいな顔形)
④苹果脸	赤りんごの顔色	-	(ださくて真っ赤な顔色)
⑤柳叶眉	柳の葉の眉	+	(きれいな眉形)
⑥桃花眼	桃の花の目	+	(丸くてきれいな目)
⑦草莓鼻	いちご鼻	-	(にきびの鼻)
⑧大蒜鼻子	ニンニク鼻	-	(ニンニクのようなでかい鼻)
⑨樱桃小嘴	さくらんぼの口	+	(口が小さくて可愛い)
⑩萝卜腿	大根足	-	(足が太いこと)

上の【表2】では、植物名に由来する身体部位名（中国語の呼び方）を10挙げた。それに、これらの呼び方の評価性を分析してみた。これらの命名の評価性を見れば、偶然であるか、プラスの評価性とマイナスの評価性が半々になっている。ほかにも、植物名に由来する命名はあちらこちらで見られる。例えば、日本語の「シャワーヘッド」は形が「ハスの実」と似ているため、中国語では<莲蓬头>（ハスの頭）と呼ぶことがよく耳にする。また、中国語の<石榴裙>（ザクロのスカート）は、そのスカートはザクロの実のように赤くてきれいだから、女性のスカートに喩えられていることを古くから使われている。さらに、日中両国の間に共通している「キノコ雲」という命名はその形からなのである。

8.1.4 問題提起と研究目的

これまで見た先行研究によれば、中国語における命名に対する考察はまだその名称の由来あるいはその名称のカテゴリ一性にとどまっているような状態である。中国語の命名も日本語のように、更なる細分化する必要があると考える。なお、命名に対する特徴的な分析のみならず、命名認知モデルが成立できるかどうかは興味深いことである。

本章では、中国語における茶飲料を考察対象としている。

茶⁴²（お茶）は「茶の木 [=畑に植える、背の低い常緑樹。ツバキ科]」の若葉から作っ

⁴² 『新明解国語辞典』第5版による。

た飲み物である。お茶の種類やそれぞれの効果から人々に愛されている。それとともに、現代社会では、茶から派生した茶飲料は次々と現れてくる。そちらのほうがもっと人気がある（特に若者の間に）ようである。

茶は植物のツバキ科に属し、異なる茶を区別するのに、それぞれの呼び方がある。その呼び方は基本茶の種類によって作られている。例えば、緑茶、ウーロン茶、紅茶のいずれも「チャ」という植物から作られた。これに対し、派生された茶飲料の名称はより豊富である。茶飲料の名称の中、一見ですぐわかる名前もあれば、調べないとなかなか理解しにくい名前もある。茶飲料の名称は様々な形で現れていておもしろい現象になっている。

本章はひとまず中国大陸における茶飲料の名称を中心にして考察する。新しく作り出された茶飲料の命名表現はどのように現れるか、植物の茶とかかわりがあるのかを確認したい。また、茶飲料の名称は命名上に何か特別な手段を持っているか、あるいはどのような表現技法を有しているかを分析していきたいと考える。最後、茶飲料に関する命名表現は吉村（1995）、森（2020）で述べられている「命名認知モデル」と結びつけられるかどうか確認していきたいと考える。

8.1.5 調査

近年、お茶より改良された茶飲料はとても人気が高い。もちろん、茶飲料の出現は中国のみならず、ほかの国でもブームが起こっている。

この現象は日本では「タピオカブーム」、「ミルクティーブーム」とも言われている。なお、中国大陸では、タピオカミルクティーを<珍珠奶茶>（パールミルクティー）と言うが、これもメタファー表現の1種であると考えられる。タピオカミルクティーでは、タピオカを丸い形に作るが、これが「パール」に喩えられているからである。タピオカミルクティーはもちろん、お茶が含まれる果実茶も中国では大変人気になっている。これに従い、消費者にアピールするために、茶飲料会社はパッケージデザインのみならず、飲み物の名称にもかなり工夫している。

中国での茶飲料をメニューの構成から見ると、以下のような3つのパターンからなる。

(1) ブランド→ (2) シリーズ→ (3) 商品

まず、各茶飲料会社は自らのブランドを有している。それから、ブランドのブランチャとしていくつかのシリーズがある。最後に、シリーズのもとに具体的な商品が取り上げられ

ている。ブランドにせよ、シリーズにせよ、それぞれにそれぞれの名称がある。本章はブランド名、シリーズ名、商品名という3つのパターンから分析する。

8.1.5.1 調査データ

本調査の使用データは、中国のロコミアプリである<口碑 APP>⁴³を利用し、中国江蘇省南京市内における飲み物のランキング状況を調べた。<口碑 APP>というロコミアプリのビッグデータを利用し、2021年8月6日までの過去30日間⁴⁴で最も売れた飲み物のブランドの順位を統計し、その中のトップ10を抽出した。なお、本章の考察対象は茶原料が含まれる茶飲料であるため、単純な果汁飲料（ランキング3位）や茶原料のない飲料は考察対象から外すことにする。それから、各ブランドの注文システムや出前システムを利用して、9種のブランドのもとに、総括でシリーズ名を53個、商品名278個を集計した。以下の【表3】は茶飲料に関する名称の一覧であり、括弧内はそのブランドが所属する支店名である。

【表3】茶飲料に関する名称の展示

ブランド名	シリーズ名	商品名（部分）
老虎堂 TIGER SUGAR （德基店）	店长推荐； 虎纹黑糖超经典； 手打柠檬茶； 果茶很好喝； 虎式珍珠鲜奶茶	桃汽森林鲜果茶； 黑糖冻鲜奶茶； 柠檬精的反击； 蜜桃厚芝芝； 白桃乌龙鲜奶茶
熊姬手作茶物 （新街口店）	北海道的鲜奶麻糬； 宫崎水果自由； 鲜奶な会社； 超人气奶茶	星野红豆大福奶茶； 桃桃莓莓； 香印青提慕斯蛋糕； 熊姬全家福奶茶

⁴³ <口碑 APP>は中国のアリババグループより開発されたアプリケーションである。

⁴⁴ ランキング状況の更新は<口碑网>のビッグデータより30日間ごとに行われている。

<p>大北卡 (幕府西路店)</p>	<p>招牌新品; 醇香奶茶; 特调果茶</p>	<p>红玉牛乳全套; 原味奶茶; 蜜桃三重奏;</p>
<p>快乐柠檬 (南京新世界店)</p>	<p>当季新品; 招牌奶茶; 多肉果茶; 喝的蛋糕; 柠檬双打; 四季如春; 诱人奶盖; 快乐限定</p>	<p>爆打柠檬三果恋; 大满贯布丁奶茶; 葡萄柚粒芦荟绿茶; 半熟蛋糕珍珠奶茶; 快乐柠檬红茶; 四季春茶; 蜜韵红茶; 芒橙椰果恋绿茶</p>
<p>雅克雅思 (六合店)</p>	<p>奶茶; 黄皮果; 水蜜桃; 葡萄; 草莓; 蜜宝瓜; 神仙乳; 水果茶</p>	<p>慕尼黑; 黄皮正气茶; 芝士桃桃; 多肉黑金; 翡翠蜜宝; 抹茶冰骑士; 超级水果 Plus</p>
<p>甜荟奶霜茶饮 (江宁龙湖龙湾天街店)</p>	<p>暴捶柠檬; 给荔家族; 麻糬家族; 酸奶/乳酸; 鲜果奶茶; 招牌奶霜; 奶茶/鲜奶</p>	<p>暴捶香柠绿; 荔枝乌龙奶茶; 嘜嘜麻糬芋奶; 活力茫茫; 手摇瓜瓜 Pro; 茉莉毛尖; 宇宙大爆炸</p>
<p>春陽茶事 (虹悦城店)</p>	<p>口感系列; 鲜奶系列; 奶茶系列;</p>	<p>玫瑰甘露; 春阳乌龙鲜奶; 蜜香奶绿;</p>

	鲜果茶系列； 原茶系列	满橙红柚绿； 翡翠绿茶
茉沏 (万谷慧店)	人气种草； 鲜果系列； 奶茶系列； 冰激淋系列； 玛奇朵系列； 拿铁系列； 养乐多系列； 纯茶系列	绿了柠檬； 柠檬红茶； 豆乳红妍； 抹茶冰激淋； 红茶玛奇朵； 焦糖红茶拿铁； 养乐多绿； 阿萨姆红茶
米芝莲 (龙江新城市广场店)	利宾纳系列； 冻柠茶； 经典港饮； 米记奶茶； 优酪果系列	白桃利宾纳； 柠檬绿茶； 鸳鸯； 黑糖珍珠三兄弟； 雪山莓莓甘露

8.1.5.2 茶飲料の命名特徴

上述のように、茶飲料に関わる名称を提示した。実際に、ブランド名をはじめ、具体的な商品名まで、それぞれの命名動機あるいは命名特徴が見出される。主に「異国文化の影響」、「発音」、「比喻手法」という3つの面から特徴を見ることができる。

第一、「異国文化の影響」について、まずあげられるのはブランド名(<老虎堂 TIGER SUGAR>)あるいは商品名(<熊姫 bobii 奶茶>、<OREO 曲奇牛奶茶>、<超级水果 Plus>、<手摇瓜瓜 Pro>など)に英字が見られることである。現代社会では、異文化交流が深くなりつつある。中国語の表現に英字が混ざっているのも珍しいことではない。英字が混ざっている命名のすべてが物事の特徴を表しているわけではない。ただし、中国語茶飲料の名称に英字が入ると、何とか人々に高級感をもたらすかのかもしれない。それとともに、日本文化も反映することがある。異文化交流が進んでいるうち、日本文化の影響をうけて命名活動を行う現象はよく見られる。特に日中両語が混ざっていることが多い。例えば、ブ

ランド名の<熊姫手作茶物>は、日本語の「熊姫」や「手作り」からであり、可愛くて上品な感じがする。シリーズ名の<鮮奶な会社>、<超人気奶茶>などは、日本語の漢字を使っている。また、日本の人名、地域名を使った命名もある。<星野紅豆大福奶茶>、<宮崎水果自由>、<北海道豆乳麻糬>、<佐賀小丸子>などがあげられる。

第二、「発音」の面から見ると、まず、「同音異義語」に関する表現が見られる。シリーズ名の<給荔家族>、商品名の<桃汽森林鮮果茶>など、茶飲料の商品の詳細から言えば、前者は「ライチ茶飲料」、後者は「桃茶飲料」のことを指している。ただし、発音上は「同音異義」という技法を使っている。<給荔>は中国語の<给力>（しっかりしていること、役立つこと）をもとに、<桃汽>は中国語の<淘气>（腕白なこと）をもとに、作られたのである。発音が全く一緒だが、意味が完全に違う。「同音異義語」という現象はほかの言語にも存在していると思う。ちなみに、<给力>（しっかりしていること、役立つこと）は近年より流行っている新出語である。ほかにも、商品名の名称に<葡萄厚芝>（チーズチーズ）、<桃桃莓莓>（モモモモイチゴイチゴ）のような繰り返しの音が現れてくる。これは要するにオノマトペの効果と似ているようで、名称が発音しやすいため、消費者にとって覚えやすいのである。

第三、「比喩手法」を巡って見てみよう。茶飲料には「比喩手法」を用いて命名活動を行うのがよく見られる。例をあげれば、ブランド名の<快乐柠檬>（楽しいレモン）、シリーズ名の<麻糬家族>（餅家族）、商品名の<黒糖珍珠三兄弟>（黒糖パール三兄弟）などは基本人間を修飾する言葉であるにもかかわらず、茶飲料の名称に使われている。また、<抹茶冰淇淋>（抹茶アイスクリーム）、<茉莉毛尖>（ジャスミンの毛尖）などは、一見、茶飲料ではないが、実際に、それは飲料が使った材料の一部を使い、商品全体的の名称を表しているのである。つまり、これらの用例は換喩を使った命名だと思われる。

ここまでは茶飲料の命名特徴について述べた。次からは命名に関する「表示性」と「表現性」を巡って、引き続き茶飲料の名称をデータとし、分析してみたいと思う。

8.1.6 茶飲料の命名に関する「表示性」と「表現性」

本段階では、茶飲料におけるブランド名、シリーズ名、及び商品名を「表示性」と「表現性」の視点から分析してみたいと考える。

8.1.6.1 ブランド名の表示性

吉村（1995）が論じているように、「表示性」は所属先カテゴリーに重きを置くのに対し、「表現性」は対象独自の個別的な属性に重きを置くのである。本章における茶飲料の命名の中、ブランド名やシリーズ名はそもそも集団的な属性を持っているため、それらの名称もそのカテゴリーを明示する意図で作られたのである。言い換えれば、ブランド名やシリーズ名は「表示性」だけ持っていると考え。なお本章では、森（2015）での細分化された「表示性」を用い、ひとまず、ブランド名やシリーズ名の「表示性」を見て行こう。

先ほど示したようにブランド名を本章では9種取り上げた。「表示性」の細分化した概念に従えば、表示性①が最も分かりやすいと考える。表示性①はカテゴリー自体の名称を示すもので、茶飲料に関するブランド名の中では<熊姫手作茶物>、<甜荟奶霜茶饮>、<春陽茶事>がそれに該当すると考える。これらの3つのブランド名のいずれも茶飲料の名称がはっきりとしているからである。

これに対し、表示性②はカテゴリーの特徴を示すケースである。この概念に当てはまるのは<老虎堂 TIGER SUGAR>、<快乐柠檬>、<茉沏>という3つのブランド名だと考える。まず、茶飲料というカテゴリーの特徴を考えてみよう。飲料であるため、まず性質的に液体であることが思いつく。また、その商品のパッケージを触ると、触感的にホットであるかアイスであるか手で感じられる。さらに、茶飲料を飲んでみると苦いお茶の味と違って、茶飲料の多くは酸っぱくて甘い食感がする。この味こそ若者の間に大人気になった原因である。このような茶飲料カテゴリーの特徴をもとに、ブランド名を見てみたいと考える。<老虎堂 TIGER SUGAR>の<SUGAR>は、言うまでもなく、「シュガー」という言葉を使っていて、まさかこのブランドに属している飲み物はすべて甘いと表している。また、<快乐柠檬>というブランド名について、すでに述べた擬人法を用いたほかに、<柠檬>（レモン）という果物の名称が直接に茶飲料のブランド名に入っている。これにより、このブランドに属する茶飲料は酸っぱい果実茶であることが連想しやすくなる。

一方、残りの3種のブランド名<大北卡>、<雅克雅思>、<米芝莲>について、名称だけからみれば、茶飲料カテゴリーと関係づけ難いのである。つまり、表示性①、表示性②のみならず、表示性③の「そのカテゴリーに属することを想起しやすい要素」という性質も見当たらない。

8.1.6.2 シリーズ名の表示性

シリーズ名はブランド名と同じで、集団的な属性を持つため、それらの名称もカテゴリー全体的な特徴を表わすのである。したがって、ここからは茶飲料に関するシリーズ名も「表示性」の視点から検討していきたいと考える。

上述のブランド名の分類に従い、表示性①に該当するシリーズ名は確かに少なくないが、それほど多くもない。＜果茶很好喝＞（果実茶はとても美味しい）、＜醇香奶茶＞（香ばしいミルクティー）、＜鲜果鲜茶＞（新鮮な果物、新鮮な茶）のようなカテゴリー自体の名称を示すシリーズ名は19種であった。

これと比べ、表示性②のほうが21種であり、表示性①よりすこし多かった。例えば、＜喝的蛋糕＞（飲むケーキ）について、もちろんケーキ自体は飲めるわけではないが、わざわざ「飲む」と付け、ケーキが飲み物に入っているというイメージを与えている。それとともに、ケーキの甘さからその飲み物は茶飲料（ミルクティー、果実茶）であることが連想しやすいのである。また、＜神仙乳＞（仙人乳）というシリーズ名は、カテゴリー自体の名称は出していないが、「乳」（豆乳、牛乳）という言葉より、茶飲料のカテゴリーの特徴（液体であること）を表している。

なお、ブランド名の場合、表示性③に該当するブランド名は存在していないことがはっきりしているのに対し、シリーズ名の場合は判断に迷うケースがあると考えられる。例えば、果物名のままで名付けられたシリーズ名がある。＜水蜜桃＞（スイミットウ）、＜葡萄＞（ブドウ）、＜草莓＞（イチゴ）などがあげられる。確かに茶飲料の材料にこれらの果物が入っている可能性があるが、ただし、果物名だけ現れる場合、やはり果物カテゴリーに分類されてしまうと思う。茶飲料カテゴリーの要素として存在しているとは言いにくいかもしれない。もう一例挙げれば、＜四季如春＞（四季は春のよう）というシリーズ名は、表現自体は中国語の「成語」になっている。普段ある地域の気候を修飾する際によく使われている表現である。これに対し、お茶の中にも、＜四季春茶＞（四季春の茶）という商品名が存在している。そのため、＜四季如春＞という茶飲料のシリーズ名を見た人は、2つのパターンに分かれると思う。1つは、この＜四季如春＞（四季は春のよう）を見たら、ただの季節用語とみなす。もう1つは、＜四季如春＞（四季は春のよう）を見たら、＜四季春茶＞（四季春の茶）というお茶のことを連想することである。そうすると、＜四季如春＞（四季は春のよう）は「茶飲料カテゴリーに属することを想起しやすい要素」として

存在していると思う。

8.1.6.3 商品名の「表示性」と「表現性」

8.1.6.1 と 8.1.6.2 では、茶飲料に関する名称に対し、集団的な属性を持つ「ブランド名」と「シリーズ名」の表示性について見てきた。なお、具体的な商品名（下位カテゴリ）の場合、集団性を持つのではなく、独自の商品の特徴などを示すように名付けられている。この場合、商品名を「表示性」と「表現性」の両方から分析できると考える。

「ブランド名」、「シリーズ名」と同じく、商品名の場合も表示性①に該当するものがとても多く見られる。〈白桃乌龙鲜奶茶〉、〈双珠奶茶〉、〈茉莉绿茶〉、〈金桔柠檬茶〉など数多くあげられる。

次に、「カテゴリーの特徴を示す」商品名、つまり表示性②に該当するものが多少存在しているが、それほど多くない。おもに茶飲料カテゴリーの「甘さ」、「匂い」、「温度」を中心に名付けられたのである。例えば、〈焦糖红茶拿铁〉（キャラメル）、〈蜜香奶茶〉（香ばしい）、〈抹茶冰骑士〉（アイス）などの表現がある。

さらに、商品名における表示性③の用例を見てみよう。表示性③に関する商品名はほとんど見られないのではないかと考えていたが、調べてみると、いくつかの代表的な表現が存在していることがわかった。それらをまとめると、表示性はおもに、「電子製品用語」、「試合用語」、「音楽用語」という面から見られる。例えば、〈超级水果 Plus〉、〈手摇瓜瓜 Pro〉など、「Plus」、「Pro」を付けた商品名がある。実は、これらの表現は最初にスマートフォンなどの電子製品（iPhone Plus、Huawei Pro）から生まれたのである。また、〈柠檬双打〉、〈大满贯布丁奶茶〉の下線部の言葉はスポーツの試合用語である。〈双打〉は「ダブルス」のことを指していて、つまり茶飲料にトッピングが2種類入っているということである。さらに、〈大满贯〉は日本語では「グランドスラム」と言う。「グランドスラム」というのは、スポーツの業界で行われた世界大会にすべて優勝したことを指している。この用語は茶飲料の名称に使われると、茶飲料のトッピングの種類が豊富で食感がいいことを示す。追加して言えば、茶飲料にトッピングが3種類入っていることを〈蜜桃三重奏〉、〈鲜百香三重奏〉と名付けたケースがある。〈三重奏〉という言葉は日本語でもおなじ意味を有し、つまり、音楽に使われる用語である。これは茶飲料に使われると、トッピングの種類のこと指している。これまで述べた茶飲料の名称は、そもそも茶飲料カ

テゴリーと無関係だったが、使われる機会が増えてくるに従い、茶飲料カテゴリーを想起させるようになっているのである。

以上は商品名から見られた「表示性」について検討してみた。これに対し、吉村（1995）で述べられたように、「表現性」は対象独自の特別な属性を明示するという点から、茶飲料の個体（具体的な商品）まで名付けられた商品名に「表現性」がより一層明白であるはずだと考える。しかしながら、茶飲料の商品名から見る限り、「表現性」を持つ商品名はそれほど多くないと分かった。それでは、表現性①「対象の特徴をそのまま名付けに使用する場合」に関する商品名を見てみよう。

本章で取り上げた 278 個の商品名の中、明らかに表現性①に属するのは確かに見つからなかった。ただし、森（2015:170）で提言されたように、メタファーの使用によれば、表現性①と見なされる用例が僅かある。例えば、＜黒糖珍珠三兄弟＞（黒糖パール三兄弟）というのは、糖分が高い黒糖タピオカの他に、プリン、あずきも入っている甘い茶飲料のことを指している。また、飲食関連（火鍋、茶飲料など）に、＜鴛鴦＞（オシドリ）という言葉はよく目にする。茶飲料の＜鴛鴦＞の場合は、コーヒーとミルクティーとそれぞれ半分ずつであることを指している。日本語では表現性①が商品名に多く見られる（早生、なつみず、晚三吉、夏緑）のに、中国語の茶飲料の商品名について、この点で明らかに差が出てくる。この現象が生じた最も重要な原因は中国語の構造の特性であると考えられる。前述のように、茶飲料の特徴と言えば、＜甜（的）＞「甘い」、＜酸（的）＞「すっぱい」、＜涼（的）＞「冷たい」、＜香（的）＞「香ばしい」などが想起される。しかしながら、これらの茶飲料の特徴をそのまま名付けに使用されると、茶飲料の名称は極めて短縮されたものになってしまい、その商品はいったい何なのか区別が出来なくなり逆効果となってしまう。

具体的な商品名に対し、メタファーの使用によって、その商品の特徴を示す（表現性①）とともに、名称の構成要素からその商品が茶飲料カテゴリーの下位カテゴリーであることも分かりやすくなる。つまり、表示性②と表現性①との間に類似性を有することを提示している。

一方、表現性②「単に区別する機能を持ち、その名称の特徴を表していない」については、茶飲料における商品名には見当たらなかった。

最後に、表現性③「名称がそのカテゴリーの名称の中での異質性を示すこと」については、その例として、＜宇宙大爆炸＞（ビッグバン）、＜慕尼黑＞（ミュンヘン）、＜伦敦

霧> (London Fog)、<港式丝袜> (香港式のストッキング) などが挙げられる。これらの名称は単独で用いられており、どうしても茶飲料の名称と結びつけられないが、個性的な感じや異質性を持つため、より印象を深めている可能性がある。

8.1.7 まとめ

以上で「ブランド名」、「シリーズ名」、「商品名」という三つの部分を巡って、中国語茶飲料に関する名称の「表示性」と「表現性」を見てきた。「ブランド名」、「シリーズ名」は本来「集団的な属性」を持っているという点から、それらの名称の「表示性」のみ考察した。なお、「商品名」については、「表示性」と「表現性」の両方から分析することができた。具体的な用例数については、以下の【表4】に示す。

【表4】中国語茶飲料に関する名称の「表示性」と「表現性」

	ブランド名 (9種)	シリーズ名 (53種)	商品名 (278種)
表示性①	3	19	125
表示性②	3	21	12
表示性③	0	0 ⁴⁵	6
表現性①	---	---	0 ⁴⁶
表現性②	---	---	0
表現性③	---	---	4

上記の【表4】からわかるように、本章で取り扱ったデータでは、「ブランド名」、「シリーズ名」の場合、表示性①及び表示性②に該当する用例数はそれぞれほぼ一緒である。集団的な属性を有する「ブランド名」、「シリーズ名」の命名については、カテゴリー自体の名称だけではなく、カテゴリーの特徴を示すという目的で名付けられたことも明らか

⁴⁵ 本章では、判断に迷うケースを「表示性③」に分類しないことにする。

⁴⁶ 本章では、メタファーの使用によれば、表現性①に該当する用例を「表現性①」に分類しないことにする。

に多く見られる。これに対し、「商品名」の場合、表示性②に該当する用例数は表示性①の1/10しかない。つまり、中国語茶飲料の「商品名」には、カテゴリー自体の名称を入れて名付けるのが原則である。

また、「表示性」と「表現性」の両者を比べると、「表示性」に該当する用例数は圧倒的に多いことが分かった。「表現性」を振り返って見てみよう。例えば、中国語茶飲料の「商品名」を直接に「甘い」、「香ばしい」（表現性①:対象の特徴をそのまま名付けに使用する）にされたら、数多くの茶飲料商品の区別ができなくなって、商品間の競争力ももちろん失ってしまう。同じように、例えば、商品の名称が「1番」、「2番」のようになったら、茶飲料商品の名称だけで「何千番」まで付けられる必要がある（表現性②）。そうすると、命名活動は余計複雑になってしまう。なお、表現性③に該当する用例は少し存在している。運営者がわざわざ商品名の異質性を利用して消費者に印象づけるというのは重要な点なのであろう。

8.1.8 茶飲料の命名モデル

森（2020）では、以下のように述べられている。

命名論を認知言語学のなかで展開することにおいて、吉村（1995）の試みは重要な位置を占める。そこでは2つの考え方が提起されている。1つは、森岡・山口（1985）を発展させ、命名における表示性と表現性という概念を提示していること。もう1つは、Lehrer（1992）を承け、命名に働くフレーム知識を、対象の持つ属性とドメイン内のリスト間に認められる共有属性の照合を可能にするような知識であるとして、命名認知モデルを提案したことである。

森（2020:244）

ここでは、吉村（1995）、森（2020）を踏まえた上で、上の先行研究の2つ目の観点をめぐって、茶飲料の命名モデルについて考察を試みる。

吉村（1995）では、米国の「車名」を例として、認知上の命名モデルについて説明された。米国では、「インパラ」という車名が実在する。この命名モデルが表しているのは、車の持つ属性の1つである「スピード」が、同じく「スピード」という観点から動物を見

たときにふさわしい「インパラ」という動物名によって、「ふさわしく」表現されているということである（吉村（1995:174））。

これに対し、中国においても車の車名に「スピードの早い動物名」が多く見られる。例えば、外車である<路虎>（LAND ROVER）、<宝马>（BMW）、<捷豹>（Jaguar）、<悍马>（Hummer）など、中国語の訳のいずれも「スピードの早い動物名」がついている。なお、中国国産の車でも、<宝骏>（BAOJUN）、<猎豹>（LEOPAARD）という「スピードの早い動物名」が見られる。ほかの一部の外車名は音訳となって、中国語の訳には「スピードの早い動物名」が見られなくても、その車名のロゴには「スピードの早い動物像」がついている現象は珍しくない。「LAMBORGHINI」、「Ferrari」、「PORSCHE」、「MUSTANG」、「ASTON MARTIN」、「PEUGEOT」などはその代表例である。やはり道路で走っている車の姿が動物の走っている姿と繋がっているのである。

引き続き、森（2020）では、命名モデルについて、米の例を取り上げられた。

米に品種名をつけるに当たっては、「天候」、「天体」、「季節」などいくつかのドメインが想定される。この中で、米の属性として<白い>がピックアップされたときは、候補となるドメインの中から天候ドメインが観点化（選択）され、観点化属性が適合する「ゆき」が選択される。「淡雪こまち」、「里のゆき」、「スノーパール」、「つぶゆき」、「なごりゆき」…といったものがそうして名付けられた品種名である。

森（2020：252-253）

同じように、「光る」という米の属性がピックアップされた場合、「一番星」、「大地の星」、「つづみ星」などの品種名が森より取り上げられている。

上述の命名モデルを用いて、茶飲料の外観から、「色」が注目されているということを考えてみよう。

この場合は「アクセサリ」ドメインを選ぶことが可能である。それに関する商品名は<手打香柠红宝石>「赤い宝石」、<红玉牛乳全套>「赤いヒスイ」、<翡翠绿茶>「ヒスイ」、<黄金珍奶>「黄金」、<金钻凤梨黄皮果>「金、ダイヤモンド」などが挙げられる。これによれば、茶飲料における商品名の一部は命名モデルに適用するようである。

8.1.9 おわりに

8.1 の第一部分では、日中両国の先行研究をもとにして、中国語における茶飲料の名称に関する考察を行った。茶飲料の名称は「ブランド名」、「シリーズ名」、「商品名」という3つの段階からなる。本章は対応する段階での名称の表示性や表現性を巡って検討してみた。そのなかで、「ブランド名」、「シリーズ名」は本来集団性を持つため、各名称に表示性における存在状況を確認した。一方、独自性を持つ「商品名」については、表示性と表現性の両方からの分析を行った。結果的に、茶飲料の名称においては、表現性を有する商品名より表示性を有する商品名のほうが多いということが分かった。

また、吉村（1995）、森（2020）で提示された命名モデルをうけ、茶飲料における商品名を命名モデル理論と繋げてみたが、代表例はあまり多くなかった。今後、ほかの分野での名称の収集や分析も必要であると考ええる。

8.2 化粧品のあだ名について

8.1 に加え、8.2 では、化粧品の名称、あだ名を巡って検討してみる。まずは関連する先行研究について以下に触れる。

窪菌（2008）では、「商品名」、「組織名」を紹介している。

最初は、コーラの名称である。

Coca Cola は今では世界的な飲み物であり、また企業名でもある。coca と cola を並べてできた名前であるが、これらはともに木の名前で、Coca Cola は「コカインの原料となる coca の木の葉と、cola の木の抽出物から作られた飲み物」という意味を持つ。発音上は [k] の音で頭韻を踏む。同じように頭韻を踏む商品名、組織名に次のようなものがある。

Dunkin Donuts(ドーナツのチェーン店)

Kit Kat(チョコレート菓子)

Krispy Kreme Doughnuts(ドーナツのチェーン店)

Ku Klux Klan(アメリカの政治秘密結社)

Penny Press (19世紀のアメリカで刊行された大衆向けの新聞)

Penny Press には次のように頭韻を踏む宣伝もある。

Penny Press means puzzle pleasure.

窪菌 (2008 : 24-25)

これまでの命名に関する研究では、飲食面を巡った命名に対する分析が主であった。8.1で述べている茶飲料名を含め、和菓子、氷菓、せんべいなどの菓子類の命名も研究対象として分析されている。

藤原 (2019) では、プロトタイプやイメージスキーマなどの認知意味論の概念を理論的基盤として、日本の食べ物の名付け (ネーミング)⁴⁷の背景にある認知機能と意味構造を明らかにすることが目的とされている。そこでは、面白い表現例が挙げられている。例えば、同じパンでも顕現的特徴によって、ネーミングの違いが存在する。「メロンパン」は外見的特徴である丸い形やマスクメロンの表面の筋などがネーミングにおいて表現されている。一方、「あんパン」や「クリームパン」は中身の餡子やカスタードクリームがネーミングの由来である。これは中身の具材にフォーカスを当てそれが顕現的特徴となったネーミングである。これらは確かに中国語でも同じ言い方であるとされている。ほかに、「メロンクロワッサン」、「プリンどら焼き」、「どら焼きプリン」などの食べ物の分析を通して、プロトタイプは固定されたものではなく、新しい要素が加わると拡張していくと結論を出された。また、プロトタイプを構成している既存の要素を差し引くことによって成立する「シャリ抜き」、「ツユ抜き」などのネーミングも藤原 (2019) では分析されている。

福留・松浦 (2022) では、「和菓子は、伝統的なものから日々創作される新しいものまで多種多様に存在する」と述べている。それぞれの種類を巡る分類も様々である。例えば、餅物やあん物等の「材料分類」、蒸し物、流し物等の「製法分類」、平なべ物、オープン物等の「製造器具分類」などの分類方法が挙げられている。

⁴⁷ 「命名」と同じ意味を指す。

また、福留・松浦（2022）では、114点の和菓子名を分析した上で、4つの語形成のタイプに分けられている。タイプの点数順を言えば、最も多かったのは「X+種属名型」（栗最中、抹茶最中のような「X+最中」）である。2番目は「単独X型」（銀杏、八重桜など）で、次に「種属名型」（羊羹、おはぎなど）で、最後は「X+Y+種属名型」（栗蒸し羊羹）の1点のみであった。さらに、「X+種属名型」、「単独X型」に関する菓子名の比喩的命名の考察も行っている。

その上で、まとめとして「語形成の要素であるXと種属名のそれぞれにおいて、辞書的意味として分かりやすいものと百科事典的知識が必要とされるものが連続的に存在する。」
「命名において、3つの比喩的命名の違いや、百科事典的知識による個人レベルの想起の違いが関与する。」と福留・松浦（2022）は主張している。

さらに、清海（2022）では、ネットスーパーのデータを活用し、「氷菓」と「せんべい」の売れ筋商品の表記について、パッケージ上で顕著な表示が調査されている。「氷菓」と「せんべい」の商品の見られる表記に関する共通点（商品パッケージには、情報を伝えるために、複雑な表記が避けられている）と相違点（ローマ字を含む例が、氷菓は全体の56%で、せんべいは全体の4%のみであった。一方、漢字を含む例は、せんべいが全体の74%であったが、氷菓は全体の18%に留まった）について述べられている。

本節では、中国語茶飲料名に対する考察に続き、化粧品分野での商品名の収集や分析も行い、中国語における化粧品に関する呼び方の特性を確認していくことを考察の目的とする。

一見、茶飲料と化粧品とまったく関係のないようであるが、実際には、これらの両方も植物と関わっている。既に述べたように、茶飲料は字義通りに茶の葉などで使った飲み物である。これに対し、化粧品といえば、「化学加工」を連想しやすい一方、多くの化粧品は植物成分がベースで作られたのである。特に中国における「植物精華が非常に豊富だ」、「草木精華がリッチだ」というような化粧品に関する広告の台詞がよく耳にする。時代の変遷につれ、化粧品の発展も大きく変化してきた。現代社会では、男女を問わずに、普段のスキンケアでは少なくとも洗顔料、保湿（乳液）ぐらいは使っていると思われる。なお、化粧品の商品名には、植物あるいは植物の特性と関連あるかを確認していきたい。したがって、「化粧品」に対する辞書解釈は以下となる。

「化粧品」――化粧に用いる、各種のクリーム・おしろい・ほお紅・口紅・香油・香水

など。

『新明解国語辞典』第5版

「化粧品」――化粧に用いる品。クリーム・白粉・紅・洗顔材の類。

『広辞苑』第5版

辞書解釈のように、「化粧品」という概念はかなり広範囲である。ここでは、スキンケアないしメイクアップ用のすべてを「化粧品」カテゴリーに入れることにする。

8.2.1 考察対象

現代社会では生活水準の向上とともに、中国人国民の美意識も日々重視されるようになってきている。当然ながら化粧品へのニーズも高まる一方である。なお、様々な化粧品の中で、化粧テクニックが高いと評価される日本系、及び欧米系などの化粧品のほうがより中国人に好まれるようである。日本を例にすると、2020年の初め頃まで（新型コロナが爆発したまで）は、日本へ旅行する中国人がたくさんいた。日本のデパートやドラッグストアも空港の免税店もどこでも中国人の観光客の姿が見られた。「爆買」という言葉もその時から生み出されたらしい。「化粧品」は必ず中国人観光客の買い物リストに記入されている。それとともに、異なる化粧品に対していろいろ新しい呼び方⁴⁸も名付けられた。そもそも各化粧品に名前を有しているのに、わざわざそれらに「あだ名」をつけてあげたのはなぜであろうか。また、各あだ名表現に何か認知的な知識が潜んでいるのではないかという点について、本節で検討してみる。

本考察で取り上げる化粧品の用例は、中国人の間に人気が高く、中国人にとっても馴染みのある日本系、欧米系の海外ブランドである。

⁴⁸ 中国人により化粧品に対する新しい呼び方を「化粧品のあだ名」（またはあだ名）と呼ぶことにする。

8.2.2 データ収集

本考察でのデータ収集については、筆者の日常生活経験に基づいて把握している「化粧品のだ名」は数に限りがあるため、さらに用例を増やせるように、中国の SNS（ウェイボーWEIBO）を用い、「人気化粧品ランキング」、「人気化粧品のだ名」などをキーワードとして検索を行った。その結果、ある程度の情報を得ることができた。それらの中で判断に迷うケースに対しは、化粧品販売店の従業員に尋ねることにした。

なお、本考察では、日本及び欧米より中国へ輸出された各ブランドの化粧品（いわば海外ブランド、海外化粧品）を「化粧品ブランドに対する中国語のだ名」（化粧品の上位カテゴリ）と「化粧品品目に対する中国語のだ名」（化粧品の下位カテゴリ）と二つのパターンに分けることができるので、その二つを分けて示すことにする。詳しくは【表 5】と【表 6】にまとめる。

【表 5】化粧品ブランドに対する中国語のだ名

ブランド	中国語におけるのだ名	日本語試訳/直訳
B.A	黒 BA	ブラックバー
CHANEL	香奶奶	香ばしいおばあちゃん
Clé de Peau Beauté	剪刀牌/CPB	はさみブランド/CPB
LAMER	腊梅	ろう梅
SHISEIDO	许三多	許三多（人名）
Yves Saint Laurent	杨树林/YSL	楊樹林（人名）/YSL

【表 6】化粧品品目に対する中国語のだ名

ブランド	対応品目	中国語におけるのだ名	日本語試訳/直訳
Bobbi Brown	ハイライト	五花肉	バラ肉
Christian Louboutin	口紅	萝卜头	大根のヘッド
CLARINS	化粧水	绿水	緑の水
Clé de Peau Beauté	美容液	手榴弾	手榴弾
Cosme Decorte	美容液	小紫瓶	小さい紫の瓶

Darphin	美容液	小粉瓶	小さいピンク色の瓶
Estee Lauder	クリーム	白金面霜	プラチナクリーム
Estee Lauder	美容液	小棕瓶	小さい褐色の瓶
GIVENCHY	口紅	小羊皮	羊の皮
Helena Rubinstein	美容液	绿宝瓶	緑の宝の瓶
LANCOME	美容液	小黑瓶	小さい黒の瓶
L'OREAL PARIS	クリーム	大红罐	大きい赤い缶
MCA	口紅	子弹头	弾丸のヘッド
OLAY	美容液	小白瓶	小さい白い瓶
SHISEIDO	美容液	红腰子	赤い腎臓
SHISEIDO ANESSA	日焼け止め	小金瓶	小さい金色の瓶
SHISEIDO	日焼け止め	白胖子	白いでぶ
SHISEIDO	日焼け止め	蓝胖子	青いでぶ
SK II	マスク	前男友面膜	元彼マスク
SK II	クリーム	大红瓶	大きい赤い瓶
SK II	美容液	小灯泡	小さい電球

8.2.3 データ分析

上の【表5】と【表6】は化粧品に対する中国語でのあだ名を上位カテゴリーと下位カテゴリーに区別した。それでは、各あだ名の特性を見てみよう。

8.2.3.1 化粧品ブランドに対する中国語のあだ名

8.1.2 では、「日本語で新しい名前が作り出される際には、六つの技法が存在していると窪園（2008）が提言している」と述べた。これを参照すると、【表5】の化粧品ブランドに対する中国語のあだ名の場合、相違する部分が多少存在している。まず、六つの技法の中で、「類音声を使った命名」と「頭文字語での命名」という技法は化粧品のあだ名にも見られる。

(1) 類音声を使った命名

「類音声を使った命名」として、「CHANEL」、「LAMER」、「SHISEIDO」が挙げられる。ブランドの元の発音に従い、似ているような中国語の発音であだ名をつけたのである。例えば、「CHANEL」は本来、〈香奈儿 (XIANG NAIER)〉という中国語の音訳になっているが、いつの間にか〈香奶奶 (XIANG NAINAI)〉というあだ名も付けられ、発音上はあまり変わらないが、イメージ的にはこのブランドの価値や大切さが感じられる（お年寄り（おばあちゃん）に丁寧にする必要があるからである）。かつ、〈香奶奶 (XIANG NAINAI)〉というあだ名だと、「CHANEL」は若者からお年寄りのおばあちゃんまでも見えそうな印象を消費者にもたらす。また、「LAMER」は中国語の〈腊梅〉「ろう梅」と呼ばれ、このことばの表現として、視覚上は「植物」と関わっている。これは中国語の発音である〈腊梅 (LAMEI)〉に基づいて名付けられたのである。梅花は冬に咲く花で、美しくてたくましい品格の喩えにもよく使われている。こうなると、「LAMER」という化粧品は〈腊梅 (LAMEI)〉のように、人々に美しいイメージを与えてくる。さらに、世界で人気が溢れている老舗企業「SHISEIDO」に対する中国語のあだ名は面白い表現である。「SHISEIDO」のあだ名である〈许三多 (XU SANDUO)〉はやはり発音面での考慮から出発したのである。〈许三多 (XU SANDUO)〉は中国人気ドラマの主人公の名前であり、架空な人物でありながらもその人物の真面目で粘り強い性格は観衆たちに印象深い。これにより、「SHISEIDO」傘下の商品・化粧品の質はドラマ主人公への評価、いい評判と同じように消費者に認められていると考えられる。

(2) 頭文字語での命名

(1)に加え、「頭文字語での命名」については、【表5】のデータでは、「Clé de Peau Beauté」、「Yves Saint Laurent」が挙げられる。「Clé de Peau Beauté」と「Yves Saint Laurent」の頭文字語の略称はそれぞれ英字の「CPB」、「YSL」となり、これらの略称の言い方は中国においても消費者に使われることがある。ただし、英字の略称表示なので、中国語のあだ名であるとは言えないと考えられる。なお、それらのブランドには別の中国語のあだ名も有している。例えば、「Clé de Peau Beauté」は〈剪刀牌 (はさみブランド)〉とも呼ばれている。

【図1】のロゴはその反映である。つまり、このブランドの化粧品名の上にあるロゴは「はさみ」の形と似ているため、「はさみブランド」が生まれたわけである。したがって、このあだ名を次に述べる(3)「外観のデザインと色による命名」のほうにも分類できると考

える。いわば【図1】の化粧品の外部包装のデザインによって作ったあだ名である。また、「Yves Saint Laurent」の略称である「YSL」から、中国語のあだ名〈楊树林（楊樹林）〉**が**つけられた。このあだ名を見て、樹木とも関係あるのかと疑問を持つ人がいるかもしれないが、実はこれは中国のお笑いタレントの名前（人名）である。中国語の発音では〈楊树林（YANG SHULIN）〉となり、ちょうど英字の頭文字語の略称と同じである。海外化粧品ブランドの頭文字語の略称によりさらに中国語のあだ名を作り出したのは異なる言語間に相互影響している証明だと言えよう。



【図1 剪刀牌 はさみブランド】

(3) 外観のデザインと色による命名

(2) で述べたように、「Clé de Peau Beauté」の中国語のあだ名である〈剪刀牌（はさみブランド）〉は「外観のデザインと色による命名」に当てはまる。また、もう1例として、日本のブランド「B.A」は、中国の消費者によく〈黑BA（ブラックバー）〉と呼ばれるが、「B.A」ブランドにおける一番印象深いのはその真っ黒な包装で、それがあだ名の由来である。

以上のように、化粧品ブランドに関する中国語のあだ名を3つの視点から見てきた。これに対し、日本語の場合では、欧米系の化粧品に対する呼び方はやはり「元発音」に従うことが多い。例えば、「CHANEL」を「シャネル」、「GIVENCHY」を「ジバンシィ」、「LANCÔME」を「ランコム」などと「音読み」だけであり、あだ名をつけることはあまり見られない。次の段では、化粧品の具体的な品目を巡って、それらの与えられたあだ名を(1) 外観のデザインと色、(2) 本体の特徴、(3) 機能効果、(4) 包装素材という4つの面から化粧品のあだ名の特徴付けを見ていく。より直感的に見られるように、次段では、一部の化粧品

品目の画像を提示する⁴⁹。

8.2.3.2 化粧品品目に対する中国語のあだ名

(1) 外観のデザインと色による命名

化粧品ブランドと同じように、化粧品品目の場合でも、「外観のデザインと色による命名」は存在している。【図 2】と【図 3】はその代表の一部である。【図 2】は、「SK II」ブランドにおける美容液である。真っ白で輝いたこの商品の瓶にさらに電球の形の印象が加わり、中国語の消費者に〈小灯泡（小さい電球）〉と呼ばれている。この美容液の美白効果は電球の光のように輝いていることと呼応する。【図 3】は、あまり美しいあだ名ではないと思われるが、化粧品外観の形も色も確かそのあだ名〈红腰子（赤い腎臓）〉に当てはまる。本考察のデータによれば、外部のデザインあるいは包装の色と関係している化粧品のあだ名はほかに「Christian Louboutin」の口紅〈萝卜头（大根のヘッド）〉、「MCA」の口紅〈子弹头（弾丸のヘッド）〉、「SHISEIDO」の日焼け止め〈白胖子（白いでぶ）〉など合計 16 件が挙げられる。

(2) 本体の特徴

「Bobbi Brown」〈五花肉（バラ肉）〉や「CLARINS」〈绿水（緑の水）〉は化粧品本体の特徴からつけられたあだ名である。【図 4】を見てみよう。【図 4】のハイライトを中国語では「バラ肉」と呼ばれ、この本体は赤と白の色がバラ肉の赤身や白身と類似性を有しているからである。また、「CLARINS」の化粧水も同じように、本体の液体が緑色になっているため、そのまま〈绿水（緑の水）〉と呼ばれるようになった。

(3) 機能効果

化粧品品目の中で、使用の機能効果によるあだ名付けは 2 件ある。1 つは「SK II」のマスク〈前男友面膜（元彼マスク）〉であり、もう 1 つは「Estee Lauder」のクリーム〈白金

⁴⁹ 関連する商品の画像の展示について、各ブランドの公式サイトを参照した。

面霜（プラチナクリーム））である。前者は、このマスクを一回でも使ったら、元彼氏を後悔させるほど⁵⁰の使用効果が出てくるという「大げさ」な「うわさ」が流れていることによって名付けられたものである。また後者は化粧品の外観がプラチナ色ではないし、中身も素材もちろんプラチナではない。ただし、このクリームを使うと、プラチナのような使用価値があるという点があだ名付けの理由である。

(4) 包装素材

最後に、「包装素材」によるあだ名付けを見てみよう。本考察ではこれに該当するのは1件のみで、つまり「GIVENCHY」というブランド傘下の口紅である。普通、口紅のケースがプラスチックで作られていることが多いに対し、この口紅のケースは動物の羊の皮で作られているようだという点から、〈小羊皮（羊の皮）〉と呼ばれるようになった。



【図2 小灯泡 小さい電球】



【図3 紅腰子 赤い腎臓】



【図4 五花肉 バラ肉】

8.2.4 まとめ

中国語茶飲料名の考察に続き、本節では、日本系、欧米系化粧品（ブランド或いは具体的な品目）に対する中国語のあだ名をも分析した。化粧品に関するあだ名付けの動機づけは様々な面から見られる一方、化粧品は植物成分がベースで作られたにもかかわらず、ブランドの本来の名前も、ブランドを巡るあだ名も植物の名称とあまり関係ないようであった。8.2.2 で挙げた用例の中では、僅か2件の化粧品のあだ名だけが植物と繋がっている

⁵⁰ 「こんなかわいい恋人なのに、分かれたくないなあ」というような後悔の気持ちを出させること。

と考えられる。それは化粧品ブランドである「LAMER」〈腊梅（ろう梅）〉及び化粧品品目の口紅である「Christian Louboutin」〈萝卜头（大根のヘッド）〉の二つである。

なお、本考察で取り上げた化粧品のあだ名の中では、「外観のデザインと色による命名」が最も多くを占めている。【表1】は2件で、【表2】は16件で、合計18件である。これは藤原（2019）の述べる「外見上の特徴は見ればすぐ認知できるので、顕現特性として認知しやすく、ネーミングとしての焦点が当たりやすい」と合致している。また、福留・松浦（2022）で言及されている「百科事典的知識」が命名に関与しているという点については、〈许三多（許三多）〉や〈杨树林（楊樹林）〉などの化粧品のあだ名が当てはまる。これらのあだ名は中国のタレントに関する背景的な知識がなければ、なかなか想像し難いのではないだろうか。

総括的に言えば、化粧品対す中国語のあだ名について、それほど美しい呼び方ではないと思われるものが比較的多いということになるが、「あだ名」の定義づけに相応するかもしれない。同じものを指しているのに、対立したイメージスキーマこそ、消費者にとっては、よりインパクトが強い。

藤原（2019:14）においては、アンケート9（b）について、以下のように設問がなされている。

「どら焼きプリン」と聞いて、あなたはどんな食べ物を想像しますか。

- ア プリンが挟んであるどら焼き 39名
- イ どら焼きが入っているプリン 46名
- ウ その他 15名

上述のアンケートに対する回答項目について、筆者個人の直感では、「どら焼きの形をしたプリン」が頭の中に浮かぶが、これがメイン項目として回答に入っていなかったことに驚いた。また、藤原（2019:16）では「タコ焼き」に関するネーミングの分析が行われている。「タコ焼き」は中国語では〈章鱼小丸子（タコ団子）〉と呼ばれ、人気のある日本食べ物の1つである。なお、一方、日本語では、「焼き鳥」という言い方があるのに対し、「※鳥焼き」とはあまり言わないようである。同じ「焼き」に関する表現でありながらも、語の位置が異なっている。このような現象はほかの命名分野にもあるかを今後さらに調べて行きたい。

8.3 本章のまとめ

本章は、主に二つの面から「命名」について検討してきた。一つ(8.1)では、命名に対する認知観に基づき、茶飲料名の表示性、表現性を巡って分析してみた。もう一つ(8.2)では、化粧品名の命名タイプについて検討した。茶飲料も化粧品もいずれも原材料の一部が植物から取り出されていると言えよう。それらに関する呼び方も豊富で多数である。それぞれは自らの特徴を有している。両者の共通性と言えば、まず、同じ植物カテゴリーに属する。

かつ、人々の日常生活と深く関連している。さらに、現代化のある命名特徴やイメージを人々にもたらず。

したがって、名称上の差異も見られる。茶飲料名について、よりアピールするために、発売された時点では、すでに生産メーカーなどにより、様々なタイプの名称が付けられている。そのため、それらの名付けから、命名の表示性や命名の表現性に関する分析研究を行った。化粧品の名称について、商品そのものの名称は基本普通である。生産メーカーにより特に工夫されていない。しかし、発売されてから、消費者の視点からみていろいろなあだ名が付けられたのである。

なお、本章においてとくに触れていないが、命名論にあたって、「再命名」も面白い現象の一種として、森(2019)では紹介されている。この場で確認してみたいと考える。

従前の言語学の中で考察がされ、認知言語学的なアプローチを用いて捉えなおしが可能なものに再命名という現象がある。

森(2019:613)

森(2019)が挙げられた「人形」という用例を見よう。これは近代より前の日本に存在し、そのように呼ばれていた。西洋より「西洋人形」が入ってきた段階でそれと区別するという観点から「日本人形」という語が用いられたしたのである(森 2019:613)。

また、携帯電話が普及する前の日本では、家やオフィスの常置されている「電話」は、ただ「電話」とだけ呼ばれていた。携帯電話の普及以後「固定電話」という語が用いられ出したのである(森 2019:613)。

森（2019）によれば、上述のような現象を再命名と呼ばれている。また、森（2019）は鈴木（1996）、添田（2005）をもとに、いくつかのパターンを整理して分類している。

国名パターン（主に鈴木 1996 で提示されたもの）

酒→日本酒（洋酒と区別するため）

人形→日本人形（西洋人形と区別するため）

菓子→和菓子（洋菓子と区別するため）

服→和服（洋服と区別するため）

楽→邦楽（西洋音楽と区別するため）

新旧パターン

大学→旧制大学（新制大学と区別するため）

カリキュラム→旧カリキュラム（新カリキュラムと区別するため）

特徴パターン

電話→固定電話（携帯電話と区別するため）

テレビ→白黒テレビ（カラーテレビと区別するため）

テレビ→ブラウン管テレビ（液晶テレビと区別するため）

真・本パターン（主に添田 2005 で提示されたもの）

芋→ホニイモ・マイモ（ジャガイモ、サツマイモと区別するため）

ミリン→本ミリン（ミリン風調味料と区別するため）

綿→真綿（木綿製の綿と区別するため）

再命名は、カテゴリー化の観点から分析することができる、すなわち、あるカテゴリーが拡大したとき、元のカテゴリーを新しく増えた部分と区別するために名づけが行われる現象として捉えることができるのである。「電話」というカテゴリーが「携帯電話」を含んだ形で拡大され、拡大前のカテゴリーに新たに「固定電話」という名がつけられているというのがその一例である。

森（2019：613）

なお、再命名が起きないケースもある。「電動自転車」が出現しても、「自転車」は「自転車」のままであり「人力自転車」とは言わない。また、「電動歯ブラシ」が出現しても「ブラシ」のままであるなどの例があると森（2019）は指摘している。これについては、森（2019）では、「新旧両者の関係が拮抗していないために新たな名づけが起きる必要がないということである」と述べている。

上述のように、再命名に関する先行研究を見た。では本章において検討した茶飲料名、化粧品名との関連付けを考えてみよう。お茶の場合、一番想起しやすいのは、新旧のパターンという再命名である。例えば、中国では、今年度出たばかりお茶を〈新茶〉（新茶）と名付け、その前に出たお茶を〈旧茶〉（旧茶）というのである。また、化粧品のクリームを例としてあげれば、最初は顔用のクリームを単に「クリーム」と言われたことがほとんどであるのに対し、化粧品の開発の進展にしたがい、手に使うクリーム〈护手霜〉（ハンドクリーム）及び首元に使うクリーム〈颈霜〉（ネッククリーム）の誕生も話題になってきた。そして、区別するように、顔用のクリームが〈面霜〉（フェイスクリーム）と呼ばれるようになった。今後、このようなカテゴリー化も含む再命名という角度から命名の魅力さをさらに掘り下げたいと考える。

第9章 結論とまとめ

9.1 本論文の結論とまとめ

本論文では、日中両語における植物に関するメタファー表現、慣用表現を研究対象にし、認知言語学の視点から日中両語の植物に関する各々の表現の相違を見てきた。言い換えれば、認知と言語の相互作用関係を基礎として、認知言語学における日中対照研究を行ったということになる。

第1章の序論部分では、まず、「認知」と「言語学」の関わりを各研究文献に基づきつつ述べ、その上で、本論文の研究目的を示した。それに続き、本論文の研究対象、本論文の考察方法、本論文の構成、及び本論文における期待される研究結果を述べた。

第2章では、本論文全体を支える理論的背景について述べた。最初に、これまでの認知言語学に関する研究の歴史や流れを顧みた。また、本論文に関連する諸キーワードである「認知言語学」、「レトリック」、「メタファー」、「比喩」、「コーパス」、「命名論」などの定義づけを、先行研究を参考にしつつ整理した。

第3章では、靑山(2006a)で提言されている現代日本語における植物を通して人間を見るという4つの見方に基づき、現代中国語の植物の生長過程としての人間に関する様々な表現を考察した。結果として、植物の生長過程に関する言語表現は人間及び人間の様々な営みに使われていることは現代中国語においても見られることが確認できた。要するに、植物の生長過程に関する言葉を通して人間(の営み)を表現するという概念メタファー表現は日中両国の差異がそれほど大きくないといえよう。

一方、上述に加え、日中両語の間に些細な差を提示しなければならないという点も指摘した。本章の後半では、植物の生長過程の一部である「種」/〈种子〉、「開花」/〈开花〉に対する認知的な考察を行った。「種」に対する捉え方について、小さい種は人間の脳の中で、物事の発端(原因)を表すことは普通であるが、中国語の場合、現実的に能力のあ

る人をも表現できると述べた。また、「開花」/〈开花〉の概念レベルの意味合いについて、日本語では「プラスの描写」のみを持つが、中国語の場合、「プラスの描写」を持つのみならず、「マイナスの描写」もあり得るという相違点を示した。このような中国語における〈種子〉または〈开花〉の意味的な生産性は日本語より高いことを確認できた。

第3章の考察を通して、同じ言葉表現（本章では同じ漢字表現を指している）を使っても言語の違いによって異なる捉え方が生じていることを提示した。このような現象が外国語学習者の間でさらにどのような状況として存在しているかを今後の課題として追究したいと考える。

第4章での研究目的は人間（または人間の営み）を表わす植物に関する四字熟語に注目し、それらの会話談話での実際の応用状況を確認することであった。日本語の場合、「連句」、「和歌」などにおける談話のレトリック研究がある。一方、漢語においての特有の言語現象の一種である四字熟語については談話のレトリック研究がほとんどない。四字熟語は、表現上は短くて濃縮されているが、意味上は長い文に負けないほど高度な表現手段となり、覚えやすく人々に様々なイメージを与えるものである。この第4章では、植物に関する四字熟語を考察対象にし、中国語における植物四字熟語が会話談話におかれる場合の使用状況を確認した。（中国語の検索コーパス《北语汉语语料库》（北語漢語語料庫）<http://bcc.blcu.edu.cn/>）を用い、会話談話例を集めた。）中国語の場合、植物に関する四字熟語は概念メタファー《人間は植物》の表現例として成り立つことが可能であるが、会話談話のコンテキストによって、ほとんど使われていない場合も少なくないと判明した。また、四字熟語ごとの応用頻度がそれぞれであると本章を通して明らかにした。本章の最後に、日中の植物四字熟語を比較してみた。それらには独自のものと互いに共通しているものが両国間に存在していることがわかった。

引き続き、第5章では、レトリックにおける比喩性を中心とし、日中両国のことわざを分析した。

まず、武田（1992）の論述を巡って、これまでの先行研究に基づき（特に山梨（1988））、植物の生長段階に関することわざに対する比喩の分析を三つのフレームの観点から扱った。つまり、「ことわざの表現形式」、「ことわざの構成要素」、「ことわざの全体表示と文脈」を通してことわざの比喩を考えてきた。武田（1992）では、隠喩を持つことわざは多

くないと指摘されたが、ここまでの分析でわかるように、この論述は妥当性が欠けている。本章においてことわざの比喻を判断するのにいずれのフレームでも隠喩型のことわざの割合は低くないことが分かった。言い換えれば、隠喩型のことわざは比較的によく存在していることである。

このようなフレームに従い、中国語における植物の生長段階に関することわざの例についても取り上げた。「ことわざの表現形式」から見る場合、日本語では典型的な隠喩を用いることわざが存在するのに対して、中国語の場合、典型的な隠喩のみならず、直喩型のことわざも見られた。また、「ことわざの構成要素」から見る場合、日本語では、換喩と隠喩を用いることわざが見られた一方、中国語では、隠喩を有することわざしか見られなかった。さらに、「ことわざの全体表示と文脈」のフレームでことわざの比喻を捉えると、中国語の用例の中、対句形式のようなことわざが存在し、その類のことわざにおいては、部分的には比喻表現が見られたが、全体表示においては比喻表現であるとは言えないと考えられる。

本章の最後では、植物の生長段階に関する要素の比喻的な機能を見た。日本語の例においては、「種」は「準備」や「苦勞」、「成果」や「収穫」、及び物事の「原因」を表せると確認した。また、「根」は「根本」、「もと」、「根源」という表現に使われていることも明らかであった。これらの共通的な特徴としては、「根」が地面に一番接近しているように、こういう安定さがほかの物事に対してもしっかりと保つことというように移転されていると考えられる。一方、「焼き栗が芽を出す」について、「あり得ないことや不可能と思われることが現実的になる」という意味になり、これは単なる「芽」だけでは、特に何を喩えているか明確ではなかった。これと似ているのは本章においての例(4a)の「石に花咲く」であり、比喻的効果が見られないのであった。なお、「実」に関する二つの例について、人間の「成就」と「知識」を表していることが分かった。「一葉落ちて」の「落葉」は、物事の「前兆」という意味になることも検討した。

これに対し、中国語の用例の場合は、生長要素の中、まず、「種」は「金」にたとえられていて、「種」自体の生長要素としての比喻はあまり見られなかった。一方、「根」の比喻的な機能は日本語の「根」と似ていることを述べた。つまり、中国語の植物の生長段階に関することわざにおいても「根」は日本語のように「もと」を表すことが多かった。また、顕著的に比喻的な機能を有するのは「落ち葉」であり、これは「年を取った人」のたとえであった。

以上のように、本論文の第3章、第4章、第5章は、植物に関わる比喩について、日中両語の対照研究を行ったものである。

第3章で扱ったのは、「種」や「花」というような一般語彙であり、基本は日常でよく見られる短い表現である。「花」で「女性」を表す表現を振り返ってみよう。「女性は花」について、日中を問わずに、「女性の一生の変化を表すことができる」という特徴が認められる。一方、第4章で取り上げた中国語表現である〈花痴〉（花痴）については、「男性に惚れている女性のこと」を指するのがほとんどである。この場合、惚れられる対象は男性であるととも、「花」のように美しく見られていると言える。つまり、ここでの「花」の喩えは逆になり、「男性」を指している。ここから分かるように、「花」の比喩的な機能は「女性」に集中するのみならず、「男性」にまで及ぼすことができると見られる。なお、追加として「花」で「男性」を表す以下の中国語表現例をさらに見てみよう。

〈他很花〉（直訳：彼はとても花々しい）

〈他是个花心男〉（直訳：彼は花心の男だ）

これらの〈花〉または〈花心〉は、実際には同じ意味の表現である。男性が「きれいな女性」を見ると、すぐに夢中になって、好きになることを表す。あるいは、男性が多くの女性と付き合いをして、婚姻や恋愛に専心ではないことを表す。つまり、「男性は花」という概念メタファーが成り立ちながらも、第3章で述べたように、中国語での「花」に関する表現に見られるマイナス評価を持つイメージが、より一層高まるということが分かった。

また、「種」の拡張的な比喩機能を男女に対する喩えから見てみよう。「種」で「女性」を喩える。

〈女孩是种子命〉（直訳：女の子は種の運命だ）

この例文は、特にお年寄りの間でよく聞かれる。中国における古くからの〈重男轻女〉（男尊女卑）という思想から生まれたものである。女性の運命を自分では把握できず、小さい種のように、どこかに撒かれたら、そのところで生長していくというどうしようもない気持ちが生じるということである。

次に、「種」で「男性」を喩える表現も見られる。「男性は種」といえば、〈野种〉（野種）、〈杂种〉（雑種）、〈孬种〉（悪種）などがあげられる。いずれも好ましくない表現であり、私生児（男の子）、心の狭い男を指している場合が多い。

なお、第4章は四字熟語、つまり、四文字からなる慣用表現である。第5章はことわざ

を取り上げたが、ことわざは上記の二つの素材と比べ、比較的長い言語表現である。第4章と第5章は、広範囲での植物が含まれる表現が多数取り上げられた。それらの共通性を言えば、一般語彙、四字熟語、ことわざは、いずれも漢字の含まれる表現であり、かつ、植物属性と関わっているということである。さらにまた、日中両語においてともに使われている表現である。これまでの分析からわかるように、植物に関する語彙表現、四字熟語表現、ことわざ表現の中には、比喩性を有する表現がかなり存在している。これらのさまざまな表現のおかげで、言葉世界がより豊かになっている。なお、この三者の間に、細やかな差異が見られる。もちろん、見た目から言えば、三者の表現自体の長さが異なっている。また、本論文における素材の面から見れば、今回取り上げた語彙表現は、「種」と「花」であり、語彙表現としての考察範囲が限定されている。これに対し、植物に関することわざについては、人間の一生の成長と対照しながら、ことわざ例を取り上げた。主に、「種、根、芽、花、実、葉」という六つの段階から用例を集めたのである。また一方、植物に関する四字熟語について、上に触れた植物語彙だけではなく、比較的広い範囲で用例を集めた。「豆」、「木」などを含む四字熟語も本論文において取り上げた。

ここまでの、第3章から第5章にかけて、章ごとにおける素材の間の共通性と差異を見てきた。男女の差、ジェンダー上の区別も面白い現象である。

第6章では、日本語に関する概念メタファー表現《感情は植物》・《メンタルは植物》について検討したうえで、『筑波ウェブコーパス』を用いて概念メタファー《メンタルは植物》に関する「まだら」問題を考察した。植物の部位である「根+（助詞）」と「形容詞」との組み合わせで、《メンタルは植物》を成すことが可能である一方、パターンによって、それらの度合いも異なっていることが分かった。結論を言えば、「まだら」問題が《メンタルは植物》の中にも存在していることが明らかになったということである。

また、本章での調査データによれば、「根+（助詞）」+「普通の形容詞」（感情や性格を表す形容詞ではないパターン）の組み合わせからなった《メンタルは植物》の表現の中で容認度の高いものも少なくなかった。概念メタファー《メンタルは植物》に対し、「感情や性格を表す形容詞」はメンタルを表すのに必ずしも有利だとは言えないと考えられる。

さらに、第6章で取り扱ったデータに限り、日常で馴染みのある慣用的な「根深い」に関する用例は見当たらなかった。これに対し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』「少

納言」のデータでは、「根深い動揺」、「根深い不満」など、《メンタルは植物》に関する表現は確かに存在する。これはいわばデータを処理する際、各コーパスの自らの特性を反映していると言える。

第7章では、日本語を学んでいる中国語母語話者を調査対象とした。具体的には、中国人若年層日本語教師を対象に、日本語メタファー表現（日本語における植物に関する概念メタファー表現）に対する解釈（理解）のアンケート調査を行い、中国人日本語教師のメタフォリカル・コンピテンス及びメタファー表現理解に影響を及ぼす原因を考察した。このアンケート調査では、8つのメタファー表現について、それぞれタイプ1、タイプ2に置かれた場合の解釈を13名の中国人日本語教師に回答してもらった。アンケート調査の結果として、全部で208件の回答数があり、その中で、「正解」となったのはタイプ1が33件で、タイプ2が34件、合わせて67件であった。結果的に、中国人若年層日本語教師のメタフォリカル・コンピテンスはそれほど高くない現状（平均正解率 32.21%）であることが分かった。本調査での被験者は地域的に広い範囲（南京市、無錫市、蘇州市、ハルビン市、湖北省、四川省、山東省など）から集めた若年層日本語教師であったため、今回の調査結果は中国広範囲でのメタファー学習現状の一つの反映とも見られるという点を章のまとめのところに記した。また、第7章では、具体例を通して、中国人日本語学習者（被験者）によるメタファー解釈のずれについても述べた。日本語学習者にとって、意識的に語に対する文化的背景知識を拡張することと、異文化間コミュニケーションに対する民族性を重視すること、両方とも重要であると指摘した。これは第二言語教育に示唆を与えられる可能性がある。

本論文の第8章では、命名に関する各理論を援用し、中国語における茶飲料名、化粧品名、という点から、命名の技法やそれに関するレトリック効果を明らかにした。

まず、8.1節では、日中両国の先行研究をもととして、中国語における茶飲料の名称に関する考察を行った。本章で取り扱った茶飲料の名称はそれぞれ「ブランド名」、「シリーズ名」、「商品名」という3つの段階からなっている。8.1節では対応する段階での名称の「表示性」や「表現性」を巡って検討を行った。そのなかで、「ブランド名」、「シリーズ名」は本来集団性を持つため、各名称に表示性の存在状況を確認した。一方、独自性を持つ「商品名」に対し、「表示性」と「表現性」の両方からの分析を行った。結果的

に、中国語茶飲料の名称のなか、「表現性」を有する商品名より「表示性」を有する商品名のほうが多いことが分かった。また、この節では、吉村（1995）、森（2020）で提示された命名モデルをうけ、茶飲料における商品名を命名モデル理論と繋げてみたが、代表例はあまり多くなかった。

中国語茶飲料名の考察に続き、8.2 節では、日本系、欧米系化粧品（ブランド或いは具体的な品目）に対する中国語のあだ名をも分析した。化粧品に関するあだ名付けの動機づけは様々な面から見られる一方、化粧品は植物成分がベースで作られたにもかかわらず、ブランドの本来の名前も、ブランドを巡るあだ名も植物の名称とあまり関係ないようであった。本節で挙げた用例の中では、僅か2件の化粧品のあだ名が植物と繋がっていると見られた。それは、化粧品ブランドである「LAMER」（腊梅（ろう梅））及び化粧品品目の口紅である「Christian Louboutin」（萝卜头（大根のヘッド））である。

なお、8.2 節の考察で取り上げた化粧品のあだ名の中では、「外観のデザインと色による命名」が最も多く占めていることが分かった。これは、藤原（2019）の述べる特徴「外見上の特徴は見ればすぐ認知できるので、顕現特性として認知しやすく、ネーミングとしての焦点が当たりやすい」と合致していると考えられる。また、福留奈美・松浦光（2022）で言及されている「百科事典的知識」は命名に関与しているという点については、〈许三多（許三多）〉や〈杨树林（楊樹林）〉という化粧品のあだ名は中国のタレントに背景的な知識がなければ、なかなか想像し難いということが指摘できる。8.2 節の最後に、化粧品に対す中国語のあだ名について、それほど美しい呼び方ではないかもしれないと思われるが、「あだ名」の定義づけに相応するのではないかと述べた。同じものを指しているのに、対立したイメージスキーマこそ、消費者に、より強いインパクトを与えると指摘した。

9.2 今後の課題

本論文では、「植物」というキーワードを軸として、「各概念メタファー表現」、「四字熟語」、「ことわざ」、「日本語メタファー表現に対する比喩解釈」、「命名」という多様な面から、認知言語学における日中両語の表現上の相違を考察したが、今後は以下の3点を課題にしたいと考える。

①第5章では、日本語における植物の生長段階に関することわざの比喩を確認した上で、

中国語のことわざとの対照を行った。日中両語の対照を通して、比喻上に共通している部分とずれている部分が存在するということが分かった。そういう相違が生じた原因はことわざを構成する各要素の意味的な解釈が異なる場合があるからである。もちろん、このような意味的なずれの認知的な考察は第3章（「種」〈种子〉；「開花」〈开花〉を巡って）にも触れて考察したが、カテゴリー上の種類としてまだ範囲が狭いと考える。今後、より広い分野での対照研究をする必要があると考える。

②すでに述べたように、第6章では、『筑波ウェブコーパス』〈<http://corpus.tsukuba.ac.jp>〉を用いて調査を行った。ただし、『筑波ウェブコーパス』〈<http://corpus.tsukuba.ac.jp>〉で取り扱ったデータによれば、日常で馴染みのある慣用的な「根深い」に関する用例は見当たらなかった。一方、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』〈<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>〉のデータでは、「根深い動揺」、「根深い不満」など、「メンタルは植物」に関する表現は存在していた。つまり、データが処理される際、各コーパスの自らの特性を反映しているという点が指摘できる。今後、異なるコーパスの特徴や機能などに関する比較研究もしてみたい。

③中国人母語話者が日本語メタファー表現に対する比喻解釈の研究を第7章で行った。これに対し、中国語を学んでいる日本人学習者が中国語メタファー表現に関して、どのように解釈し、理解しているかということも、興味深い問題である。

参考文献

研究書籍・論文

- 足田輝一 (1995) 『植物ことわざ事典』東京堂 東京
- 荒川洋平・森山新 (2009) 『日本語教師のための応用認知言語学：わかる!!』凡人社 東京
- 有蘭智美 (2016) 「日本語母語話者による英語の名詞転換動詞解釈とフレーム」『日本認知言語学会論文集』16 pp. 530-535
- 石田プリシラ (2015) 『言語学から見た日本語と英語の慣用句』開拓社 東京
- 王安 (2013) 「主体化」 森雄一・高橋英光 (編) 『認知言語学基礎から最前線へ』くろしお出版社 東京 pp. 181 - 202
- 大石亨 (2010) 「「植物」のメタファー再考—慣用表現に付随する意味的韻律と主観性」『日本認知言語学会論文集』10 pp. 149-159
- 大森文子 (2004) 「認知・談話・レトリック」大堀壽夫 (編) (2004) 池上嘉彦・河上誓作・山梨正明[監修]『シリーズ認知言語学入門第6巻 認知コミュニケーション論』大修館書店 東京 pp. 161 - 210
- 笠貫葉子 (2013) 「メタファー」 森雄一・高橋英光 (編) 『認知言語学基礎から最前線へ』くろしお出版社 東京 pp. 53-76
- 清海節子 (2022) 「ネーミングと表記：商品を表す文字・符号・数字の視覚的效果」『駿河台大学論叢』62 pp. 17-34
- 窪菌晴夫 (2008) 『ネーミングの言語学—ハリー・ポッターからドラゴンボールまで—』開拓社 東京
- 小西甚一 (1998) 『日本文藝の詩学：分析批判の試みとして』みすず書房 東京
- 小松原哲太 (2016) 『レトリックと意味の創造性 言葉逸脱と認知言語学』京都大学学術出版会 京都
- 近藤浩文 (1982) 『植物故事ことわざ』保育社 大阪
- 後藤秀貴 (2018) 「〈感情は液体〉メタファーの成立基盤と制約—概念メタファーの「まだら」をめぐる—」 鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰 (編) 『メタファー研究』1

- ひつじ書房 東京 pp. 195-230
- 坂原茂 (2000) 「まえがき」坂原茂 (編) (2000) 『認知言語学の発展』ひつじ書房 東京
- 佐藤信夫 (1992a) 『レトリック感覚』 講談社学術文庫 東京
- 佐藤信夫 (1992b) 『レトリック認識』 講談社学術文庫 東京
- 鐘勇 (2013) 「中国人日本語学習者のメタファー表現理解に影響する要因：母語とメタファー基盤に関わる知識を中心に」 『比較社会文化研究』 34 pp. 1-14
- 鐘勇 (2015) 「中国人日本語学習者のメタファー表現理解力の養成：授業実践例に基づく考察」 『言語文化論究』 34 pp. 35-51
- John R. Taylor・瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』大修館書店 東京
- 瀬戸賢一 (2002) 『日本語のレトリック 文章表現の技法』岩波書店 東京
- 銭秀双 (2019) 「概念メタファー<<人間は植物>>の日中対照研究」 『日本認知言語学会論文集』19 pp. 435-441
- 銭秀双 (2020) 「中国語母語話者による日本語メタファー表現の比喩解釈」 『日本語用論学会論文集』15 pp. 65-72
- 高橋弥守彦 (2017) 『中日対照言語学概論ーその発想と表現ー』 日本僑報社 東京
- 武田勝昭 (1992) 『ことわざのレトリック』 海鳴社 東京
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』 研究社 東京
- 段静宜 (2018a) 「身体性に基づく「人間は植物」の概念メタファーに関する認知言語学的研究」 日本語用論学会メタファー研究会 口頭発表
- 段静宜 (2018b) 「花に関するメタファーの創造性と認知プロセスについての考察ー「女性は花」のメタファーを中心に」 日本語用論学会メタファー研究会 口頭発表
- 辻幸夫 (1991) 「カテゴリー化の能力と言語」 『言語』20 10 pp. 46-53
- 辻幸夫 (編) (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』 研究社 東京
- 中村明 (1991) 『日本語レトリックの体系』 岩波書店 東京
- 中本敬子・李在鎬 (編) (2011) 辻幸夫[監修] 『認知言語学研究の方法』 ひつじ書房 東京
- 鍋島弘治朗 (2003) 「メタファーと意味の構造的性ープライマリーメタファーおよびイメージ・スキーマの関連から」山梨正明他 (編) 『認知言語学論考 No. 2』 ひつじ書房 東京 pp. 25-109

- 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』 くろしお出版 東京
- 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』 ひつじ書房 東京
- 樋口・大橋 (2004) 「節を越えて：思考を紡ぐ情報構造」大堀壽夫 (編) (2004) 池上嘉彦・河上誓作・山梨正明[監修] 『シリーズ認知言語学入門第6巻 認知コミュニケーション論』大修館書店 東京 pp. 101 - 136
- 平賀正子 (1997) 「品物としての女—メタファーにみられる女性観—」 『日本語学』 明治書院 東京 pp. 114-129
- 福留奈美・松浦光 (2022) 「和菓子の命名における認知的基盤—百科事典的知識を通じた文化理解に向けて—」 『日本語用論学会 第24回大会発表論文集』 17 pp. 123-130
- 藤原正道 (2019) 「食べ物の名付けについての認知意味論的考察その2」 『実践女子大学短期大学部紀要』 40 pp. 11-18
- 松浦光 (2017) 「現代日本語における気象現象の概念化—概念メタファー理論によるアプローチ—」 名古屋大学大学院 博士学位論文
- 松木啓子 (2004) 「ディスコースと文化の意味」大堀壽夫 (編) (2004) 池上嘉彦・河上誓作・山梨正明[監修] 『シリーズ認知言語学入門第6巻 認知コミュニケーション論』大修館書店 東京 pp. 211 - 241
- 松本曜 (2006) 「語におけるメタファー的意味の実現とその制約」山梨正明他 (編) (2006) 『認知言語学論考 No. 6』 ひつじ書房 東京 pp. 49-93
- 榎山洋介 (1997) 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に」 『名古屋大学国語国文学』 80 pp. 29-43
- 榎山洋介 (2006a) 「「人間」の捉え方と言語表現 (4) —植物としての人間 (再考) —」 『名古屋大学日本語・日本文化論集』 13 名古屋大学留学生センター pp. 87-115
- 榎山洋介 (2006b) 『日本語は人間をどう見ているか』 研究社 東京
- 榎山洋介 (2009) 『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』 研究社 東京
- 森岡健二・山口仲美 (1985) 『命名の言語学：ネーミングの諸相』 東海大学出版社 東京
- 森雄一 (1996) 「植物としての心—上代日本語における構造的メタファー—」 『山口明穂教授還暦記念国語学論集』 明治書院 東京 pp. 53-67
- 森雄一 (2011) 「隠喩と提喩の境界事例について」 『成蹊國文』 44 pp. 150-143
- 森雄一 (2012) 『学びのエクササイズ レトリック』 ひつじ書房 東京
- 森雄一 (2015) 「命名論における表示性と表現性—米の品種名を題材に—」 『成蹊國文』

48 pp. 162 - 170

森雄一 (2019) 「命名論と認知言語学」『認知言語学大事典』辻幸夫 (編) (2019) 朝倉書店 東京 pp. 609-616

森雄一 (2020) 「認知意味論の試み—表示性・表現性と命名認知モデル—」米倉よう子・山本修・浅井良策 (編) (2020) 『ことばから心へ—認知の深淵—』開拓社 東京 pp. 245-254

山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京大学出版社 東京

山梨正明 (2019) 「認知言語学と認知科学」辻幸夫ら (編) (2019) 『認知言語学大事典』朝倉書店 東京 pp. 19-30

吉村公宏 (1995) 『認知意味論の方法 経験と動機の言語学』人文書院 京都

その他の言語文献

Alice Deignan (2005) *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝 (訳) (2010) 『コーパスを活用した認知言語学』大修館書店 東京)

Barbara Dancygier・Eve Sweetser (2014) *Figurative Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (野村益寛ら (訳) (2021) 『「比喩」とは何か: 認知言語学からのアプローチ』開拓社 東京)

陈晦 (2014) 〈“植物是人” 概念隐喻在汉英植物名中的投射〉《外国语文》30 5 pp. 81-87.

陈朝阳 (2015) 〈日语专业学习者隐喻能力实证研究〉《语文学刊 (外语教育教学)》10 pp. 113-114

George Lakoff (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他 (訳) (1993) 『認知意味論: 言語から見た人間の心』紀伊國屋書店 東京)

George Lakoff (1990) “The Invariance hypothesis: Is abstract reason based on image schemas?.” *Cognitive Linguistics* 1 pp. 39-74. (杉本孝司 (訳) (2000) 「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?—」坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』ひつじ書房 東京)

George Lakoff and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of

- Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986) 『レトリックと人生』
大修館書店 東京)
- George Lakoff and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago :University of
Chicago Press. (何文忠 译 (2015) 《我们赖以生存的隐喻》 浙江大学出版社 杭州)
- George Lakoff and Mark Truner (1989) *More than Cool Reason A Field Guide to Poetic
Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press. (大堀俊夫 (訳) (1994) 『詩と
認知』 紀伊國屋書店 東京)
- 汉语大字典编纂处 (编) (2018) 《成语有意思・植物世界》四川辞书出版社 成都
- John R. Taylor (2002) *Cognitive grammar*. Oxford:Oxford University Press.
- John R. Taylor (2003) *Linguistic categorization*. Oxford:Oxford University Press. (辻
幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実 (訳) (2008) 『認知言語学のための14章
第3版』 紀伊國屋書店 東京)
- Kövecses zoltán (2002) *Metaphor: A practical introduction*. Oxford:Oxford University
Press.
- Littlemore, J. (2001) “Metaphoric intelligence and foreign language learning.”
Humanising Language Teaching Magazine 3 (2)
- Littlemore, J. (2003) “The Effect of Cultural Background on Metaphor Interpretation.”
Metaphor and Symbol 18 4 pp. 273-288
- Littlemore, J., Chen, P. T., Koester, A. and Barnden, J. (2011) “Difficulties in Metaphor
Comprehension Faced by International Students whose First Language is not
English.” *Applied Linguistics* 32 4 pp. 408-429
- Littlemore, J., S. Arizono and A. May. (2016) “The interpretation of metonymy by Japanese
learners of English.” *Review of Cognitive Linguistics* 14 1 pp. 51-72
- 刘晓莉[他] (2022) 《成语里的博物学・植物》未来出版社 西安
- 罗晓燕・葛俊丽 (2010) 〈植物隐喻映射下的汉英情感叙事〉《浙江工业大学学报》9 1 pp. 91-96
- 马鸣春 (1987) 〈人名跟植物名配合运用的修辞效果〉《青海民族学院学报》4 pp. 28-33
- 孟守介 [他] (1990) 《汉语谚语词典》北京大学出版社 北京
- Osherson, Daniel, N and Lasnik Howard (edit) (1990) *An Invitation to cognitive science
1 Language*. Cambridge, Massachusetts : MIT Press
- Raymond W. Gibbs Jr (1990) *The poetics of mind : figurative thought, language, and*

- understanding. Cambridge : Cambridge University Press. (辻幸夫・井上逸兵[監訳]
小野滋・出原健一・八木健太郎(訳) (2008) 『比喩と認知 心とことばの認知科学』
研究社 東京
- 譚宏娇・雷会营(2020) 〈现代汉语植物名的语言认知分析〉《长春大学学报》30 9 pp. 41-46
- 田运(1996) 《思维辞典》浙江教育出版社 杭州
- 王寅(2007) 《认知言语学》上海外语教育出版社 上海
- 宗豪(2002) 《谚语新编》广西民族出版社 南宁
- 张凌(2015) 〈略论动植物命名的服装商标词的文化内涵〉《轻工科技》7 pp. 109-110

辞書

- 飯間浩明(2018) 『小学館 四字熟語を知る辞典』 小学館
『岩波国語辞典』第7版(2011) 岩波書店
『広辞苑』第6版(2008) 岩波書店
『広辞林』第6版(1984) 三省堂
『新潮現代国語辞典』第2版(2000) 新潮社
『新明解国語辞典』第5版(1997) 三省堂
『新明解国語辞典』第7版(2012) 三省堂
『新明解四字熟語辞典』第2版(1998) 三省堂
- 時田昌瑞(2000) 『岩波ことわざ辞典』 岩波書店
『日本国語大辞典』第2版(2000) 小学館
《现代汉语词典》第5版(2005) 商务印书馆

調査資料

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)
(使用期間 2016年4月-2023年10月)

『ことわざ辞典オンライン』

〈<https://kotowaza.jitenon.jp/>〉

(使用期間 2016年4月－2023年10月)

筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所 『NINJAL - LWP for TWC』

〈<http://corpus.tsukuba.ac.jp>〉

(使用期間 2016年4月－2023年10月)

『デジタル大辞泉』

〈<https://dictionary.goo.ne.jp>〉

(使用期間 2016年4月－2023年10月)

『日本語日常会話コーパス』

〈chunagon.ninjal.ac.jp〉

(使用期間 2016年4月－2023年10月)

〈<https://www.webl.io>〉

(使用期間 2016年4月－2023年10月)

《北语汉语语料库》

〈<http://bcc.blcu.edu.cn/>〉

(使用期間 2016年4月－2023年10月)

《民间谚语大全》

〈<http://t.shznw.net/yanyu>〉

(使用期間 2016年4月－2023年10月)

謝 辞

本論文は成蹊大学大学院文学研究科博士後期課程在学中および満期退学後に取り込んだ研究をまとめたものです。ここまで何とか諦めずに研究を続けてこられ、多くの方々のおかげです。

博士前期課程と後期課程においてわたくしの指導教員であった森雄一教授から暖かいご指導を受け賜りました。3年間コロナ禍の中、森先生とお会いすることができなく、そのかわりに、多数いただいたメールが森先生の暖かいご指導の結晶です。心に銘記しております。森先生のご丁寧なご指導がなければ、本論文を完成することができませんでした。また、森先生のご指導のおかげで、専門的な知識や研究方法を身につけることができました。誠に心より感謝を申し上げます。

予備論文の審査において、成蹊大学の久保田篤教授、岡部嘉幸教授、平野多恵教授から丁寧なご指導を受けました。深く感謝申し上げます。

関連専門分野の各研究学会でお世話になった皆様にお礼を申し上げます。とりわけ学会で有菌智美先生、多門靖容先生、鍋島弘治朗先生、半沢幹一先生にいろいろご貴重なご助言をいただき、感謝申し上げます。

松浦光氏は先輩として、常に「互いに切磋琢磨しましょう」と前向きに励ましてくれました。誠にありがとうございます。

留学生であったわたくしは、成蹊学園国際課の方々にもたくさんのご支援をいただきました。いつも相談にのってくださって、誠にありがとうございます。また、独立行政法人

日本学生支援機構（JASSO）、長谷川留学生奨学財団、三菱商事留学生奨学金より経済面のご支援のおかげで、日本滞在中、安定した研究生生活を過ごせました。

学部時代の先生に「ありがとうございます」と申し上げたいです。

本論文においてアンケート調査を行いました。アンケート調査に応援してくださった中国人日本語学習者の皆にも感謝申し上げます。ご協力ありがとうございました。

日本にいる親戚や友人がいつもたくさんのアドバイスや応援をくれて、暖かく感じられます。

最後に、いつも支えてくれた家族に感謝します。私のよりどころです。

2023年11月30日 銭 秀双